

し せき むか さ じょうあと
史跡 穂佐城跡 I

穂佐城跡保存整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

史跡 穂佐城跡 I

二〇一三



2013

宮崎市教育委員会

し せき むか さ じょうあと
史跡 穂佐城跡 I

穆佐城跡保存整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2013

宮崎市教育委員会

序

国指定史跡穆佐城跡は、文献の記述から宮崎県内においても古くから存在していたことが明らかになっている山城です。その存続期間は南北朝時代から近世初頭まで、約280年に及び、南九州の中世史を語る上で重要な位置を占めています。南北朝時代には北朝方の九州の拠点的城郭となり、その後は度々島津氏と伊東氏との戦場の舞台になりました。また、その当時の堀や土塁、曲輪などの遺構が現在まで良好な形で残されていることが評価され、平成14年3月19日に国指定史跡に指定されています。

宮崎市では現在、「宮崎市城跡保存整備専門委員会」を設置し、指導を受けながら穆佐城跡の保存整備事業を推進しています。また平成23年度から、現地説明会と城跡の散策を融合した「歴史散歩inむかさ」を開催し、地域の貴重な遺産である穆佐城跡の活用も図っているところです。今後も発掘調査や普及活動を継続的に行い、穆佐城の歴史を解明しながら、市民の皆様に親しまれる史跡整備を進めてまいりたいと考えています。

最後に、発掘調査にあたりご協力いただきました関係機関の皆様、ご指導、ご教示をいただきました諸先生方、発掘調査に従事された作業員の皆様など、関係者の皆様に心より厚くお礼申し上げます。

平成25年3月

宮崎市教育委員会
教育長 二見 俊一

例　　言

1. 本書は、平成18~23年度に実施した国指定史跡「穆佐城跡」の保存整備事業に伴う発掘調査の報告書である。
2. 平成18~21年度調査分に関しては、概要報告書を刊行しているが、本書の内容と齟齬がある場合は本書の記載を正式なものとする。
3. 宮崎市城跡保存整備専門委員会
委員長 谷口義信（宮崎大学名誉教授）
委員 伊藤 哲（宮崎大学教授）
包清博之（九州大学教授）
千田臺博（奈良大学教授）
三木 靖（鹿児島国際大学名誉教授）
八巻孝夫（中世城郭研究会）
横田 漢（宮崎大学名誉教授）
整備指導 文化庁記念物課
宮崎県教育庁文化財課

4. 調査組織

調査主体 宮崎市教育委員会

(18年度)

文化振興課	課長	野田 清孝	文化財課	課長	田村 泰彦
文化財係	主幹兼係長	山田 典嗣	埋蔵文化財係	副主幹兼係長	富永 英典
予算執行	主任主任事務官	鳥枝 誠	整備担当	主任主任事務官	森田 浩史
調査員	主任主任事務官	島田 正浩	予算執行	主任主任事務官	戸高 佑輔
(19年度)			調査員	主任技術師	石村 友規
文化振興課	課長	野田 清孝		嘱託	川野 誠也
文化財係	主幹兼係長	山田 典嗣	(23年度)		
整備担当	主任技術師	今城 正広	文化財課	課長	田村 泰彦
予算執行	主任主任事務官	鳥枝 誠	埋蔵文化財係	副主幹兼係長	富永 英典
調査員	主任主任事務官	石村 友規	整備担当	主任主任事務官	森田 浩史
(20年度)			予算執行	主任主任事務官	岩切 瞳
文化財課	課長	小掠 聖	調査員	主任技術師	石村 友規
埋蔵文化財係	主幹兼係長	山田 典嗣		嘱託	川野 誠也
整備担当	主任主任事務官	森田 浩史	(24年度)		
予算執行	主任主任事務官	松崎 留美	文化財課	課長	田村 泰彦
調査員	主任主任事務官	石村 友規	埋蔵文化財係	副主幹兼係長	島田 正浩
	嘱託	島井 伸幸	整備担当	主任幹事	森田 浩史
(21年度)			予算執行	主任主任事務官	岩切 瞳
文化財課	課長	永井 淳生	調査員	主任技术師	石村 友規
埋蔵文化財係	副主幹兼係長	富永 英典		嘱託	川野 誠也
整備担当	主任主任事務官	森田 浩史			
予算執行	主任主任事務官	松崎 留美			
調査員	主任主任事務官	石村 友規			
	嘱託	鈴木 弘子			

5. 現地における空中写真撮影は、有限会社スカイサーバイ九州に、自然科学分析は株式会社古環境研究所に委託した。
6. 掲載した遺構図面の実測は石村・島井・鈴木・川野が、遺物図面の実測は石村、整理嘱託、整理作業員が行い、製図・図版の作成は石村、整理嘱託が行った。
7. 本書の執筆、編集は石村を行った。
8. 現地調査において宮崎市立穆佐小学校、龍公民館を始め関係者各位のご協力を得た。
また以下のの方々からご教示、ご指導を賜った。(順不同)
大橋康二氏（佐賀県立九州陶磁資料館）、福田泰典氏（宮崎県立西都原考古博物館）、堀田孝博氏（宮崎県教育庁文化財課）

目次

第Ⅰ章 遺跡の位置と環境

1. 地理的環境	1
2. 歴史的環境	1

第Ⅱ章 穂佐城跡の概要

1. 穂佐城の歴史	4
2. 穂佐城の地形	5

第Ⅲ章 調査に至る経緯と経過

1. 調査に至る経緯	7
2. 既往の調査	7

第Ⅳ章 曲輪20の調査成果

1. 調査位置と目的	9
2. 曲輪20の基本層序	10
3. 調査の概要	11
4. 主要遺構の調査成果	14
5. 出土遺物	18
6. 小結	25

第Ⅴ章 曲輪7の調査成果

1. 調査位置と目的	26
2. 曲輪7の基本層序	27
3. 調査の概要	27
4. 遺構の調査成果	31
5. 出土遺物	49
6. 小結	61

第VI章 曲輪8の調査成果

1. 調査位置と目的	62
2. 曲輪8の基本層序	62
3. 調査の概要	62
4. 遺構の調査成果	65
5. 出土遺物	85
6. 小結	104

第VII章 総括

1. 総括	105
-------	-----

写真図版

写真図版1	曲輪7・8調査区垂直写真	107
写真図版2	曲輪20調査写真	108
写真図版3	曲輪20調査写真	109
写真図版4	曲輪7調査写真	110
写真図版5	曲輪7調査写真	111
写真図版6	曲輪7調査写真	112
写真図版7	曲輪7調査写真	113
写真図版8	曲輪8調査写真	114
写真図版9	曲輪8調査写真	115
写真図版10	曲輪8調査写真	116
写真図版11	曲輪8調査写真	117
写真図版12	曲輪20出土遺物	118
写真図版13	曲輪7出土遺物	119
写真図版14	曲輪7出土遺物	120
写真図版15	曲輪8出土遺物	121
写真図版16	曲輪8出土遺物	122

指図目次

第1図	穂佐城跡周辺主要遺跡位置図	3
第2図	穂佐城跡地形測量図	6
第3図	穂佐城跡縄張り図	8
第4図	曲輪20調査区配置図	9
第5図	曲輪20基本層序模式図	10
第6図	曲輪20遺構配置図	12
第7図	曲輪20-1トレンチ土壙断面図	13
第8図	曲輪20土坑実測図1	15
第9図	曲輪20土坑・炉・ピット実測図	16
第10図	曲輪20堀上層断面図	17
第11図	曲輪20出土遺物実測図	19
第12図	曲輪20出土遺物実測図	20
第13図	曲輪20出土遺物実測図	21
第14図	曲輪20出土遺物実測図	22
第15図	曲輪7基本層序模式図	27
第16図	曲輪7遺構配置図	28
第17図	曲輪7東西方向土壙断面図	29
第18図	曲輪7トレンチ土壙断面図	30
第19図	曲輪7掘立柱建物1実測図	32
第20図	曲輪7掘立柱建物2実測図	33

第21図 捜立柱建物 3 実測図	34	第63図 曲輪 8 出土遺物実測図 3	88
第22図 曲輪 7 土坑実測図 1	35	第64図 曲輪 8 出土遺物実測図 4	89
第23図 曲輪 7 土坑実測図 2	37	第65図 曲輪 8 出土遺物実測図 5	91
第24図 曲輪 7 土坑実測図 3	38	第66図 曲輪 8 出土遺物実測図 6	92
第25図 曲輪 7 土坑実測図 4	39	第67図 曲輪 8 出土遺物実測図 7	94
第26図 曲輪 7 溝 1 実測図	40	第68図 曲輪 8 出土遺物実測図 8	95
第27図 曲輪 7 中央堀実測図	41	第69図 曲輪 8 出土遺物実測図 9	96
第28図 曲輪 7 出入口平面図	43	第70図 曲輪 8 出土遺物実測図10	97
第29図 曲輪 7 出入口土層断面図	44	第71図 曲輪 8 出土遺物実測図11	98
第30図 曲輪 7 出入口縛・遺物出土状況図	44	第72図 曲輪 8 出土遺物実測図12	99
第31図 曲輪 7 出入口(東端堀)土層断面図	45		
第32図 曲輪 7 上層出入口廐棄縛実測図	45		
第33図 曲輪 7 東端堀・通路状造構実測図	46		
第34図 曲輪 7 土壙トレンチ土層断面図	48		
第35図 曲輪 7 出土遺物実測図 1	50	第 1 表 曲輪20出土遺物観察表 1	23
第36図 曲輪 7 出土遺物実測図 2	51	第 2 表 曲輪20出土遺物観察表 2	24
第37図 曲輪 7 出土遺物実測図 3	52	第 3 表 曲輪 7 出土遺物観察表 1	58
第38図 曲輪 7 出土遺物実測図 4	53	第 4 表 曲輪 7 出土遺物観察表 2	59
第39図 曲輪 7 出土遺物実測図 5	54	第 5 表 曲輪 7 出土遺物観察表 3	60
第40図 曲輪 7 出土遺物実測図 6	56	第 6 表 曲輪 8 出土遺物観察表 1	100
第41図 曲輪 7 出土遺物実測図 7	57	第 7 表 曲輪 8 出土遺物観察表 2	101
第42図 曲輪 8 造構配置図	63	第 8 表 曲輪 8 出土遺物観察表 3	102
第43図 曲輪 8 土層断面図	64	第 9 表 曲輪 8 出土遺物観察表 4	103
第44図 曲輪 8 捜立柱建物 1 実測図	65		
第45図 曲輪 8 捜立柱建物 4 実測図	66		
第46図 曲輪 8 土坑実測図 1	67		
第47図 曲輪 8 土坑実測図 2	68		
第48図 曲輪 8 土坑実測図 3	70		
第49図 曲輪 8 土坑実測図 4	71		
第50図 曲輪 8 土坑実測図 5	73		
第51図 曲輪 8 溝 1・2・通路状造構平面図	74		
第52図 曲輪 8 溝 1・2・通路状造構土層断面図	75		
第53図 曲輪 8 溝 3・15 実測図	77		
第54図 曲輪 8 溝 4・5・8・9・10・11 実測図	78		
第55図 曲輪 8 溝 12・13・14 実測図	79		
第56図 曲輪 8 集縛平面図	80		
第57図 曲輪 8 集縛土層断面図	81		
第58図 曲輪 8 その他遺構実測図	82		
第59図 曲輪 7・8 構通路平面図	83		
第60図 曲輪 7・8 構通路土層断面図	84		
第61図 曲輪 8 出土遺物実測図 1	86		
第62図 曲輪 8 出土遺物実測図 2	87		

表目次

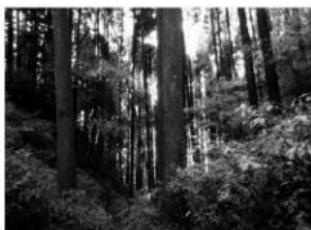
第Ⅰ章 遺跡の位置と環境

1. 地理的環境

穆佐城跡が所在する宮崎市は、宮崎県の中央からやや南寄りに位置し、日向灘から内陸部へと市域が広がっている。市のほぼ中央を都城盆地の南、鰐塚山地の中岳を源流にもつ大淀川が流れおり、この大淀川の堆積作用によって形成された沖積地上に市街地が営まれている。穆佐城跡はこの宮崎市街地の西側に位置し、大淀川の支流である瓜田川の右岸に所在する西から東へと舌状に伸びる、最高所で標高60mほどの丘陵上に立地する。この丘陵は基盤層である宮崎層群の上にシラス（AT）を始めとする火山噴出物が堆積することによって形成されている。またこの宮崎層群とシラス層の境界からは複数の地点で渴水時でも枯れがない湧水があり、現在でも生活用水として活用されている。丘陵の北側は瓜田川が東流し、西側では丘陵が100m以上の山塊へと連なり、南、東側には麓川が流れ、自然の要害となっている。また周囲の水田との比高差は最高所でも45m程度と大きな値ではないが、シラス台地の特有の急峻な崖面により十分な防御機能を有している。



穆佐城防位置
—大淀川下流域を望む—



堀切II
—穆佐城跡最大の堀切—

穆佐城跡からの眺望は特に北から東方向、大淀川下流域方向に優れている。その中でも北東方向には、約4kmの位置に倉岡城跡、約9kmの位置に宮崎城跡が所在し、各々を望むことができる。その一方で南から西方向、大淀川上流域方向の眺望は優れているとは言い難く、麓川によって形成された小谷を挟んだ南側は、田野町との境界から広がる山々が眺望を遮り、西方向にもその山が半島状に突き出しているため眺望が遮られている。また大淀川の対岸、北西方向には同じ中世城郭である天ヶ城跡（内山城跡）が所在するが、両城郭間には台地が存在するため眺望が良好とは言い難い。このように穆佐城跡の眺望は北から東方向、つまり穆佐城跡から見て大淀川下流域方向に特化しており、その地をにらんだ立地といえる。

2. 歴史的環境

穆佐城跡の周辺では旧石器時代から近世に至るまでの遺跡が確認されている。

旧石器時代 旧石器時代の遺跡は穆佐城跡の西方に位置する小山田、高浜地区にまたがる河岸段丘上に立地する高野原遺跡第4地点、永追第1遺跡、永追第2遺跡において始良丹沢火山灰下位の遺物と疊群が確認されている。また永追第1、第2遺跡においては始良丹沢火山灰上位の遺物も確認されている。

縄文時代 縄文時代の遺跡も河岸段丘上、台地上において確認されている。草創期は穆佐城跡

の近接地では確認されていないが、小林市野尻町との境界に近い茶屋原遺跡において爪形文土器が出土している。早期になると高野原遺跡、永迫第1遺跡、第2遺跡、的野遺跡、大淀川対岸に立地する天ヶ城跡、橋山第1、第2遺跡、橋上遺跡など調査事例が飛躍的に増加する。前期は永迫第1、第2遺跡で轟B式、曾畠式が出土している。中期は穆佐城跡の近接地では確認されていない。後期は的野遺跡や橋山第1遺跡、晩期は学頭遺跡において黒色磨研土器が出土している。

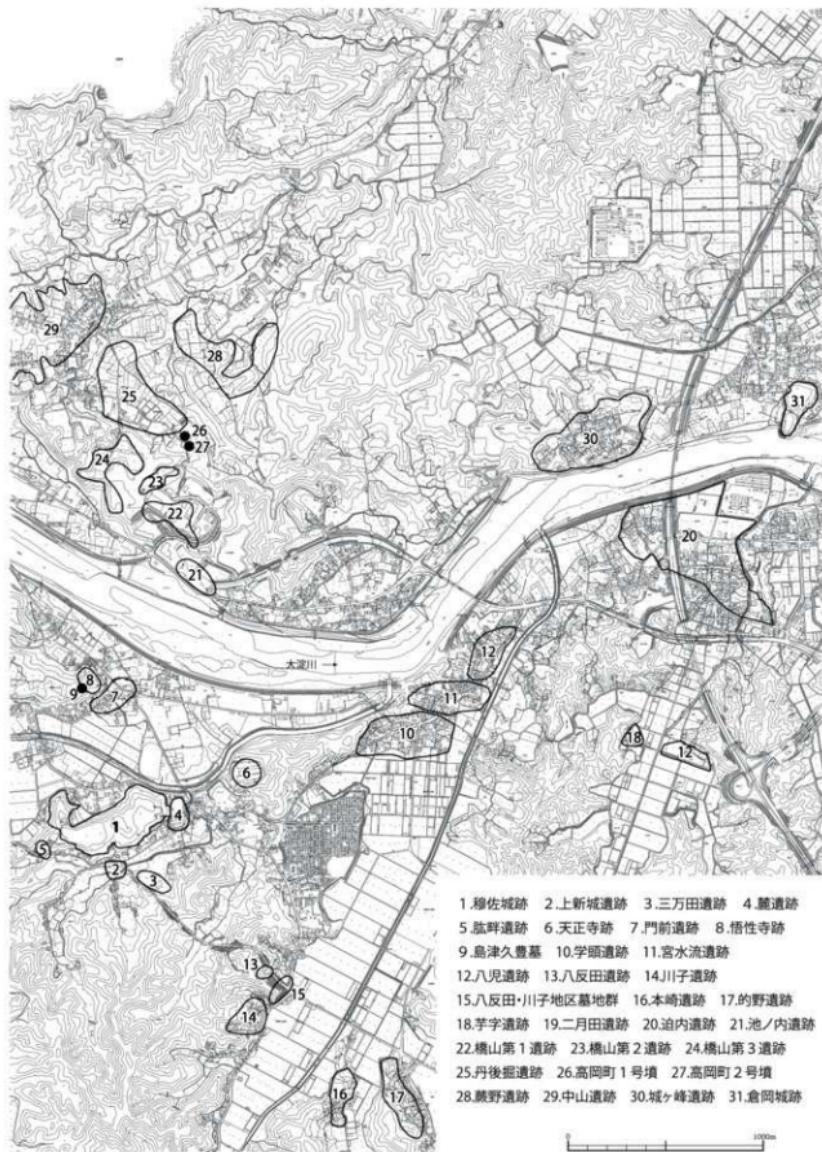
弥生時代 弥生時代になると台地上に加え低丘陵上や微高地上においても遺跡が確認されるようになる。標高15m程度の微高地上に所在する学頭遺跡では、断面がV字状を呈する溝状遺構や竪穴住居が確認されている。学頭遺跡の南約2kmの位置にある丘陵先端部に立地する的野遺跡からは後二期階の二段掘りの土坑墓や溝状遺構が検出されている。台地上の遺跡としては、大淀川を挟んだ対岸、丹後堀遺跡において中期から後期の竪穴住居が確認されている。

古墳時代 古墳時代には大淀川の氾濫源である低地に集落が展開する。高岡麓遺跡第5地点では、5世紀中頃に比定されている2軒の竪穴建物が検出された。また八児遺跡では7世紀代の竪を有する建物など12軒以上検出された。墳墓としては丹後堀遺跡と同一台地上に県指定史跡高岡古墳が2基存在する。

古代 古代にはこの地域は承平年間(931~938)の「和名抄」によると「穆佐郷」と称されていた。大淀川対岸の台地上に所在する蕨野遺跡では9世紀後半以降の土師器椀、皿などを焼成した土坑が6基以上検出された。穆佐城跡の南東に位置する的野遺跡では、9世紀後半の越州窯系青磁碗や綠釉陶器が出土している。穆佐城跡に接する三万田遺跡では9世紀後半から10世紀前半の大溝が検出されている。大溝はやいやびつながら平面形が方形を呈しており、方形区画を造り出している。区内からは建物の痕跡は検出されていないが、穆佐城跡に接する位置から、穆佐城の前身となる、この地域の中心、政治的な施設の存在が想定されている。

中世 建久団帳によると12世紀には穆佐城跡周辺は「島津庄穆佐院」といわれていた。穆佐院の政治的施設である穆佐院政所も穆佐城、もしくはその周辺と想定されている。穆佐城も南北朝期の建武3年(1336)には文献に現れ、その後は中世を通じてたびたび戦乱の舞台となる。中世には穆佐城を中心に、大淀川沿辺に倉岡城、飯田城、天ヶ城(内山城)など多くの山城が築かれている。天ヶ城跡では公園整備に伴い発掘調査が実施されており、溝により区画された掘立柱建物が2時期に渡って検出されている。出土遺物や溝の方向から検討し、先行する遺構が14世紀末から15世紀中頃、もう一方が17世紀初頭とされている。前者が伊東氏支配下、後者が島津氏支配下の遺構と考えられる。生産遺跡としては穆佐城の南麓に所在する上新城遺跡、穆佐城から北西に約1kmの位置にある梅木田遺跡において水田遺構が確認されている。穆佐城周辺の低地にはこのような水田域が広がり、穆佐城を支える生産基盤となっていたと考えられる。

近世 近世になると、高岡町の中心は穆佐城のある穆佐郷から、天ヶ城のある高岡郷へと一変する。天ヶ城は近世初期に廃城となるが、島津氏はその山裾に薩摩、大隅、日向から700余名の武士を集めさせ籠を形成した。この籠が高岡麓遺跡である。高岡麓遺跡は高岡地頭仮屋を中心、計画的な街路設計がなされ、郷士屋敷群と町屋敷群に分割されている。高岡麓遺跡は確認調査も含め33地点に渡って調査が成されている。



第1図 穂佐城跡周辺主要遺跡位置図 (S=1/25000)

第Ⅱ章 穂佐城跡の概要

1. 穂佐城の歴史

中世の穂佐は島津莊の一部である穂佐院として位置付けられる。建久8年（1197）の日向国田帳には諸県郡に「穂佐院300町」と記載され、地頭として島津忠久の名前が見える。穂佐院の範囲は、旧高岡町全域と倉岡、富吉付近にかけての地域と想定されている。

穂佐城が初めて文献に現れるのは前述のとおり建武3年（1336）である。「建武2年12月24日、足利殿御領である穂佐院に新田方の伊東祐広らが押し寄せ、穂佐院政所に立て籠もった。これに対し建武2年晦日、穂佐城を足利方であった土持宣栄一族が攻め落とし、土持一族は穂佐城に移った。翌建武3年1月10日、11日に新田方であった肝付勢が穂佐城を攻めたが土持氏に撃退された」という内容が、建武3年2月7日「土持宣栄軍忠状」旧記雜録に記載されている。

建武4年4月14日には、足利尊氏によって、北朝方で足利一門の畠山直顥が「国大将」として派遣され、興国6年（1345）には日向国守護職に任命されている。中央において尊氏と足利直義・直冬の対立（觀応の擾乱）が起こると、日向国内においても抗争が表面化し穂佐城も争乱の舞台となった。直顥は直義・直冬方につき穂佐城を本拠としていた（觀応3年「足利義詮軍勢催促状」旧記雜録）。正平12年（1357）に直顥は新納実久が守る志布志松尾城を攻めたが、鹿児島から来援した島津氏久に敗れて穂佐城に退いた。その後南朝方の菊池武光が穂佐城を攻め、穂佐城は陥落、直顥は没落していった（太平記、「牛屎氏覺書」旧記雜録）。

正平22年12月、足利氏は今川了俊を九州探題に任命した。了俊は穂佐城に入ったとする説もあるが、応永3年（1396）には日向国の国人層の支持を失い、京へ引き上げていった（日向記）。

南北朝が統一されると、穂佐城は島津氏と伊東氏との争乱の舞台となる。応永10年（1403）には穂佐城を含む大淀川以南の地は島津元久が支配していた。島津元久は弟である島津久豊を穂佐院など諸所の守りとして派遣した。穂佐城に入城した久豊は、伊東祐安の娘を娶り、その間に後の島津忠国が誕生している。穂佐城の城内には忠国が誕生した曲輪（坪之城）と誕生の記念に植樹したとされる誕生杉の伝承が残っている。

応永18年8月、兄元久が没すると久豊は島津家第8代として家督を相続した。しかし翌応永19年に伊東氏が大淀川南岸に侵攻、穂佐城も攻撃を受けた。この戦いで穂佐城は西の城が陥落し、敗れた島津方は末吉まで退いた（「久豊公御譜中」旧記雜録）。

応永31年（1424）、久豊は再び日向国への進出を計り、加江田城を攻め落としたが、翌応永32年に没した（「義天公御譜中」旧記雜録）。久豊のものとされる墓が穂佐城の北約1kmに所在する悟性寺跡に残されている。

久豊の子の忠国も日向国進出の意思をつぎ、穂佐城など大淀川以南の地に進出した。忠国は穂佐城を支配下に治めたものの、文安2年（1445）9月、穂佐城は土持氏とともに侵攻した伊東祐庵によって陥落、以後約130年間は伊東氏が支配することとなった。

天正5年（1577）に伊東氏が島津氏との抗争に敗れ豊後国に退去すると、穂佐城は再び島津氏の支配下となった。翌天正6年（1578）には樺山氏が穂佐城を拝領し、兵部太輔忠助の子である規久が一族を率い穂佐城に入った。

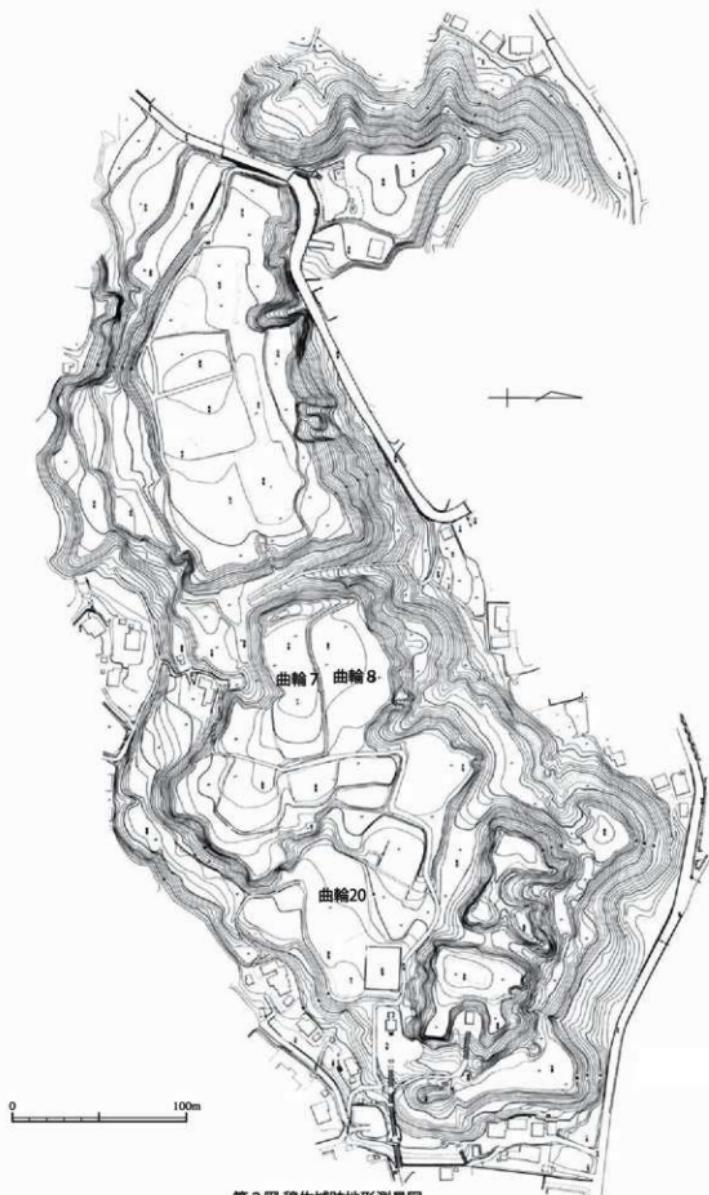
慶長5年（1600）関ヶ原の合戦後、穆佐城は再び戦乱の舞台となる。伊東氏の家臣で清武城主であった稻津掃部介は島津氏に対して蜂起し、穆佐城、宮崎城などの城郭を攻撃対象とした。宮崎城を陥落させた稻津掃部介は穆佐城に侵攻、同年10月4日に穆佐城南東にある上キサ越（木佐越）で2度に渡って合戦に及んだ。10月10日には今度は島津方の平田太郎左衛門尉が穆佐勢を率い打って出たところ、稻津方の田野衆が応戦、穆佐城の南東にある的野の花立越で合戦となった。11月20日、稻津氏は軍勢を率い、穆佐城に攻め寄せ、城戸の一重を打ち破ったとされている。（日向記）しかし当時の穆佐地頭であった川田大膳亮国鏡を初めとする穆佐勢の守りは固く、穆佐城は陥落することなく稻津騒動も終息する。

穆佐城の終焉は、元和の一国一城令（1615）とされることも多いが、近接する山城である天ヶ城は慶長7年（1602）に廃されたとの記録があり（「高岡由緒」中原家文書）、穆佐城に関しても時期を同じくする可能性が指摘されている。川田大膳亮国鏡が地頭の際には、穆佐城内に吉利休兵衛以下23名の家臣が屋敷を構えていたとされるが、廃城になるとその家臣達も下城し、穆佐城の南側を中心とした麓に屋敷を構えたと考えられる。ただし廃城にはなったものの、発掘調査により近世の遺物が少数ではあるが確認されており、城の維持管理はなされていた可能性がある。

2. 穂佐城の地形

穆佐城の城域は大規模な堀切によって4つに区分できる。北東部に位置するA地区は、小規模な曲輪と堀切から構成される戦闘に特化した曲輪群である。大淀川下流域方向の視界が開けしており、倉岡城や宮崎城も可視範囲となっている。その南西に接するB地区は、主郭と想定される曲輪7が存在する曲輪群で、穆佐城の政治的な中心部分と考えられる。B地区は曲輪を1mから5mの段差によって区画することを特徴とする。最上部に位置する曲輪7と、北隣に1段低く接する曲輪8は、西側の堀切Ⅱに対して大規模な土塁が巡らされており、穆佐城の中で最も防御性が高い場所に位置しており、両曲輪を併せて主郭と捉えられる。堀切Ⅱを挟んでB地区の西側に位置するC地区は、B地区と同様に曲輪が段差によって区画され、穆佐城の中で個々の曲輪の面積が最も広い。B地区とは堀切Ⅱによって分断されており、土塁など主だった防御施設も見られないことから、城主の近親者というよりは上位階級の家臣の屋敷地であった可能性が高い。C地区の北西に位置するD地区は、一つの広い曲輪内に横堀を巡らせている。D地区もA地区と曲輪形態こそ違え、北西に突き出たその立地から戦闘に備えて配された曲輪群と考えられる。

穆佐城は、この4つの曲輪群の一つ一つを巨大な曲輪として考えると、大規模な堀切と広い曲輪で構成されていると捉えられ、曲輪相互の独立性が高い、「群郭型城郭」、「館屋敷型城郭」の一例であると言える。しかし、平成19年度の調査では、曲輪20において埋め戻された堀や段が確認され、平成20、21年度の曲輪7の調査でも埋め戻された堀が確認されたことから、他の曲輪においても本来は曲輪を細分する堀や段が存在していた可能性がある。現況から確認することはできないが、穆佐城の場合、特に主郭が存在するB地区においては綿密に堀や段、出入口を配置し、曲輪相互の連携性が高度に保たれていた可能性が高い。



第2図 穂佐城跡地形測量図

第Ⅲ章 調査に至る経緯と経過

1. 調査に至る経緯

穆佐城は宮崎の中世を代表する城郭として広く知られていたが、曲輪の配置や構造など不明な点が多くあった。その解明の契機となったのが、平成2年度に千田嘉博氏を招聘し作成した繩張図である。その後、その繩張り図を基に平成10年まで6回に渡り確認調査が実施された。

平成8年に穆佐城跡保存整備基本計画が策定され、平成10年4月には地元住民や地権者の協力もあり高岡町（現宮崎市高岡町）指定史跡となった。さらに平成13年7月には「穆佐城跡」の国指定史跡の申請を行い、翌平成14年3月19日に国指定史跡に指定された。それを受け平成15年度から継続的に保存整備を実施することになり、まず平成8年度に策定された穆佐城跡保存整備基本計画を見直し、内容を補足する目的で検討委員会を招集し、「穆佐城跡保存整備基本計画」を作成した。また並行して保存整備を目的とする発掘調査を行った。発掘調査は過去の調査が城域の東半部に限られていたため、西半部の状況を明らかにし、城館全体の概要を把握することを目的に、平成16年度まで継続して調査を行い資料の拡充を図った。

その後、平成18年1月に高岡町は宮崎市と合併し、新たに穆佐城保存整備専門委員会を招集、具体的に今後の保存整備計画の検討を行った。その結果、今後整備の中心となるB地区を対象に発掘調査を進めることとなった。

平成18、19年度は委員会を開催すると共に、島津忠国が誕生したとされる「坪之城」と想定される曲輪20を対象に発掘調査を行い、平成19年度に概要報告書を刊行した。平成20年度からは主郭と想定される曲輪7、8の発掘調査を開始した。平成20、21年度はB地区の最上部に位置する曲輪7を調査対象とし、概要報告書を平成21年度に刊行した。平成22、23年度は曲輪8と、曲輪7、8間の斜面、曲輪7出入口部分の調査を行った。平成22年度からは宮崎市に所在するもう一つの国指定史跡の城郭である佐土原城跡と委員会を統合し、宮崎市城跡保存整備専門委員会を招集し、発掘調査成果を基に今後の保存整備計画を検討している。

2. 既往の調査

発掘調査は、平成2年に作成した繩張図の成果を基に、本報告書で報告する調査を除くと、過去8回（1～8次）実施している。

1次調査は曲輪21で盛土造成による平坦部の造作を確認した。2次調査では、主郭に隣接する曲輪10において柱穴等が検出され、14世紀～16世紀末の貿易陶磁器も出土している。3次調査は堀切の状況確認を目的にA地区とB地区間にある堀切Ⅰの調査を行った。4次調査は曲輪28の通路状遺構と想定される土坑において階段状遺構を確認した。5次調査では曲輪5において多数のピット、溝を検出した。6次調査は曲輪10において出入口を、曲輪17において盛土造成による平坦部の造作を確認した。

平成15年度からは保存整備を目的に発掘調査を実施している。7次調査、8次調査は未調査であったC、D地区的状況を確認する目的で行った。7次調査はC地区にある曲輪23を対象とし、土坑、出入口を検出した。8次調査はC地区的曲輪22、23、24、26、D地区的曲輪27を対象とした。曲輪23においては7次調査で確認された出入口の続きを確認した。



第3図 穂佐城跡縄張り図 (S=1/4000)

*千田嘉博氏原図

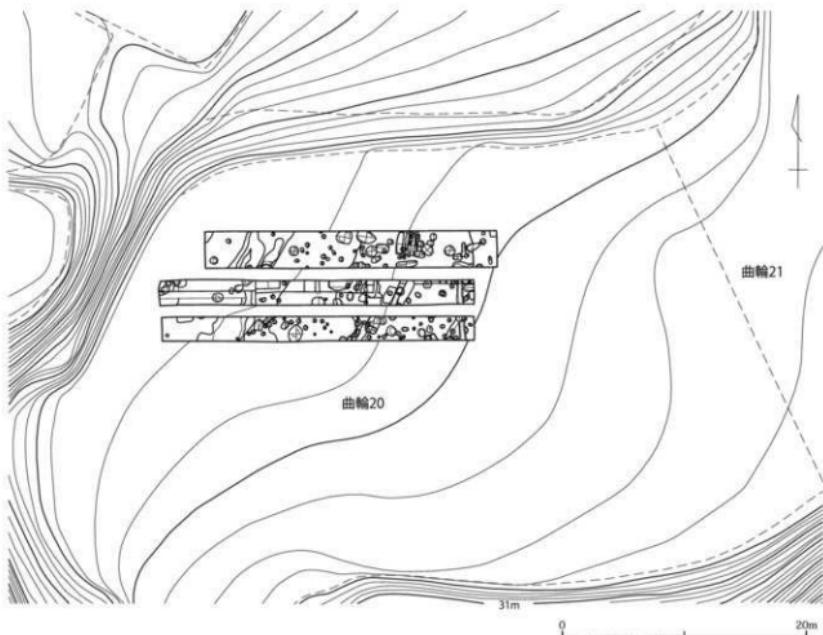
第Ⅳ章 曲輪20の調査成果

1. 調査位置と目的

調査対象とした曲輪20は穆佐城を前述の4つの地区に分割した場合、主郭が存在するB地区に位置する。曲輪の東端には「島津忠国御誕生杉」の伝承が残される杉が存在することから、島津家9代当主である島津忠国が誕生したとされる「坪之城」に推定されている。このことから南北朝期から近世初頭まで約280年間存続する穆佐城の中でも比較的古い時期である忠国が誕生した15世紀初頭の遺構が確認されることが期待された。曲輪20の発掘調査はこの忠国期の遺構を確認し、整備することを目的とした。

平成18年度は基本的な土層堆積状況や遺構の分布、残存状況を確認することを目的とし、東西方向に長軸を持つトレーナーを設定し調査を行った。トレーナーの設定位置は、曲輪20南東側の民家において、穆佐城が所在する台地からの湧水を取水していることから、そこに影響が出ないよう配慮し、曲輪の北寄りに設定した。

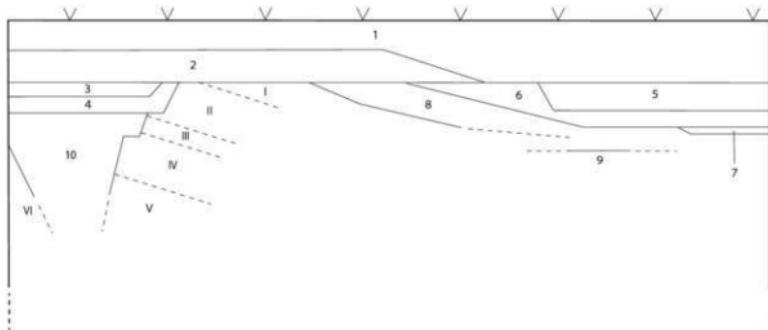
平成19年度は、前年度に設定したトレーナーを基に、トレーナーを増設する形で行った。本来ならば18年度トレーナーに直行する形で設定することが望ましかったが、前述の湧水に配慮し、近接位置に平行するトレーナーを設定し調査を行った。



第4図 曲輪20調査区配置図 (S=1/400)

2. 曲輪20の基本層序

曲輪20の土層堆積状況は、東西方向で大きく異なり、調査を行った範囲内では自然堆積が確認される部分はトレンチ西側部分のみである。また造成土に関してはトレンチの西、中央、東でそれぞれ大きく異なっている。その基本層序を以下で示すが、この層序は曲輪20に限定されるものであり、穆佐城跡全体を網羅するものではない。また土色に関しては、模式図ということで人間の視覚のみによる大系的な名称を与えていたため、土色帖を用いて細分した土層断面図の土色とは必ずしも一致しない。



第5図 曲輪20 基本層序模式図

自然堆積

I層：二次堆積アカホヤ層で厚さは0.3m程度で締まりは弱い。トレンチ西側でのみ検出された。土坑1 TR-6の壁面でも確認されており東に向かって下降傾斜している。

II層：黒色ローム層で縄文時代早期に相当する層で厚さは0.25m程度である。やはりトレンチ西側でのみ検出され、土坑1 TR-6の壁、床面でも確認される。

III層：黒褐色ローム層で厚さは約0.15mである。

IV層：黄褐色ローム層で小林軽石を含む。

V層：始良Tn火山灰層。

VI層：始良入戸火碎流（シラス）層。曲輪20で確認されたものは白色を呈する。

人為堆積

1層：表土。

2層：現代造成土で、表土と色調、質感共に類似する。

3層：造成土。灰色を呈し、中世から近世の遺物を含む。

4層：黄灰褐色土。黒色ローム、シラスブロックが混ざり、中世から近世の遺物を含む。

5層：シラスを主体とする造成土で、風化したアカホヤも一部西よりにおいて混ざる。トレンチの東側のみに存在し遺物は含まない。中世の遺物を含む遺構が形成される。

6層：灰褐色土。古代から中世の遺物を含む。トレンチの中央では2層下で検出されるが、東側では5層下で検出される。トレンチ西側には存在しない。中世遺物を含む遺構が形成される。

- 7層：茶褐色土。シラスが主体で炭化物、中世遺物を含む。トレンチ西側には存在しない。
- 8層：黒褐色土。5mm程度のスコリアを含む。古代から中世の遺物を包含し、中世の遺物を含む遺構が形成される。トレンチ西側には存在しない。
- 9層：暗褐色土。少量の土師質の遺物を含む。トレンチ西側では確認されない。
- 10層：堀埋土。シルト質の褐色土と白色シラスの互層。

曲輪20は移佐城が開城する以前は、西から東に向かって下降傾斜する地形であったが、西側を削平、東側を盛土造成し平坦面を形成、生活面として活用していたと考えられる。これらの層で中世の遺構面と考えられるのは、5、6、8層上面となり、各々が移佐城存続時期の生活面となる。また自然堆積層のI、II層の一部は生活面として使用されたため中世の遺構が存在する。

3. 調査の概要

平成18年度（第9次）調査

現地における調査は、まず調査区の設定と基準杭の設置、水準点の移動を行った。調査区は2m（一部1m）×25mのトレンチを曲輪の西寄りに設定した。この調査は遺構の分布状況を確認し、19年度調査に繋げることを目的とした。調査の結果、土坑、ピット、溝、硬化面が検出され、3面の遺構面も確認したが、各遺構面の時期を確認するまでには至らなかった。また、第1遺構検出面が明らかな造成土であり、さらにトレンチの西、中央、東がそれぞれ異なる土質であったため、その造成土の関係や各造成土の時期も次年度への課題となった。

平成19年度（第10次）調査

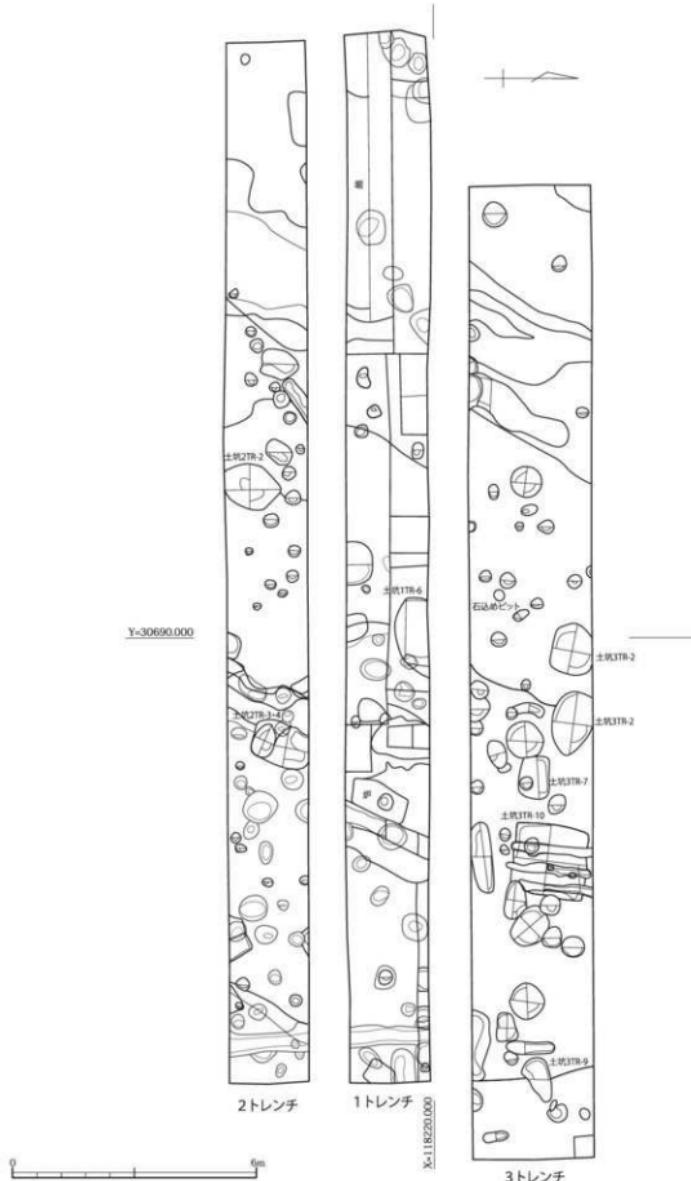
平成19年度の調査は、前年度の結果を受け、第1遺構検出面の遺構の時期と、第1遺構検出面である、東西の造成土の時期を確定することをから開始した。

まず両造成土上の遺構を半裁し、遺構の時期を確認する作業を行った。その結果、多くの搅乱も存在したが、搅乱とは埋土が異なり、土師器片、青磁片など中世遺物を含むピットなどの遺構が確認された。

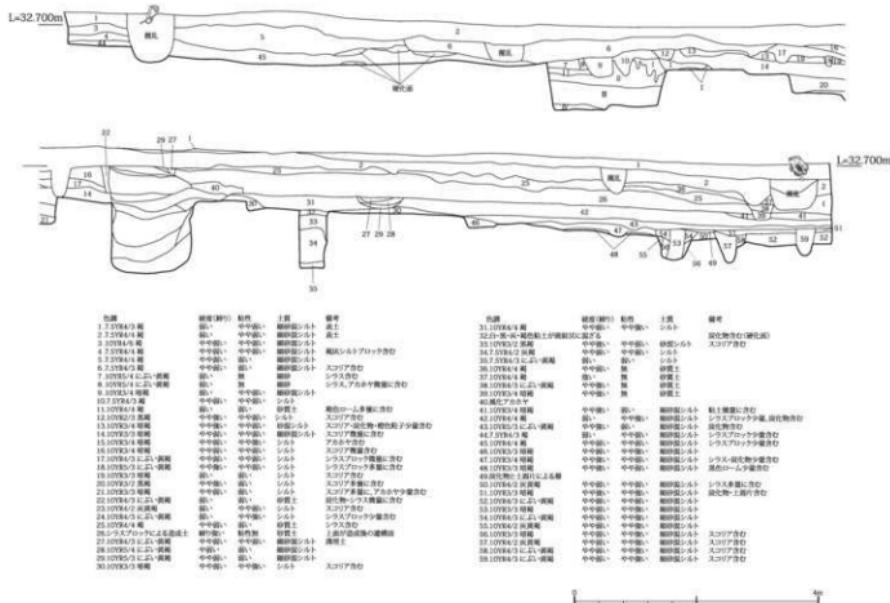
次に造成土の広がりを確認するため、既往トレンチ（以下1トレンチ）から1m距離を開け、南側に平行する形で2トレンチを設定した。土の堆積状況は1トレンチと同様であり、造成は曲輪の広範囲に広がっていることが想定された。

造成範囲の広がりが確認できたため、9次調査時に深掘のサブトレンチを設定していた1トレンチにさらにサブトレンチを設定し造成土を掘り下げた。西側の造成土からは、近世段階の磁器片等が出土し、造成が近世以降であることが確認された。一方、東側のシラスによる造成土からは遺物が出土せず、造成の時期は明らかにできなかった。東側造成土の下層では灰褐色土が検出された。これは両トレンチの中央付近において現代造成土直下で確認される土層と同一層と判断され、東側の造成が行われる前は、曲輪内に段差が存在したことが明らかとなった。段差は0.5m程度の低いものであり、曲輪内を直線的に区画するのではなく、屈曲部が存在することも確認された。

この灰褐色土上面においてもピットや土坑が検出された。さらに、この灰褐色土層の時期を確認するため、18年度の調査において硬化面が確認されていた黒褐色土面まで掘り下げた。灰



第6図 曲輪20遺構配置図 (S=1/120)



第7図 曲輪20トレンチ北壁土層断面図 (S=1/80)

褐色土内からは、土師器皿、壺、青磁、白磁、備前焼の破片、鉄滓などが出土し、穆佐城期であることを確認した。

東側造成土下層の灰褐色土に関しては、穆佐城期であることが確認できたが、造成土自体の時期が未だ未確定であったため、2トレンチに関しても造成土を掘り下げることにした。その結果、造成土そのものからは時期を確定するような遺物は出土しなかったが、造成土の直下、灰褐色土上面から土師器皿、土師器壺、須恵器壺が完形やそれに近い形でまとまって出土した。この土器群は造成土によりパックされたような状況であり、出土状況から土器が廃棄されて大きく時間を隔てない時期に造成が行われた可能性が高いと判断された。その時期は時間幅を有しているものの15世紀代と想定される。

造成土の時期が確認されたため、造成が北側にどのように広がるかを確認するために1トレンチの北側に3トレンチを設定した。3トレンチは東側造成土が中世段階のものである可能性が高くなつたため、造成土面までの調査に止めた。造成土の広がりは他のトレンチと同様であった。

また1トレンチにおいて、西側の旧地形を確認するサブトレンチを設定し掘り下げたところ、曲輪の西端において堀を検出した。なお堀は想定以上に深く、サブトレンチでの調査は危険が伴うため、途中で掘り下げを中止したことから底面の検出には至っていない。

4. 主要遺構の調査成果

20-1 トレンチ

1 トレンチは、3本のトレンチの中で最も下層まで調査を行った。遺構は、造成土面、灰褐色土面、黒褐色土面の3面で確認されている。

土坑1 TR-6 トレンチのほぼ中央において灰褐色土面で検出される。平面形は一部がトレンチ壁にかかっているが、楕円形もしくは隅丸長方形になると思われる。短軸は約1.2m、深さは約1.7mを測る。遺物は土師器皿や壺、管状土錘、棒状鉄製品が出土している。土師器は細片が多い。土坑の上層は厚さ6cmほどの均質なシラス主体の土で構成されている。

炉跡 トレンチの中央東寄りにおいて黒褐色土上面で検出された。構造は黒褐色土に10cm程度の掘り込みを設け、そこに白色、黒色、灰色、褐色の粘土が斑文状に混ざったものを貼り付けている。被熱部分は平面形が長方形を呈し、一部が硬化している。長軸約1.5m、短軸約0.8mを測り、長辺の一方側で掘り込みと礫を検出した。礫は一部を除いて原位置を保っておらず内側に崩壊しているものと見られ、本来は掘り込みの縁に沿って配置されていたものと考えられる。被熱部分の周囲にも粘土は広がっているが形状は不定形である。周辺から鉄滓や炭化物が出土しており、鍛冶関連遺構も想定したが、遺構そのものから鉄滓や微小金属片などが出土していないためその可能性は低い。知覧城などで確認されている「竈」と考えられる。

20-2 トレンチ

2 トレンチは、造成土面、灰褐色土面の調査を行った。

灰褐色土面において、トレンチの中央西寄りで高低差約0.4mの段を検出した。1 トレンチにおいてもスロープ状の段差を検出していたが、2 トレンチでは段の途中に幅約0.5mの平坦面を持つ明瞭な段となっていた。

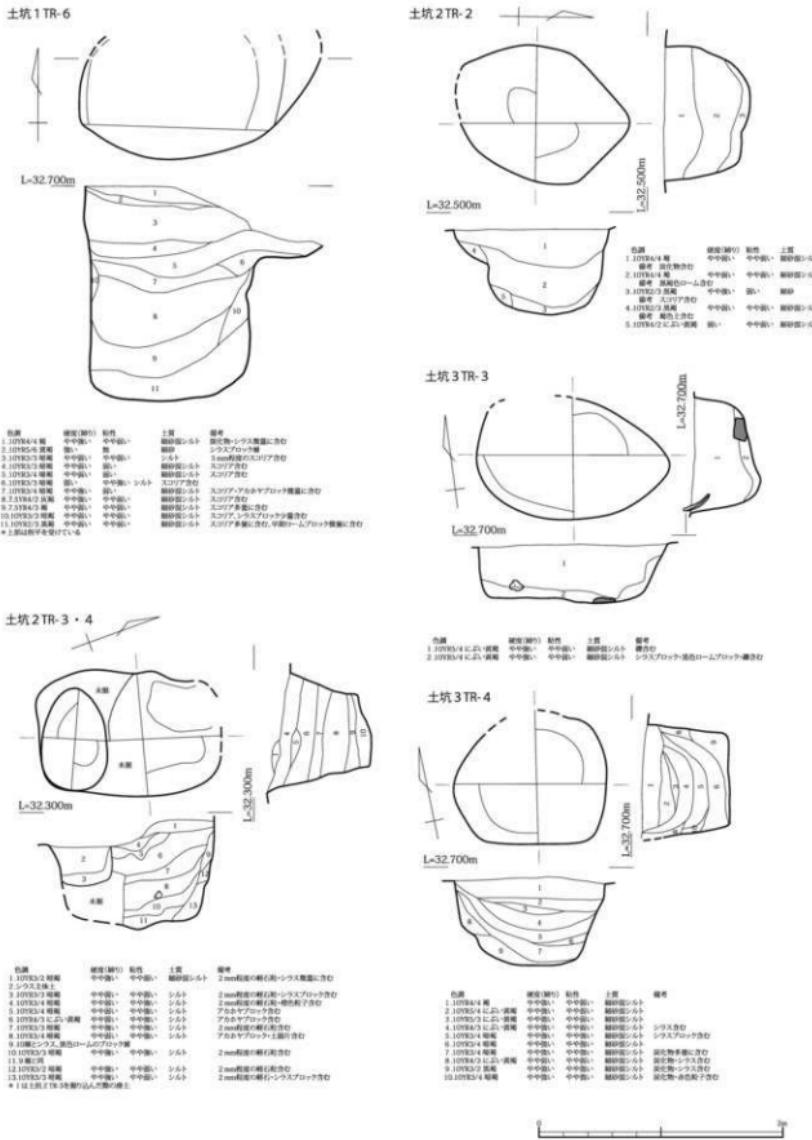
土坑2 TR-3・4 トレンチの中央東寄り、灰褐色土面で検出された。土坑3は平面楕円形で、長軸0.8m、短軸0.5m、深さ0.3m、土坑4も平面楕円形を呈し、長軸1.5m、短軸1m、深さ0.9mを測り、壁面はほぼ垂直に立ち上がる。土坑3の埋土はほとんどが造成土で構成されていた。このことから土坑3は造成の直前に掘り込まれ、埋没する前に造成がおこなわれたことがわかる。また土坑3を掘り込んだ時の廃土が土坑4の上に置かれた状況が検出された。

20-3 トレンチ

3 トレンチは造成土面までの調査に止めた。3 トレンチの特徴としては、他のトレンチに比べ土坑が多い点が挙げられる。

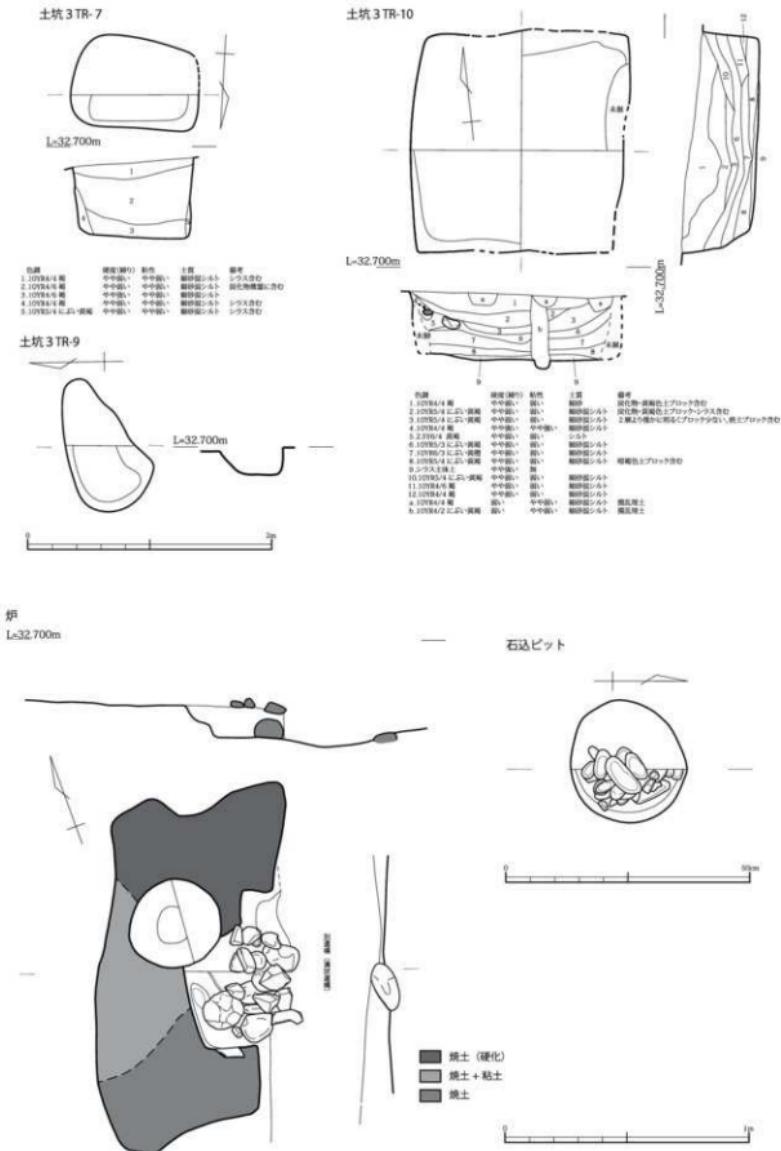
土坑3 TR-10 トレンチの中央東寄りにおいて、シラス主体造成土面で検出された。平面形は正方形に近い形を呈し、南北約1.8m、東西約1.7m、深さは約0.6mを測る。壁面は垂直に近い角度で立ち上がり、埋土には焼土塊、粘土塊が含まれている。遺物は土師器片、欠損があるが洪武通寶が出土した。遺構の形態から小形の堅穴建物の可能性もある。

石込ビット トレンチの中央東より灰褐色土面において検出された。ビットは直径約0.25m、深さは半蔵したものの、石とビット壁との間隔があまりに狭く、遺構保存を優先したため底面が検出できていない。石はビット下部では壁面に接するような形で込められているが、上部になるとビット壁との間に5~8cm程度の隙間が見られる。検出面からすでに石が確認できたこと、周囲のビットとは埋土の色が異なることから柱穴の根固め石とは考え難い。

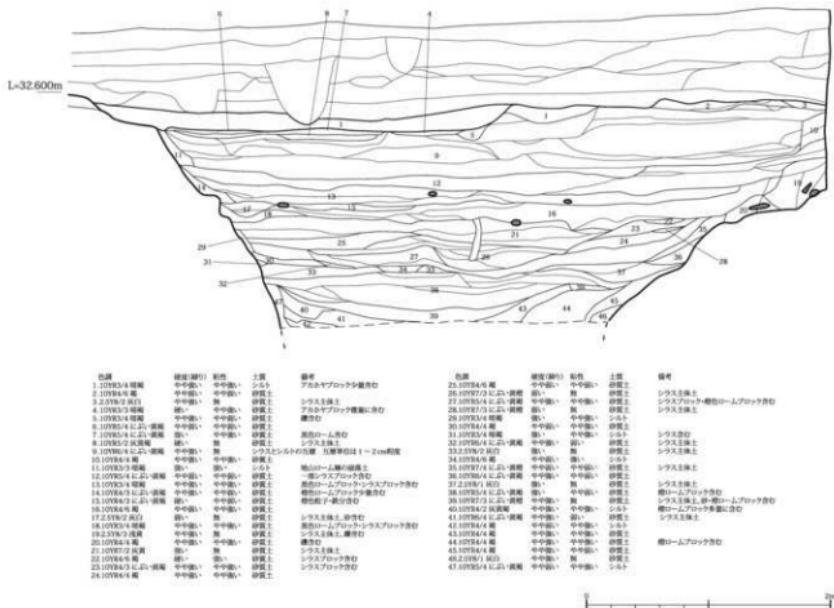


第8図 曲輪20土坑実測図 (S=1/40)

4. 造積の調査成果



第9図 曲輪20土坑・炉・石込ビット実測図 (土坑S=1/40・炉S=1/20・ビットS=1/10)



第10図 曲輪20 堀土層断面図 (S=1/40)

堀 1 トレンチ西側の造成土下で検出された。堀が掘削された遺構面は、別遺構によって削平されていたため不明である。また遺構と遺構面の保存を優先し、サブトレンチでの調査としたが、掘削深度が2mに達した段階でこれ以上の掘削は危険が伴うと判断、掘り下げを断念したために堀底は未確認である。また堀の西側の肩も、トレンチ外へと伸びているため未確定であるが、東側の肩からトレンチ壁までの幅でも7.6mを測る。仮に西側の肩が上段の曲輪17からの法面をそのまま利用していたと想定すると約9mに達する。東壁は約65°の角度で直線的に立ち上がるのに対し、西壁は約40°と大きな違いがある。堀としての機能を考えると西壁の角度では緩過ぎ、西壁はシラスで構成されていることを鑑みると、崩落したシラス層で掘り下げを止めてしまった可能性がある。西壁で検出したシラスは、曲輪17への法面で露出しているやや硬質な白色シラスと同一のものであったが、それが崩落し堆積していたことが想定される。

堀に堆積していた埋土はシラスとシルト質土の大きく2つに分類でき、両者が互層になって堆積していることから、堀は人為的に埋め戻されたと考えられる。2つの土層はさらに細分が可能であり、この土層の差は作業単位を表しているものと想定できる。また、部分的に硬く叩き締められた層が確認され、非常に丁寧に埋められたことがわかる。これは堀を埋めた後に、その上部をなんらかの空間（日常生活の）として利用しようという意識の現われと考えられる。

遺物は16世紀代の備前焼鉢が出土している、その他に青磁片、土器器片が出土しているが、細片のため時期ははっきりしない。堀を切る溝からは16世紀後半の景德镇産の青花皿、備前焼鉢が出土しており、埋められた時期はそれに近い時期と想定される。

5. 出土遺物

白磁 1、2は碗である1は口縁部が玉縁状を呈す碗である。2はシラス主体造成土直下から出土した口縁部が外反する碗である。3は小坏でやや厚めの釉が掛かる。4は八角坏で4ヶ所抉り高台である。見込に長方形の重ね焼き痕跡が残る。

青磁 5~11は碗である。5は外面口縁部下に波状文、7は体部外面に連弁文、8は外面口縁部下に雷文帯、体部に連弁文を施す。9は見込に印花文を施し、10は外面口縁部下に雷文を施す。12~15は皿である。12、14、15は輪花皿であり口縁部が外反し、口縁内面に波状圈線が施されている。13は高台をもたない皿である。16は盤口縁部である。厚手の釉が掛かる。17は瓶である。細片のため全容は不明であるが型押しの波状文が見られる。

青花 18~20は皿である。18は体部が強く立ち上がる形態のものである。19は底部が碁笥底を呈し、やや粗雑な作りである。20は堀を切る溝状造構から出土したものである。

華南三彩 21は華南三彩の水滴である。魚を模した型作りの製品である。

輸入陶器 22は華南産の四耳壺である。暗オーリーブの釉を施す。23~30は壺と思われる破片である。黒もしくはオーリーブ系の釉を施す。華南を中心とした中国産とみられる。31は灰黄褐色の釉を外面に施す壺である。体下部は露胎となる。

備前焼（備前系） 32~35は擂鉢である。32は口縁端部が方形に近い形状を呈す。33は口縁部が内湾後大きく上方へ拡張されている。34も口縁端部を欠損しているが33と類似する形状と思われる。35は8条の擂目が確認できる。36~38は壺である。36は肩部に耳が付き、頸部から口縁部にかけてやや外反する。口縁端部は玉縁状の形状となる。37は体部から口縁部にかけて窄まる器形である。38~44は壺、もしくは壺底部である。44は内面に明瞭なハケメが見られる。45は壺口縁部である。折返しによって玉縁状の口縁を成している。46は壺底部である。

国産陶器 47、48は瀬戸美濃の天目茶碗である。接合はしないが胎土、色調から同一個体と思われる。49は瀬戸のおろし皿である。口縁端部内面を上方へ摘まみ出す。外面下半部は露胎となる。50は壺底部である。外底部に貝目が残る。

須恵器 51~54は須恵器である。51はシラス主体造成土直下から出土した坏で燈明具として使用されている。52~54は東播系須恵器の捏鉢である。口縁端部を丸く取るもの（52）、やや上方へ拡張するもの（53）、内側上方へ強く摘まみ出すもの（54）に分類される。

土師器 土師器は坏（55~79）と皿（80~92）、93は燭台、94は古代の高台付壺である。95は近世の焼塙壺の蓋と思われる。

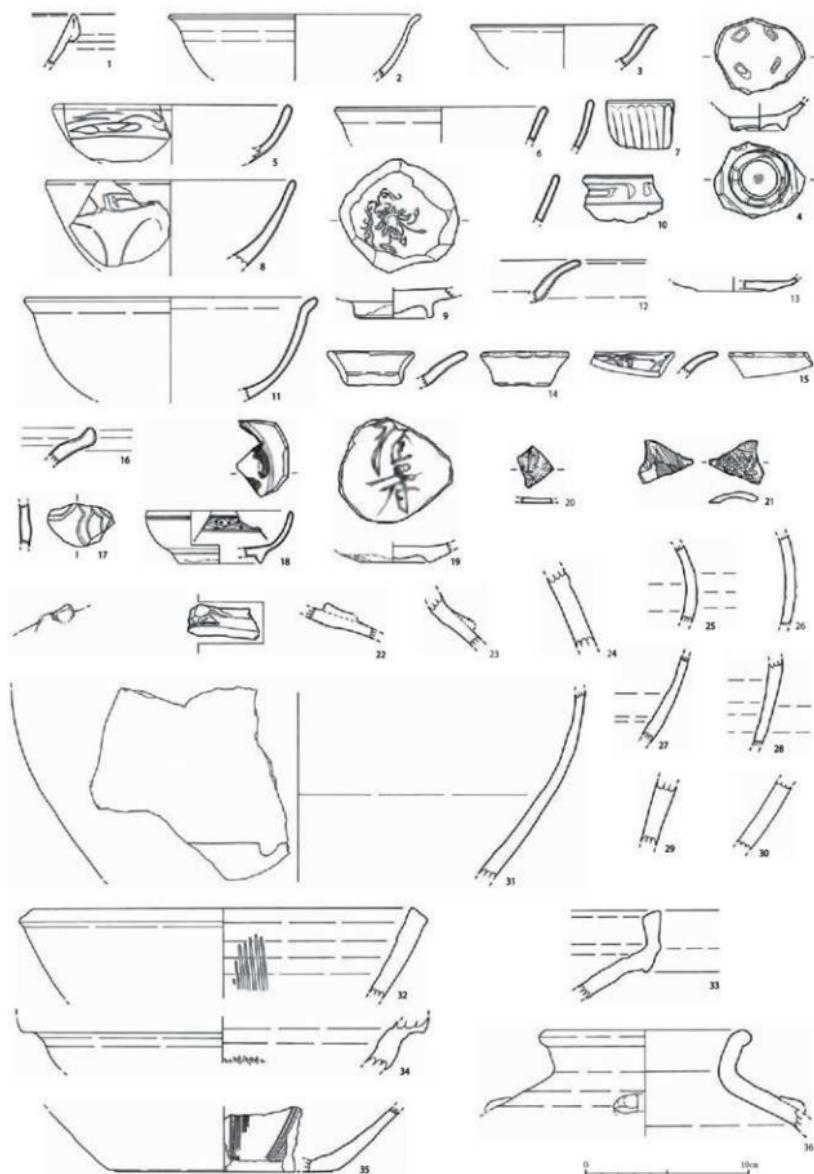
瓦質土器 96は火鉢でスタンプ花文を施している。97は三足香炉、98、99は壺とみられる。

土製品 100~103は土錘である。104から106は繩羽口である。何れの個体もガラス質が付着している。107は土人形の破片である。佐土原人形であろうか。

金属器 108~111は金属器である。108は刀子である。109は鉄鎗である。刃部は断面三角形を呈す。110は鉄鎌である。茎部の樹皮巻き付けが確認できる。111は毛抜きである。

錢貨 112は熙寧元宝、113は洪武通宝である。

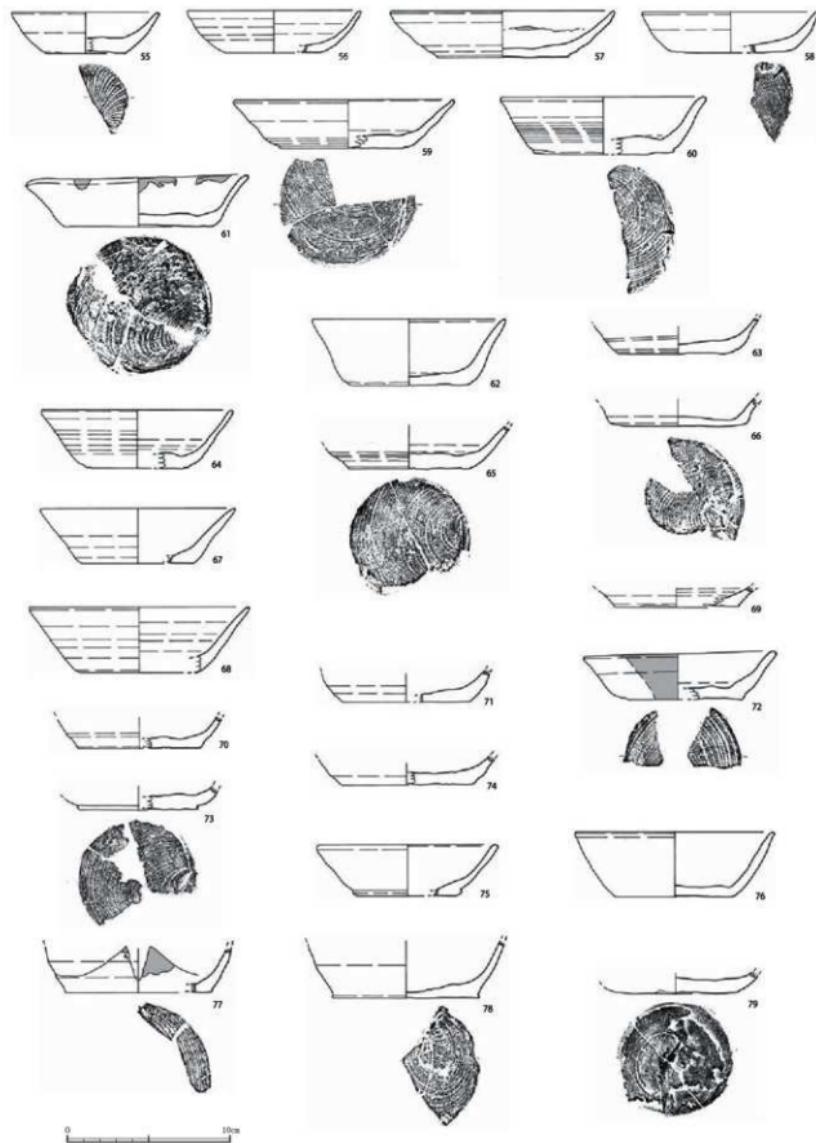
石製品 114は不明石製品である。表面は研磨され中央部と思われる位置に穴を削り込んでいる。115は砥石である。116は石鍋の再加工品である。断面台形状で斜辺を研磨しているが用途は不明である。117は黒碁石である。



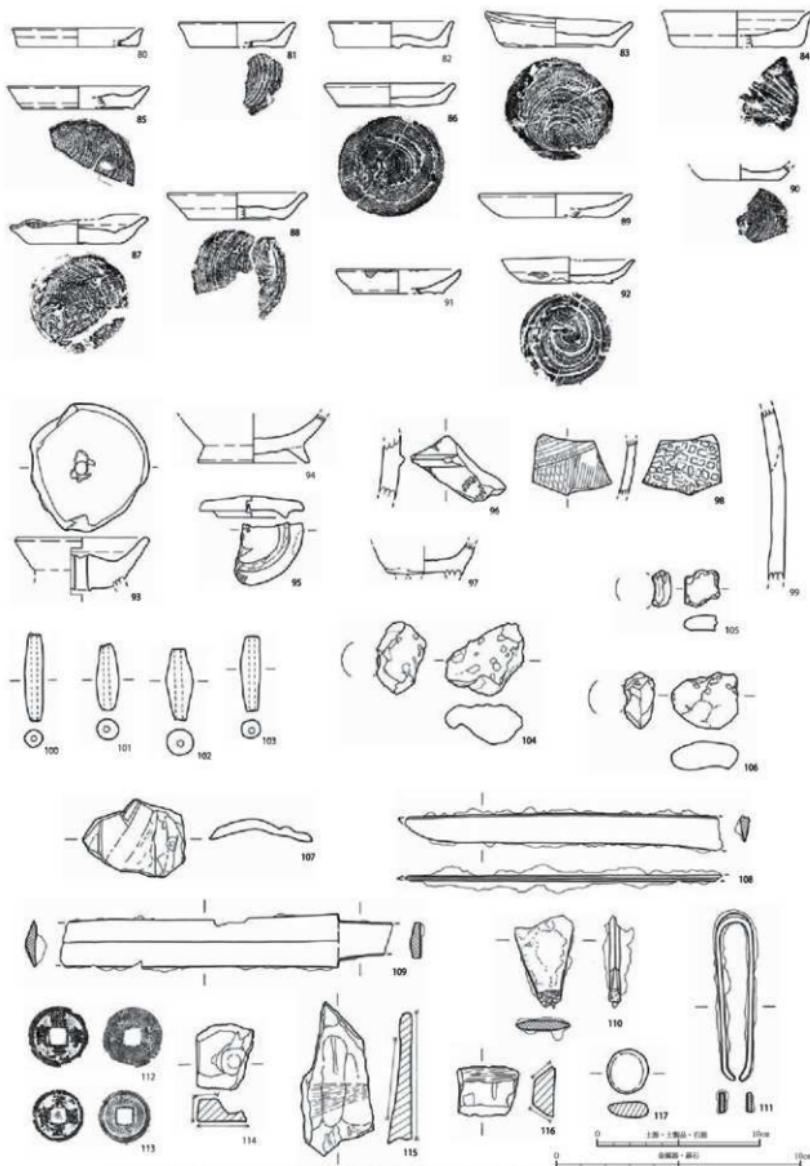
第11図 曲輪20出土遺物実測図1 (S=1/3)



第12図 曲輪20出土遺物実測図 2 (S=1/3)



第13図 曲輪20出土遺物実測図 3 (S=1/3)



第14図 曲輪20出土遺物実測図4 (土器・土製品・基石を除く石器S=1/3 金属器・基石S=1/2)

第1表 曲輪20出土遺物観察表 I

番号	出土位置	種別	器種	法量			色調	調整・文様	時期	備考
				口径	底径	器高				
1	擾乱	白磁	碗				灰白		11後半～12世紀前半	大字府分類IV
2	2Tr6層No.9	白磁	碗	(15.1)			灰白		15世紀前後	森田C群
3	2Tr4層	白磁	小鉢	(10.7)			灰白		15世紀後半～16世紀代	森田E群
4	2Tr6層	白磁	八角杯		3.15		灰白		14世紀後半～16世紀代	森田D群
5	3Tr土坑9	青磁	碗	(14.0)			灰白	波状文	16世紀前半～16世紀中頃	
6	2Tr6層	青磁	碗	(12.7)			オリーブ灰			
7	1Tr2層	青磁	碗				オリーブ灰	蓮弁文	15世紀後半～16世紀前半	上田B群類
8	1Tr盤上層	青磁	碗	(15.0)			灰オリーブ	雷文帯・蓮弁文	14世紀後半～15世紀前半	上田C II類
9	1Tr7層No.1	青磁	碗		4.7		オリーブ灰	印花文	15世紀代	
10	1Trビット1	青磁	碗				オリーブ灰		14世紀後半～15世紀前半	上田C II類
11	1Tr6層	青磁	碗	(17.6)			オリーブ灰	雷文帯	14世紀中頃～15世紀初頭	上田D類
12	3Tr表土	青磁	輪花瓶				オリーブ灰			柴田B-I
13	1Tr6層	青磁	皿	(4.4)			灰オリーブ			
14	3Tr表土	青磁	輪花瓶				オリーブ灰		15世紀後半～16世紀前半	柴田B-II
15	1Tr表土	青磁	輪花瓶				オリーブ灰	草本文	15世紀後半～16世紀前半	柴田B-II
16	1Tr表土	青磁	盤				オリーブ灰			
17	2Tr2層	青磁	瓶				オリーブ灰			
18	2Tr4層	青花	皿	(8.8)	(5.0)	3.2	明オリーブ灰	四方攢文	16世紀後半～17世紀初頭	森J2
19	1Tr2層	青花	皿		4.25		灰白	文字文	16世紀後半	森C・福建漳州・青花
20	1Tr盤上講	青花	皿				灰白		16世紀前半～16世紀中頃	景德鎮
21	2Tr表土	華南二彩	水滴				青緑	魚	16世紀後半～17世紀初頭	型整形
22	3Tr表土	陶器	四耳壺				暗オリーブ			華南產か
23	2Tr3層	陶器	壺				黒闇		明代	華南產
24	3Tr土坑6	陶器	壺				暗オリーブ			華南產か
25	2Trビット5	陶器					オリーブ黒			
26	3Tr表土	陶器					オリーブ黒			華南產
27	2Tr4層	陶器					黒			
28	2Tr5層	陶器					黒			
29	2Tr表土	陶器					暗オリーブ			華南產か
30	3Tr表土	陶器					オリーブ黒			華南產
31	2Trビット2	陶器	壺				灰黄褐			
32	1Tr表土	鐵鉢	(23.0)				暗赤褐色	7条の縄り	14世紀中頃	
33	1Tr盤上講	鐵鉢					褐		16世紀中頃	
34	2Tr4層	鐵鉢					オリーブ黒	7条の縄り		
35	2Tr6層	鐵鉢		(13.0)			灰白		14世紀中頃?	
36	3Tr表土	鐵鉢	壺?	(11.7)			灰黒		15世紀中頃	
37	2Tr搅成	鐵鉢	壺?	(7.6)			にぶい黄			
38	1Tr6層	鐵鉢	壺?	(7.9)			灰			
39	1Tr8層	鐵鉢	壺?	(9.8)			灰			底部回転糸切
40	3Tr土坑4	鐵鉢	壺?	(10.8)			褐灰			
41	3Tr	鐵鉢	壺?	(14.1)			灰黒			
42	2Tr表土	鐵鉢	壺	(20.8)			浅黄			
43	3Tr	鐵鉢		(13.2)			にぶい赤褐色			
44	3Tr器1	鐵鉢	壺	(20.8)			赤褐色			
45	1Tr6層	鐵鉢	壺?	(35.2)			褐		14世紀中頃～14世紀後半	
46	2Tr造土	鐵鉢	壺?	(27.2)			暗赤褐色			
47	2Tr4層	陶器	天目				暗褐色		16世紀代	
48	2Tr4層	陶器	天目				暗褐色		16世紀代	瀬戸・美濃
49	1Tr8層	陶器	おろし葉	(13.0)			灰黃		14世紀代	瀬戸
50	2Tr表土	陶器	壺	(15.6)			黃褐色			底部に貝口
51	2Tr6層	須恵器	壺	11.5	6.4	3.1	灰	回転ナデ		底部へり切り・豊明月
52	1Tr6層	須恵器	徑鉢	(21.0)			灰		12世紀末～13世紀初頭	東播系
53	1Tr6層	須恵器	徑鉢	(24.6)			灰黃		14世紀前半	
54	1Tr6層	須恵器	徑鉢	(24.2)			灰	回転ナデ	14世紀前半	東播系
55	3Tr土坑7	土師器	壺	(8.9)	(5.0)	2.5	浅黄	回転ナデ		底部静止糸切
56	1Tr6層	土師器	壺	(10.5)	(5.8)	2.6	浅黄	回転ナデ		底部回転糸切
57	2Tr6層	土師器	壺	(13.6)	(7.9)	2.9	橙	回転ナデ		底部ハラ切
58	3Tr土坑7	土師器	壺	(10.6)	(4.5)	2.5	橙	回転ナデ		底部回転糸切

第2表 曲輪20出土遺物観察表2

番号	出土位置	種別	器種	法量			色調	調整・文様	時期	備考
				口径	底径	器高				
59	2Tr6層+1Tr6層	土師器	环	(136)	83	30	浅黄橙	回転ナデ		底部回転糸切
60	2Tr6層	土師器	环	(123)	(86)	35	にぶい黄橙	回転ナデ		底部回転糸切
61	2Tr6層 他	土師器	环	134	82	32	浅黄橙	回転ナデ		底部回転糸切、豊明共
62	1Tr6層	土師器	环	(117)	(68)	41	浅黄橙	回転ナデ		底部回転糸切
63	1Tr6層	土師器	环		(65)		にぶい黄	回転ナデ		底部回転糸切
64	1Tr6層	土師器	环	(115)	57	36	浅黄橙	回転ナデ		底部回転糸切
65	2Tr6層	土師器	环		74		にぶい黄橙	回転ナデ		底部回転糸切
66	3Tr表土	土師器	环		(86)		橙	回転ナデ		底部回転糸切
67	1Tr6層上層	土師器	环	(118)	(67)	34	橙	回転ナデ		底部回転糸切
68	1Tr6層	土師器	环	(134)	(78)	40	橙	回転ナデ		
69	2Tr土坑2	土師器	环		(76)		橙	回転ナデ		底部ヘラ切り
70	2Tr6層	土師器	环		(75)		浅黄橙	回転ナデ		底部ヘラ切り
71	1Tr6層 他	土師器	环		78		橙	回転ナデ		底部回転糸切
72	2Tr6層	土師器	环	(115)	79	30	黄橙	回転ナデ		底部回転糸切
73	1Tr6層	土師器	环		(72)		にぶい橙	回転ナデ		底部回転糸切
74	1Tr6層 他	土師器	环		(69)		橙	回転ナデ		底部ヘラ切り
75	3Tr6層	土師器	环	(120)	70	40	浅黄橙	回転ナデ		底部ヘラ切り
76	1Tr6層	土師器	环	(108)	(58)	32	橙と灰白混	回転ナデ		底部ヘラ切り
77	1Tr6層	土師器	环		73		橙	回転ナデ		底部ヘラ切り
78	1Tr6層	土師器	环		(89)		にぶい黄橙	回転ナデ		底部回転糸切
79	3Tr6層	土師器	环		(90)		浅黄橙	回転ナデ		底部回転糸切
80	1Tr6層	土師器	皿	(78)	(72)		橙	回転ナデ		
81	2Tr8層	土師器	皿	(69)	(57)	15	浅黄橙	回転ナデ		底部回転糸切
82	1Tr6層	土師器	皿	(76)	(67)	17	橙	回転ナデ		底部ヘラ切り
83	2Tr6層	土師器	皿	88	65	22	浅黄橙	回転ナデ		底部回転糸切
84	1Tr6層	土師器	皿	(90)	(72)	22	橙	回転ナデ		底部板状状痕
85	1Tr6層	土師器	皿	(87)	(69)	14	浅黄橙	回転ナデ		底部回転糸切
86	1Tr7層	土師器	皿	79	64	19	にぶい橙	回転ナデ		底部ヘラ切り
87	2Tr6層N1	土師器	皿	81	56	18	橙	回転ナデ		底部回転糸切
88	2Tr6層	土師器	皿	82	58	17	にぶい黄橙	回転ナデ		底部回転糸切
89	1Tr6層	土師器	皿	(91)	(62)	15	橙	回転ナデ		底部ヘラ切り
90	3Tr土坑4	土師器	皿		(46)		浅黄	回転ナデ		底部回転糸切
91	1Tr6層	土師器	皿	(74)	(56)	15	淡橙	回転ナデ		豊昌ヘラ切り、豊明共
92	1Tr7層	土師器	皿	80	55	15	橙	回転ナデ		底部ヘラ切り
93	1Tr6層	土師器	燭台	(77)			浅黄橙	回転ナデ		
94	2Tr6層上層	土師器	高台付碗		(64)		黄橙	回転ナデ		
95	3Tr表土	土師器	燒塗壺蓋	(64)		13	橙	ナデ		
96	3Tr表土	瓦質土器	火鉢				橙	スタンプ文		
97	3Tr焼成	瓦質土器	香炉				暗灰	回転ナデ		三足
98	1Tr6層	瓦質土器					灰黃褐色	格子印き/ハケ目		
99	3Trビット2	瓦質土器					暗灰	格子印き/ハケ目		
100	1Tr土坑6	土鍤		54	12	11		重量6.2g		
101	1Tr6層	土鍤		41	14	13		重量5.9g		
102	1Tr6層	土鍤		44	16	16		重量9.1g		
103	1Tr6層	土鍤		46	12	11		重量5.5g		
104	2Tr3層	ワゴン								ガラス質付着
105	3Tr壺1	ワゴン								ガラス質付着
106	1Tr西縁化面		ワゴン							ガラス質付着
107	1Tr+3Tr表土	土師質	土人形							型成形
108	2Tr6層	武器	刀子	(133)	13	04				
109	1Tr6層	武器	鉄鎌	(137)	22	04				
110	1Tr西縁化面	武器	鉄鎌	(37)	(24)	04				
111	2Tr6層	武器	毛抜き	68	16	08				
112	1Tr表土	武器	馬車元宝							
113	1Tr6層	武器	洪武通宝							
114	2Tr表土	石製品		41	35	14		重量26.0g		穴は反時計回りに抉る
115	2Tr表土	石製品	砾石	(9.5)	(4.2)	(1.5)		重量57.6g		
116	2Tr6層	石製品		(31)	(38)	(1.3)		重量26.9g		石鍋再加工品
117	3Tr土坑3	石製品	碁石	18	17	07		重量28g		

6. 小結

曲輪20の調査目的は「坪之城」の伝承から発掘調査により確認されると想定された、穆佐城において初期段階にあたる南北朝期の遺構の確認とその具体的な内容の把握にあった。結果的には南北朝期以後も曲輪20は造成を繰り返し使用されていたことがわかり、遺跡の保存という観点から下層の調査はトレンチ調査に止めたため、南北朝期の城の姿を明らかにできたとは言い難い結果となった。しかし今回の調査によって曲輪構造等明らかになった点もあるため本節においてまとめておきたい。

穆佐城の存続期間は約280年と長期に渡っており、前述のとおり曲輪20では複数の時期の遺構、遺構面が確認された。今回調査を行った遺構面で最も古いものは黒褐色土面である。黒褐色土面においては炉跡、ピットが検出されたが、黒褐色土面まで掘り下げた面積が狭いため、遺構分布の全容は明らかではない。ただし、前述の遺構が検出されているため生活面として利用されていたことは間違いない。その時期は、上層の灰褐色土に含まれる遺物の時期が、15世紀代を中心とする時期であり、それを下限とする時期であると想定される。

次の遺構面である灰褐色土面では、土坑、ピット、曲輪内の段を検出した。この中でも曲輪内の段は、現地表面では平坦に見える曲輪の地形が、この時期には、段によって曲輪を区画して利用していたことが明らかとなった。ただし上段、下段ともにピットや土坑等の遺構は類似する状況で検出されており、今回の調査区内では上下段による性格の差は明確には見出せない。灰褐色土面の時期は包含する遺物の時期である15世紀代以降ということになる。また2トレンチの段差付近で鍛造剥片が検出されている。調査区内では確認されていないが、近接する位置に鍛冶炉が存在する可能性がある。

さらに上層のシラス主体造成土面では、土坑、ピット、溝状遺構が検出された。造成時期は、下層遺構面である灰褐色土上面において、シラス主体造成土によってバックされていた遺物群の時期から大きく遅れることはないと考えられる。この遺物群は15世紀代の遺物が中心であるが、一部の白磁では16世紀代まで下る可能性があり時期幅が大きい。またやや特殊な器形であるが古代と思われる須恵器坏も出土している。この須恵器坏は、口縁部に煤が付着しており後世の転用品の可能性もある。坏以外にも古代の遺物と考えられる土師器が出土することから混入の可能性も考えられる。

遺構の中で特に注目されるものは、調査区西端で検出された堀である。この堀は、曲輪20から、主郭である曲輪7へ向かう本来登城路の障壁としての機能が想定できる（堀底を通路としていた可能性もある）。その堀を精緻に埋め、平坦面を形成する行為は大規模な城構造の改変である。堀の埋戻しは堀の埋土から16世紀代の備前焼が出土していること、堀を切る溝から出土した青花が16世紀前半から中頃に位置付けられることからそれに近接する時期に埋め戻されたと考えられる。東側のシラス主体造成も、曲輪内の段を埋め、広い平坦面を作成した点では共通の意図が読み取れるが、出土した遺物は造成土が15世紀代中心の遺物、堀の埋戻しは16世紀代の遺物と時期差があるため両者は同時期に成されたものではない可能性が高い。

南北朝期の遺構の確認と内容の把握という目的は、上層において穆佐城存続時期の遺構が確認されたため、果たせなかった部分も多い。しかし曲輪20は、丁寧な造成を繰り返し行いながら、少なくとも3つの時期において生活面として活用されていたということが明らかとなった。

第V章 曲輪7の調査成果

1. 調査位置と目的

調査対象とした曲輪7は、B地区の中でも最高所に所在し、曲輪8と共に西側を大規模な土壘と堀切によって守られ、主郭に相応しい防御機能を有している。この曲輪7は戦国期を中心とする遺構の存在が期待され、今後保存整備を行う上で重要な位置を占めるため、その時期や遺構の展開、残存状況を確認するために発掘調査を行うことにした。

平成20年度（11次）は、曲輪7が現地形において中央から東側が西から東へ向かって下降傾斜していることから、東半は後世に削平を受けている可能性が高いと判断し、曲輪7の西半を中心に調査区を設定、東半は3本のトレンチによって遺構の残存状況を確認する方針で調査を実施した。また西端の土壘についても造作方法や残存状況の確認を行い、整備に活用するためトレンチによって調査を行うことにした。

平成21年度は前年度の調査結果を受け、想定よりも遺構の残存状況が良好であった曲輪の東半について面調査を行うことにした。出入口に関しては平成20年度の調査において確認できなかった東西方向の通路部分等の全容を確認するために調査区を設定した。

平成23年度（14次）は出入口部分の追加調査を行った。

2. 曲輪7の基本層序

曲輪7の土層堆積状況は、基本的に東西方向で大きく異なることはない。しかし、本来は西から東へ向かって緩やかに下降傾斜する地形を削平して曲輪を造作しているため、遺構面となる地山が地点によって異なるという状況になっている。その基本層序を以下で示すが、この層序は現在までのところ曲輪7に限定されるものであり、穆佐城跡全体を網羅するものではない。また土色に関しては、模式図ということで人間の視覚のみによる大系的な名称を与えていたため、土色帳を用いて細分した土層断面図の土色とは必ずしも一致しない。

自然堆積

I層：黒色土。5mmの大スコリアを多量に含む。曲輪20で中世遺構面となっていた造成土に類似する。土壘断面で確認された。

II層：アカホヤ火山灰層。確認できる場所、層厚共に僅かである。二次堆積なのか色調が暗くくすんでいる。

III層：黒褐色ローム層。曲輪7東側、土壘で確認された。

IV層：灰褐色ローム層で小林軽石を含む。

V層：橙褐色ローム層。

VI層：始良Tn火山灰層。

VII層：始良入戸火碎流（シラス）層。曲輪7では上層から黄色、ピンク、白色へと変化する。

人為堆積

1層：表土。

2層：現代造成土で、表土と色調、質感共に類似する。

3層：造成土。灰褐色を呈し、中世から近世の遺物を含む。搅乱が掘り込まれる層である。

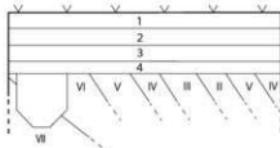
4層：包含層。地山ブロックが混ざり、中世の遺物を包含する。

5層：土壘盛土層。褐色を呈し樹根の影

響か締まりはそれほど強くない。

曲輪7が所在する場所は、穆佐城が開城する以前は西から東に向かって下降傾斜する地形であったが、曲輪7を造作する時に、西端の土壘を残して削平し、平坦面を形成、生活面として活用したとみられる。しかし西側を中心に削平したものの東西での高低差は約2.3m残されており、東側の遺構残存状況から鑑みると、東側は整地のための削平は行ったが、大規模な盛土は行っておらず、当時の遺構面の高低差を反映している可能性が高い。

1
5
I
II
III
IV
V
VI



第15図 曲輪7基本層序模式図

3. 調査の概要

平成20年度（第11次）調査

現地における調査は、まず曲輪の東半部に南から1トレンチ、2トレンチ、3トレンチを設定し、遺構の残存状況の確認を行った。その結果、遺構面の上部は削平を受けていると思われるが、遺構は完全に削平されておらず、比較的良好な状況で検出された。1トレンチ東端では、遺構面が段になる状況が確認されたため拡張を行ったところ、堀（出入口）と想定される遺構が検出された。さらに出入口通路部分の脇で竪穴建物と考えられる遺構が確認されたが、堀に切られており、同時期の遺構ではないことが明らかとなった。また出入口は埋め戻されており、その上部に新たに出入口が造作されていた。

曲輪西半では、調査区の中央北寄りにおいて掘立柱建物が検出された。幾度も建て替えが行われており、多くのピットが検出された。その中で柱痕部分が炭化したものと、それに平行して尚且つ切り合わない2棟の建物の柱穴を半裁し、土層堆積状況を確認した。

掘立柱建物が分布する地区の東側、曲輪のほぼ中央において、曲輪を東西に分断する南北方向の箱堀が検出された。箱堀の床面は硬化面になっており、北隣に位置する曲輪8から続く通路としても使用されていたと考えられる。また、この箱堀は、土層の堆積状況と出土した遺物から穆佐城が城として機能している時期に埋め戻されていた。

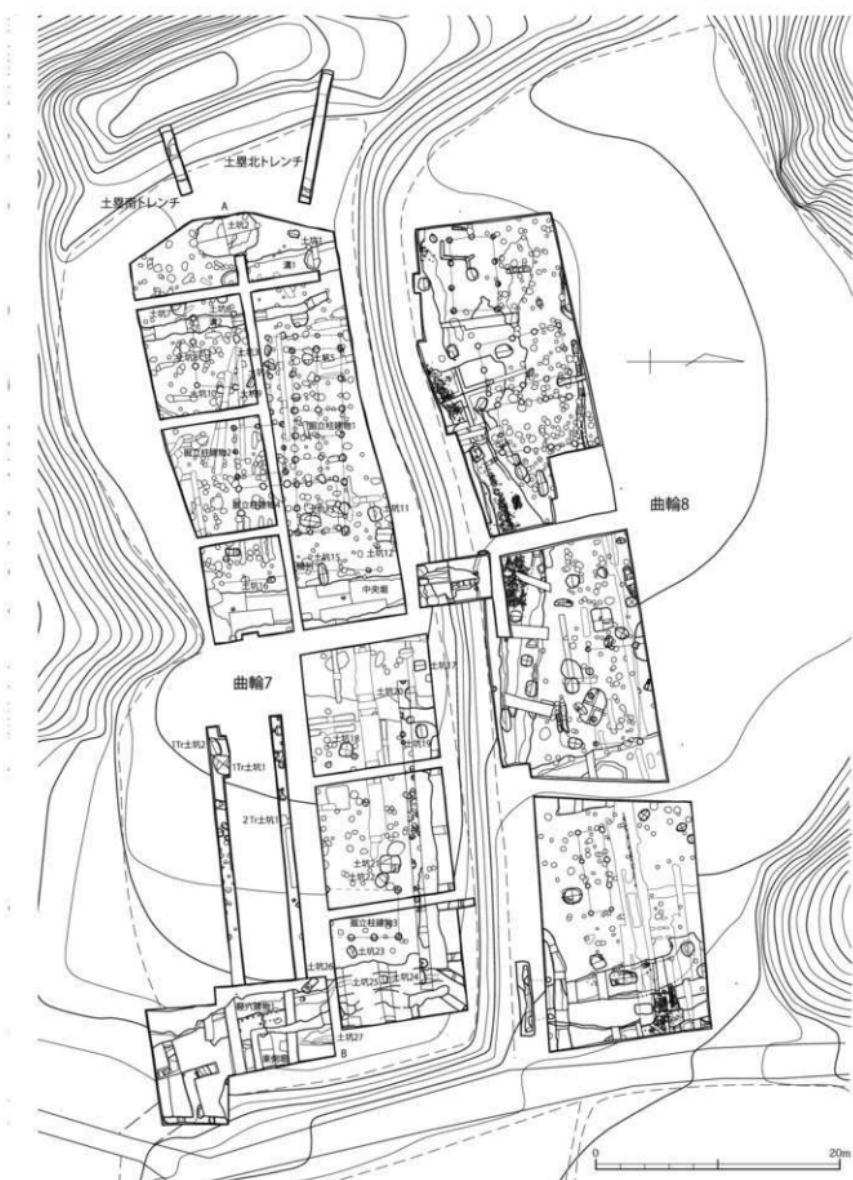
掘立柱建物の西側でも溝状の通路遺構が確認できた。これも曲輪8と結ばれた通路と考えられるが、中心建物の「奥」という配置から裏口のようなものであったと思われる。

この裏口通路のさらに西側には、曲輪7、8を併せて守る土壘が築かれている。この土壘の構築方法を明らかにするため、トレンチを2本設定し、土層の堆積状況等を確認した。その結果、土壘は地山を削りだし、その上に僅かに盛土を行い構築されていることが確認された。

平成21年度（第12次）調査

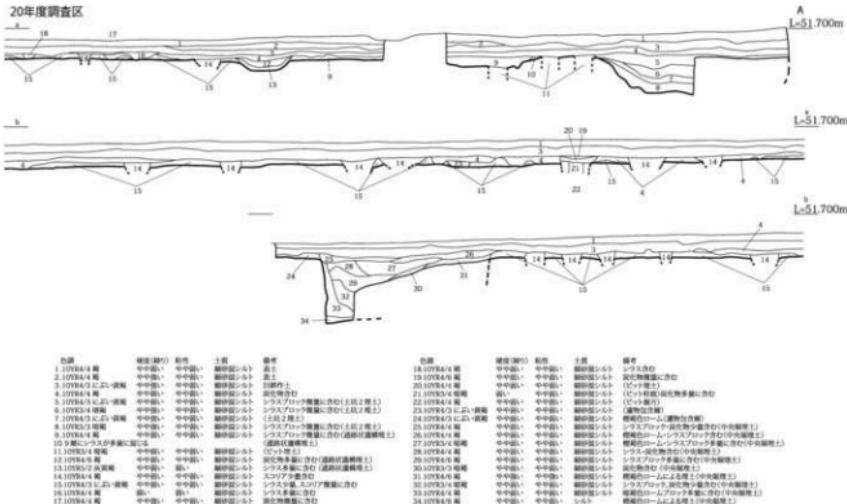
平成21年度の調査は、曲輪東半部に面調査区を設定し調査を開始した。ピットは複数検出さ

3. 調査の概要

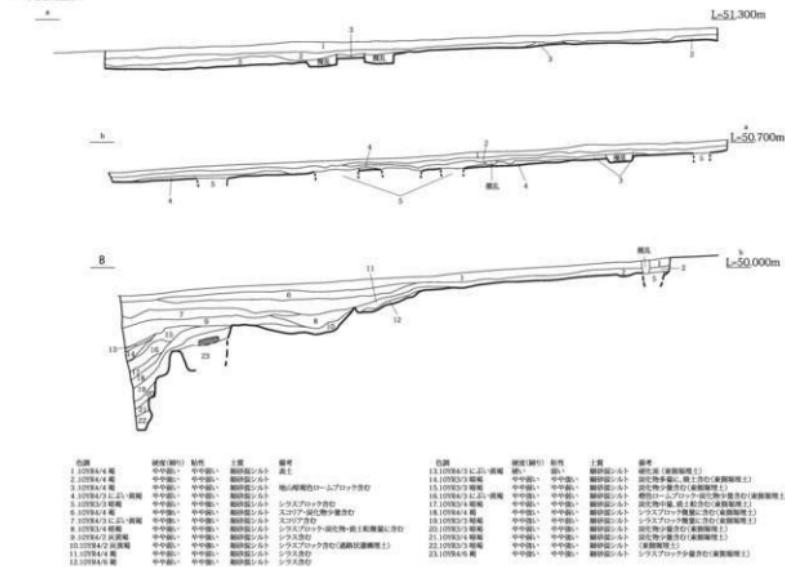


第16図 曲輪7 遺構配置図 (S=1/400)

20年度調査区



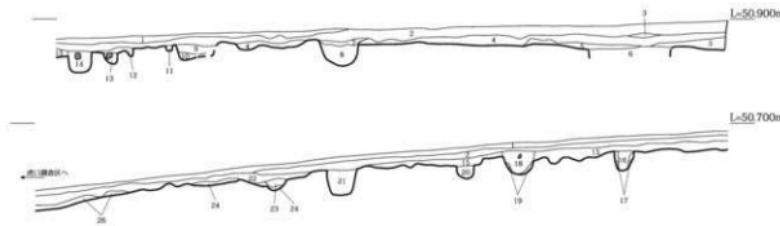
21年度調査区



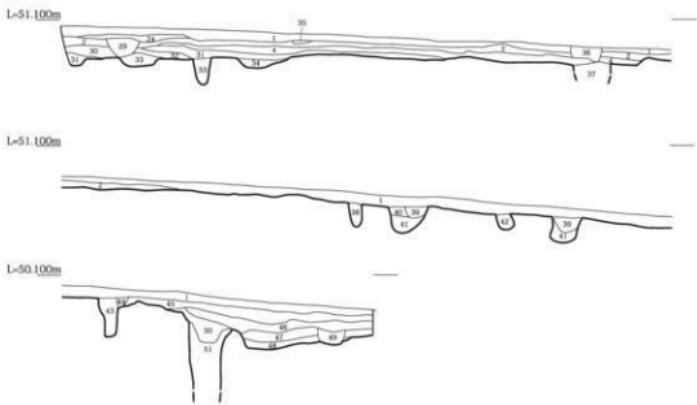
第17図 曲輪7 東西方向土層断面図 (S=1/80)

3. 調査の概要

1 トレンチ南壁



2 トレンチ北壁



名稱	地質(層序)	形態	土質	特徴
1. 107W4/1 棚	被覆(漂砂)	砂	砂質	
2. 107W4/1 棚	中等偏い 中等偏い	被覆砂シート	良土	
3. 107W4/2 に長い表面	中等偏い 中等偏い	層	砂質土	被覆(ただし傾斜によるもの)
4. 4層にシラスフカコナ層がある	中等偏い	被覆砂シート		
5. 107W4/2 棚	中等偏い	被覆砂シート		
6. 107W4/3 棚	中等偏い	シルト	少々泥質(漂砂性上)	
7. 107W4/4 棚	中等偏い	シルト	被覆砂シート	
8. 107W4/4 棚	中等偏い	シルト	被覆砂シート	
9. 107W5/1 棚	中等偏い	シルト	被覆砂シート	
10. 107W5/1 棚	中等偏い	シルト	被覆砂シート	
11. 107W5/2(2.2m)長い表面	中等偏い	被覆砂シート	小規模下陷丘陵の上にさか	
12. 107W5/2(2.2m)長い表面	中等偏い	被覆砂シート	小規模下陷丘陵の上にさか	
13. 107W5/3 棚	中等偏い	被覆砂シート	40cm	
14. 107W5/4 棚	中等偏い	被覆砂シート	40cm	
15. 107W5/4 棚	中等偏い	被覆砂シート	40cm	
16. 107W5/5 棚	中等偏い	被覆砂シート	40cm	
17. 107W5/5 棚	中等偏い	被覆砂シート	40cm	
18. 107W5/6 棚	中等偏い	被覆砂シート	40cm	
19. 107W5/6 棚	中等偏い	被覆砂シート	40cm	
20. 107W5/7 棚	中等偏い	被覆砂シート	被覆砂シート	
21. 107W5/7 棚	中等偏い	被覆砂シート	被覆砂シート	
22. 107W5/8 棚	中等偏い	被覆砂シート	レジスリッパリテラセ	
23. 107W5/9 棚	中等偏い	被覆砂シート	被覆砂シート	
24. 107W5/9 棚	中等偏い	被覆砂シート	被覆砂シート	

名稱	地質(層序)	形態	土質	特徴
25. 107W6/1 棚	中等偏い	被覆砂シート	良土	被覆砂シート
26. 107W6/1 棚	中等偏い	被覆砂シート	良土	シラス含む
27. 107W6/2 棚	中等偏い	被覆砂シート	良土	
28. 107W6/2 反復層	中等偏い	層	砂質土	
29. 107W6/3 棚	中等偏い	被覆砂シート	良土	被覆(可動性ロームブロック含む)
30. 107W6/3 棚	中等偏い	被覆砂シート	シルト	
31. 107W6/3(2.2m)長い表面	中等偏い	被覆砂シート	シルト	
32. 107W6/4 棚	中等偏い	被覆砂シート	シルト	被覆(可動性ロームブロック含む)
33. 107W6/4 棚	中等偏い	被覆砂シート	シルト	被覆(可動性ロームブロック含む)
34. 107W6/5 棚	中等偏い	被覆砂シート	シルト	被覆(可動性ロームブロック含む)
35. 107W6/5(2.2m)長い表面	中等偏い	被覆砂シート	シルト	被覆(可動性ロームブロック含む)
36. 107W6/7 棚	中等偏い	被覆砂シート	シルト	被覆(可動性-被覆砂シート含む)
37. 107W6/7 棚	中等偏い	被覆砂シート	シルト	アラバターコート化シルト含む
38. 107W6/8 棚	中等偏い	被覆砂シート	シルト	被覆(可動性ロームブロック含む)
39. 107W6/9 棚	中等偏い	被覆砂シート	シルト	シラス含む
40. 107W6/4 棚	中等偏い	被覆砂シート	シルト	被覆(可動性ロームブロック含む)
41. 107W6/2 棚	中等偏い	被覆砂シート	シルト	被覆(可動性-被覆砂シート含む)
42. 107W6/2 棚	中等偏い	被覆砂シート	シルト	被覆(可動性-被覆砂シート含む)
43. 107W6/4 棚	中等偏い	被覆砂シート	シルト	被覆(可動性ローム含む)
44. 107W6/4 棚	中等偏い	被覆砂シート	シルト	被覆(可動性ローム含む)
45. 107W6/4 棚	中等偏い	被覆砂シート	シルト	被覆(可動性ローム含む)
46. 107W6/3(2.2m)長い表面	中等偏い	被覆砂シート	シルト	被覆(可動性ローム含む)
47. 107W6/5 棚	中等偏い	被覆砂シート	シルト	被覆(可動性ローム含む)
48. 107W6/2 反復層	中等偏い	層	シルト	シラス含む
49. 107W6/3 棚	中等偏い	被覆砂シート	シルト	
50. 107W6/3 棚	中等偏い	被覆砂シート	シルト	
51. 107W6/2 反復層	中等偏い	層	シルト	

第18図 曲輪7 トレンチ土層断面図 (S=1/80)

れたものの、伐採した樹木の根の多くが遺構面に達していたため樹根を残したことにより加え、畑時の多数の搅乱により検出が大きく制約され、掘立柱建物は1棟の検出に止まった。

調査区の北側は一部が造成土によって遺構面が構成されている。造成土は平成20年度調査で土壌トレンチにおいて確認された多量のスコリアを含む黒色土を基本とし、炭化物や土器片を少量含む。さらに北端は遺構床面が一段下がり、その形状、位置から出入口と結ばれる通路と想定される。

調査区の東端では北端から南端まで堀が検出された。この堀は土層堆積状況から一時期に埋め戻され曲輪が拡張されていることが明らかとなった。埋め戻された上部では硬化面も検出され、埋め戻した後にその上部を活用していたと考えられる。また埋め戻しが行われる前に、曲輪端の肩部が崩落しているとみられ、残存する旧曲輪肩端部の位置において、東側が欠落した土坑が検出された。堀の床面は硬化面となっており通路としても利用していたと考えられる。

調査区の東南部では、平成20年度調査で検出した出入口周辺を拡張して調査を行った。20年度調査では検出できなかった出入口屈曲部は検出されたが、東西通路部分について杉群下に延びており、樹根の影響が大きく成果が期待できないことから検出を断念した。屈曲部付近通路上では集礫が検出された。通路廃棄時に礫を投棄したものと考えられる。

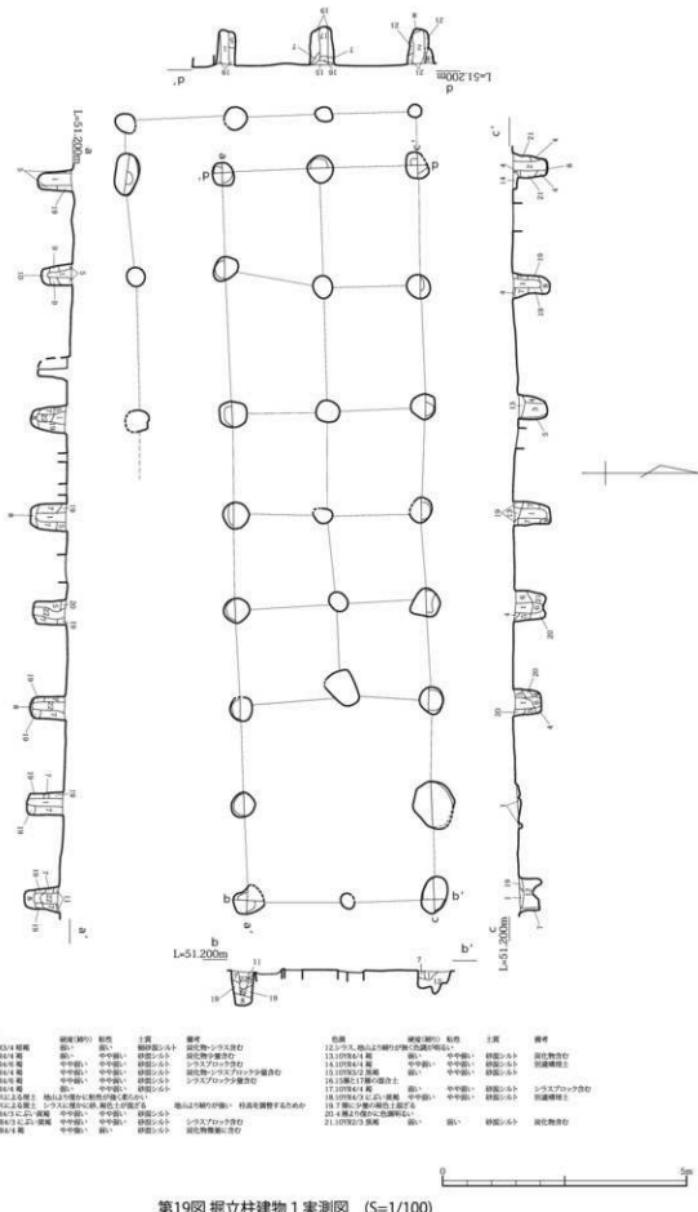
平成23年度（第14次）調査

平成23年度は21年度に調査が行えなかった屈曲後の東西部分について追加調査を行った。その結果、上層の出入口は樹根による搅乱によって確認できなかったが、下層の出入口に関しては良好な状況で検出できた。当初L字形で確認されると想定していたが、南側の壁が確認されず、T字形になる可能性が浮上したが、この確認に関しては今後の調査に委ねることにした。

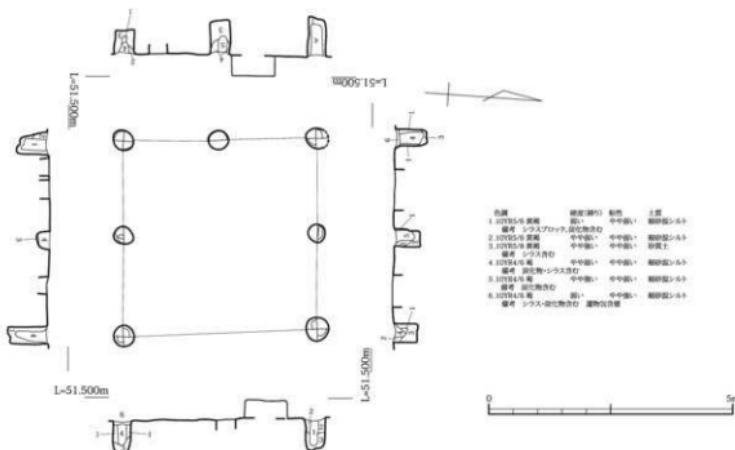
4. 遺構の調査成果

曲輪7では掘立柱建物5棟、土坑33基、溝状遺構2条、堀2条（両者共に通路としても活用）、通路状遺構1本、竪穴建物1軒、柵列1条、2時期に渡る出入口が確認された。曲輪の西端には現況高約3mの土壘が存在し、さらに西側には移佐城で最も巨大な堀切である堀切IIが存在し曲輪を守っている。曲輪面が畠や果樹園として利用されていた時期があり溝状の搅乱が多数見られたこと、東半に関しては遺構面が浅く杉や檜の切株を処理できなかったこともあり、遺構の検出が制限されてしまった部分も多い。

掘立柱建物1 曲輪7の北西部で検出された7間×2間の大型の掘立柱建物である。ただし北辺の東から2番目の柱穴が他と比較すると非常に浅いため5間×2間の可能性もある。西面と南面には庇と思われる径0.4m程度の主柱穴よりやや小型の柱穴が見られる。7間の場合、桁行約15m、梁行約4mを測り、N89°と桁行をほぼ東西方向に向ける。床面積は約60m²、庇まで含めると約96m²となる。柱穴は平均直径0.5m前後、深さは柱材の長さを調節するためか差が見られるが0.7m前後のものが多い。柱痕部分が明瞭に確認できるものが多く、すべての柱痕で炭化物が見られ、10cm前後の炭化材が残存しているものもあった。民俗事例で柱の腐食を抑えるために表面を炭化させる事例も存在するが、柱痕から出土した炭化材は木芯付近と見られるものがあり、完全に柱が炭化していたと考えられる。その規模から曲輪7の中心建物と考えられる。遺物は16世紀代の白磁が出土している。



第19図 据立柱建物1実測図 (S=1/100)



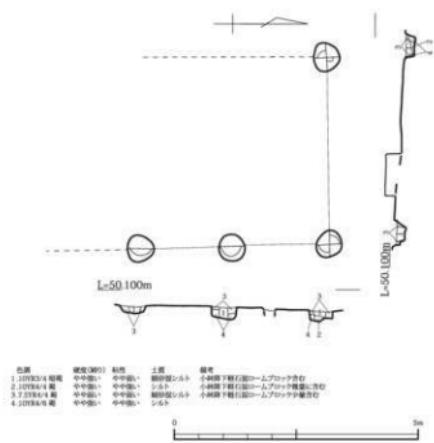
掘立柱建物2 1号掘立柱建物の南に隣接して検出された2間×2間の掘立柱建物である。桁行、梁行共に約4mで、建物の方向はN88°と掘立柱建物1にはほぼ平行する。このことから掘立柱建物1に付随する建物の可能性が想定されるが、1号建物ほど柱痕の炭化は著しくない。柱穴は直径40cm前後、深さは30~80cm前後とばらつきが大きいが掘立柱建物1と同様に柱材の長さを調整するためのものと想定される。東西方向の中央2柱穴から根石が検出された。床面積は約16m²を測る。

掘立柱建物3 曲輪7の東寄りで検出された掘立柱建物である。梁行は約3.8mで、桁行は調査区外に伸びているため不明である。桁行はN2°とほぼ南北に向ける。造構面が浅く切株を残さざるを得なかつたため西面は1柱穴の検出に止まっている。柱穴は何れも0.3m前後と浅いが柱痕は比較的明瞭に確認された。曲輪7の出入口から入ると最初に目にする建物であり、通路の方向とほぼ平行する形で配置されている。このため曲輪奥への視界を遮る役割をもっていたと考えられる。

掘立柱建物4 掘立柱建物2の東側で検出された4間×2間の掘立柱建物である。桁行約8.6m、梁行約4mを測る。桁行をN5°とほぼ南北方向に向ける。建物配置が掘立柱建物1と重なるため、戦後関係が存在するが、柱穴が切りあっていないため判断が付かない。柱穴の裁ち割り調査は行っていない。床面積は43m²を測る。

掘立柱建物5 曲輪7の西寄りで検出された3間×2間の掘立柱建物である。桁行約6m、梁行3.4mを測り、桁行をN88°に向け、掘立柱建物1とはほぼ平行する。溝2に切られているが、他の掘立柱建物との時間的関係性は明らかではない。柱穴の裁ち割り調査は行っていない。床面積は20.4m²を測る。

今回掘立柱建物は5棟の検出に止まったが多数の柱穴が検出されていること、本来はさらに建物が存在した可能性が高い。全面的な調査でない点と搅乱、切株の影響により検出が十分で



第21図 曲輪7掘立柱建物3 (S=1/100)

はないことが理由として挙げられる。

土坑1 調査区の北西で検出されたが、上面を通路状遺構によって削平されていた。平面形は楕円形を呈し、長軸1.3m、深さ0.85mを測り、壁面は移佐城跡でよくみられるほど垂直に立ち上がるタイプの土坑である。遺物は土師皿、小片のため図化していないが青花碗片、青磁片が出土している。

土坑2 曲輪の西端付近で検出された。平面形は楕円形を呈し、長軸5.4m、短軸3m、深さ0.9mを測る大形の土坑である。土層の堆積は凹レンズ状を呈し、出土する遺物も少なく、有機質も見られ

ないことからゴミ穴等の特別な用途は考

え難く性格は不明である。曲輪奥に位置し、土壘の直前にあることから枯山水の池の可能性も想定される。遺物は龍泉窯系青磁碗、備前焼鉢、備前焼壺、青花、青釉磁器皿、土師器小皿、鉄製品が出土した。多少の時期幅はあるものの16世紀中葉と考えられる。

土坑3 曲輪西寄り中央に位置し、掘立柱建物1の柱穴に切られる土坑である。平面形は楕円形を呈し、長軸0.9m、短軸0.5m、深さ0.1mを測る。

土坑4 土坑3の東に隣接する位置にある。平面形は楕円形であり、長軸1m、短軸0.4m、深さは0.3mを測る。1層に土師器の小片と焼土粒を含んでいる。しかし土坑壁や床面には被熱による赤化が見られないことから、この土坑において火を使用したとは考え難い。遺物は青磁小片、青花小片が出土している。

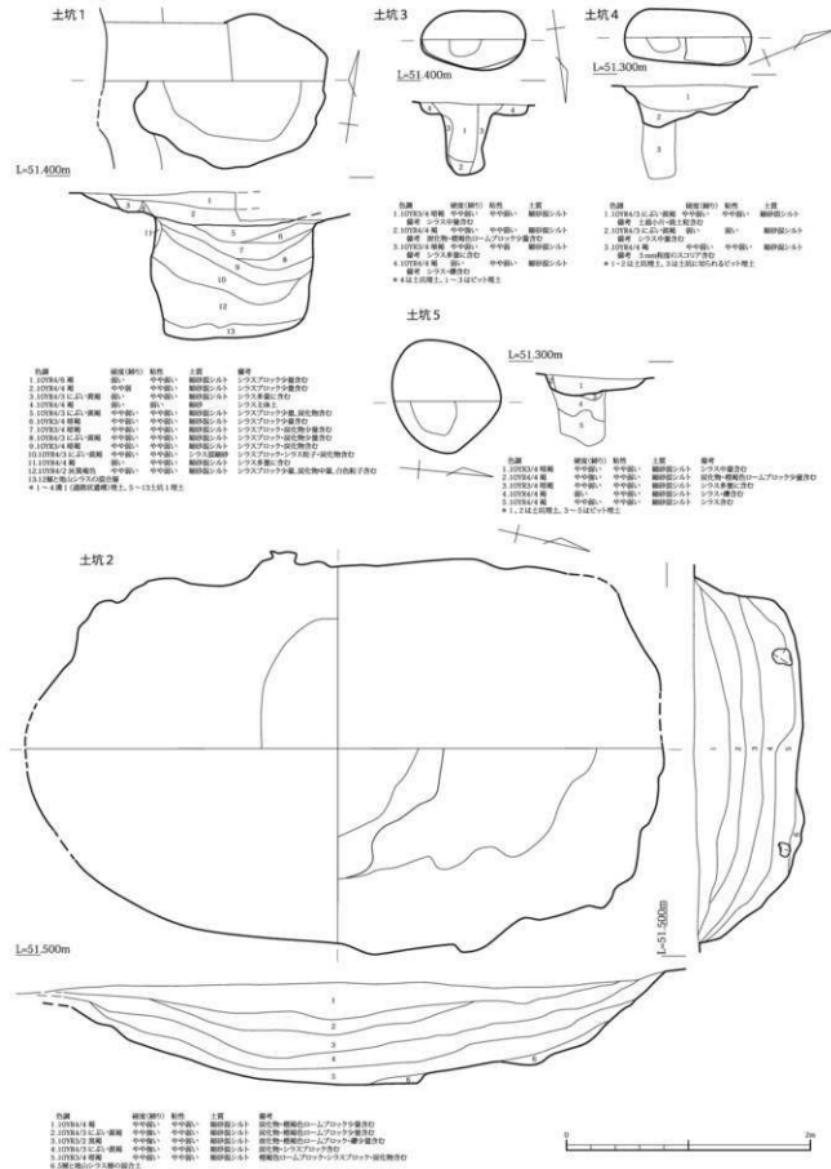
土坑5 曲輪の西寄りに位置する平面円形、断面形は皿形の土坑である。直径は0.9m、深さは0.2mを測る。ピットを切っている。

土坑6 曲輪の西寄り中央に位置し一部がアゼにかかっているが平面円形の土坑である。直径は0.85mを測り、深さは床面まで達していないが1.45m以上ある。壁面は垂直に立ち上がり、まさに円筒形を呈している。土層はレンズ状の堆積で自然堆積と考えられる。

土坑7 土坑6の南側に位置する。平面形は不整形な円形で、断面形は北側の肩口がキャリバー状に開く。断面を実測した部分で幅1.25m、深さ1.2mを測る。土坑の下層において均質な白色シラスによって構成される層が検出された。この層は他層との境界も明瞭であり、人為的な層である可能性が高いが埋葬等の痕跡は確認されなかった。青花皿小片が出土している。

土坑9 曲輪西寄り中央、土坑4に近接する位置で検出された。平面形は隅丸方形で、長軸0.9m、短軸0.3m、深さ0.2mを測る。遺物は出土していない。

土坑11 曲輪の中央北寄りで検出された。平面形は歪な円形を呈し、直径1.15m、深さ2.35mを測る。壁面はほぼ垂直に立ち上がり、全体の形状は円筒形を呈する。土層の堆積は土坑床面に木箱のような構造物を設置して上部を埋め戻し、後に木が腐食してU字状に陥没したと考え



第22図 曲輪7土坑実測図1 (S=1/40)

られる状況が確認された。ただし精査を行ったが本質が置き換わった土層は確認できなかった。遺物は土師器皿が出土している。

土坑12 11号土坑に隣接する位置で検出された。平面形は隅丸長方形で、長軸1.3m、深さは2.5mまで掘削を行ったが床面は検出されず、以下の掘削は危険が伴うため断念した。壁面はほぼ垂直に立ち上がり、縦断面は6号土坑、11号土坑に類似する。ただし11号土坑とは異なり土層の堆積は凹レンズ状を呈するため、木箱等の構造物は土坑内に設置されていなかったと見られる。隣接する位置に2基の類似する土坑が掘削されているが、土層の堆積状況から見ると両者の性格は異なるようである。遺物は土師器皿、壺、小片ではあるが青磁碗片、青花皿片が出土している。青花皿は景德鎮産の端反皿で16世紀代と思われる。

土坑13 曲輪のほぼ中央で検出された。平面形は楕円形で長軸1.7m、短軸0.95m、深さ0.45mを測る。土層はほぼ単層であり、一括で埋め戻された可能性がある。遺物は黒釉陶器片が出土した。

土坑15 曲輪のほぼ中央、中央堀の東側で検出され、東側堀を切っている。平面形は楕円形で長軸1.9m、短軸0.76m、深さ0.4mを測る。遺物は出土していない。

土坑16 曲輪7の中央堀の西に近接する位置で検出された。平面形は歪な楕円形を呈しており長軸0.38m、短軸0.17mを測る。土坑の西壁は熱を受けて赤化している。小規模な土坑であるため通常は壁全面が被熱により赤化するはずであるが、東壁は全く赤化しておらず何らかの工具などを土坑に設置して火を使った可能性がある。

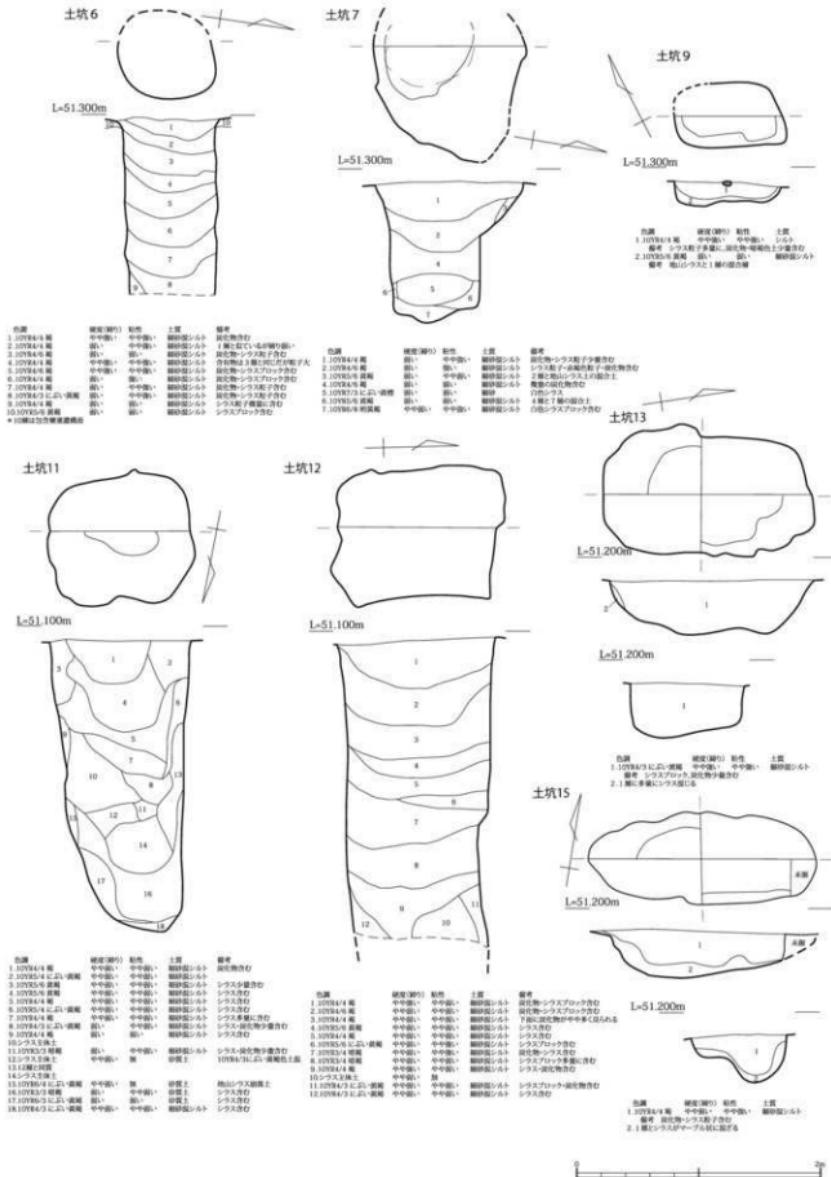
土坑17 曲輪中央北寄りで検出された平面隅丸方形の土坑である。長軸約0.9m、短軸約0.8m、深さ約3mを測る。11号、12号土坑と類似する形態の土坑で曲輪北寄りに位置する点も同様である。遺物は検出面から0.5m程度で土師器片が1点出土したが、それより下層では全く出土しなかった。また3層以下は土坑が狭く分層が不可能であった。平面形や垂直に壁が立ち上がる点、平面長軸の2倍以上の深さをもつ点が土坑12と類似する。

土坑18 一辺約1.1m、深さ0.4mを測る平面隅丸方形の土坑である。埋土内からブロック状の炭化米が多量に検出された。また鉄鎌が炭化米下部から出土したことから祭祀土坑の可能性も想定される。遺物は他に15世紀後半から16世紀初め頃の備前焼壺片が出土した。炭化米はAMS法による放射性炭素年代測定を行ったが、結果は 265 ± 20 年BP (1635~1665年)という値であり、出土遺物の年代とは齟齬が生じた。備前焼壺は大形ではあるが破片であり混入の可能性が高いが、17世紀中頃という年代にはもう一つの問題がある。それは穆佐城が17世紀初頭には廃城になっているということである。薩摩藩では廃城後も城を定期的に管理していたという指摘があり、事実穆佐城跡でも近世段階の遺物が包含層から出土することははあるが、廃城後の主郭で祭祀を行うかという点については疑問が残る。今後類例の集成を行い検討の必要性がある事例である。

土坑19 曲輪の中央東寄りで検出された平面隅丸方形の土坑である。長軸1.15m、短軸0.9m、深さ0.2mを測る。遺物は出土していない。

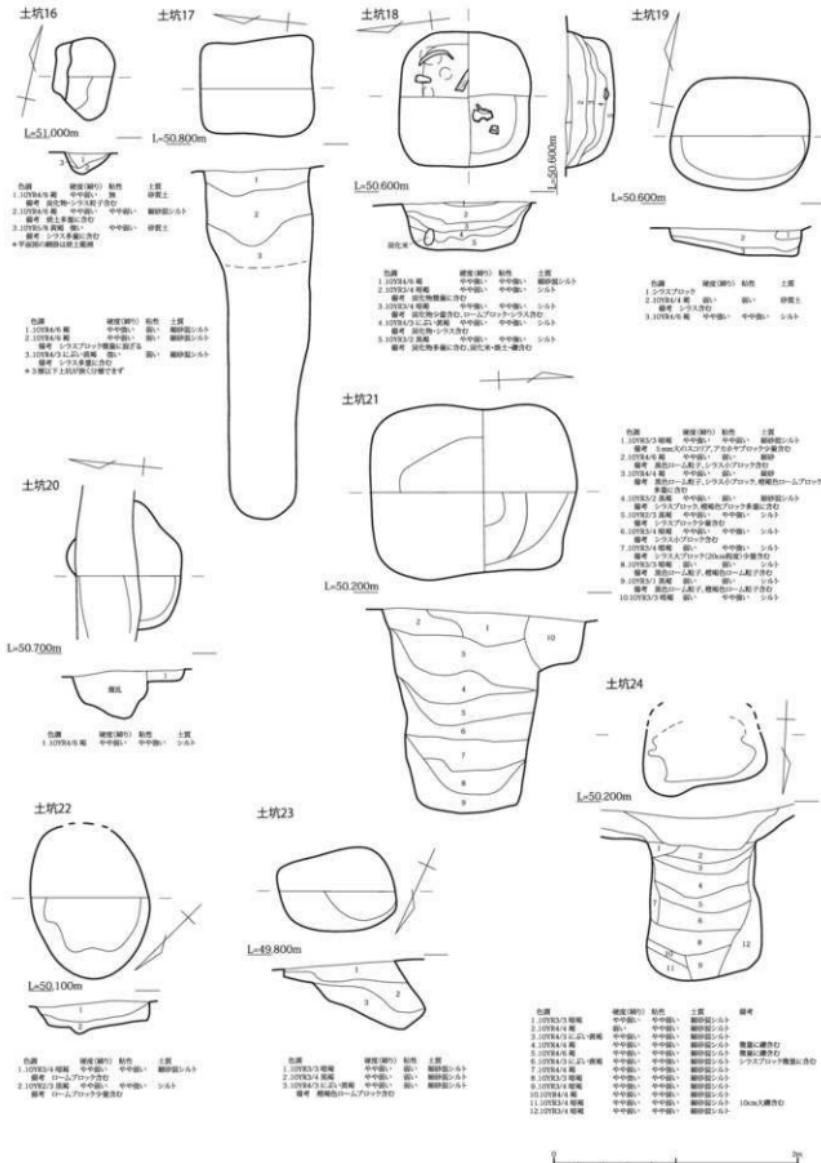
土坑20 曲輪の中央東寄りで検出された。土坑の大部分を搅乱溝に切られている。平面形は不整形で長軸1m、短軸0.75m、深さ0.1mを測る。遺物は出土していない。

土坑21 曲輪の東寄りで検出された長軸1.7m、短軸1.4m、深さ1.7mを測る平面隅丸長方形の

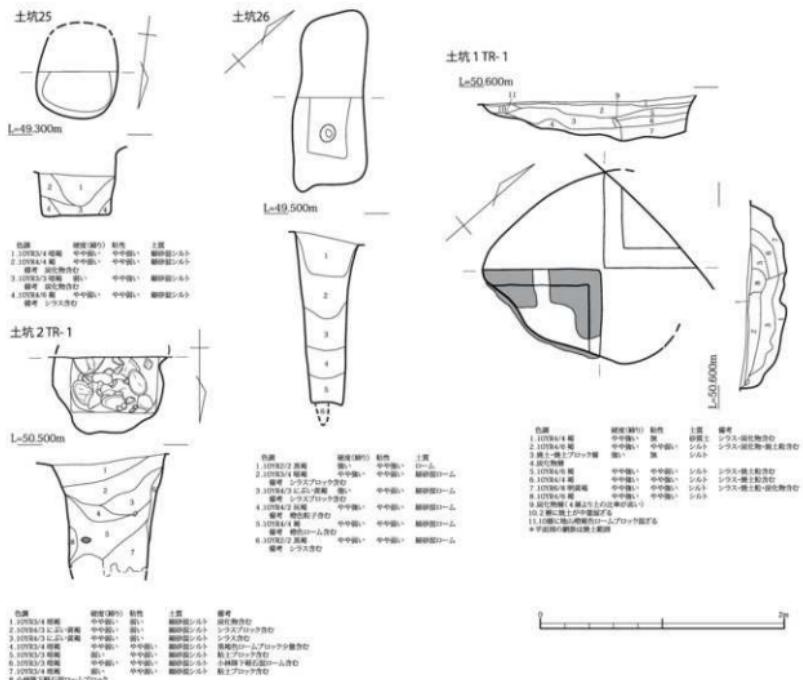


第23図 曲輪7土坑実測図2 (S=1/40)

4. 遺構の調査成績



第24図 曲輪7土坑実測図3 (S=1/40)



第25図 曲輪7土坑実測図4 (S=1/40)

土坑である。上位層において多量の地山橙褐色ロームブロックを含む層が検出されたことから、人為的に埋め戻された可能性が高い。形態的には井戸のように思えるが、底面はATであり湧水も貯水もできる状況ではなく水場関係の遺構ではないと思われる。遺物は土師器皿、壺が出土している。

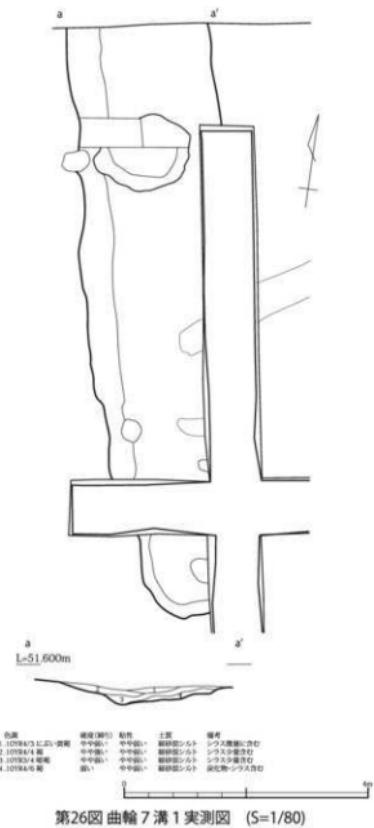
土坑22 土坑21の東で検出された。一部を土坑21に切られている。平面楕円形で長軸1.3m、短軸0.95m、深さ0.2mを測る。遺物は出土していない。

土坑23 曲輪東端付近に位置する。平面やや歪な隅丸方形で長軸0.95m、短軸0.7m、深さ0.6mを測る。南西に向かってオーバーハンプグしている。遺物は出土していない。

土坑24 上部が上層の出入口から延びる通路状遺構により削平されている。平面形は長軸約1.2mの楕円形と想定される。壁面はほぼ垂直に立ち上がり、深さは残存部で約1.1mである。上層からほぼ完形の土師器小皿が出土した。

土坑25 土坑24の南に接する位置で検出された。土坑24と同様に上部を通路状遺構により削平されている。平面形はやや歪な円形で径0.65m、深さ0.5mを測る。遺物は備前焼片が出土している。

土坑26 曲輪東端中央付近に位置する。平面隅丸長方形で、壁面は垂直に近い角度で立ち上が



第26図 曲輪7溝1実測図 (S=1/80)

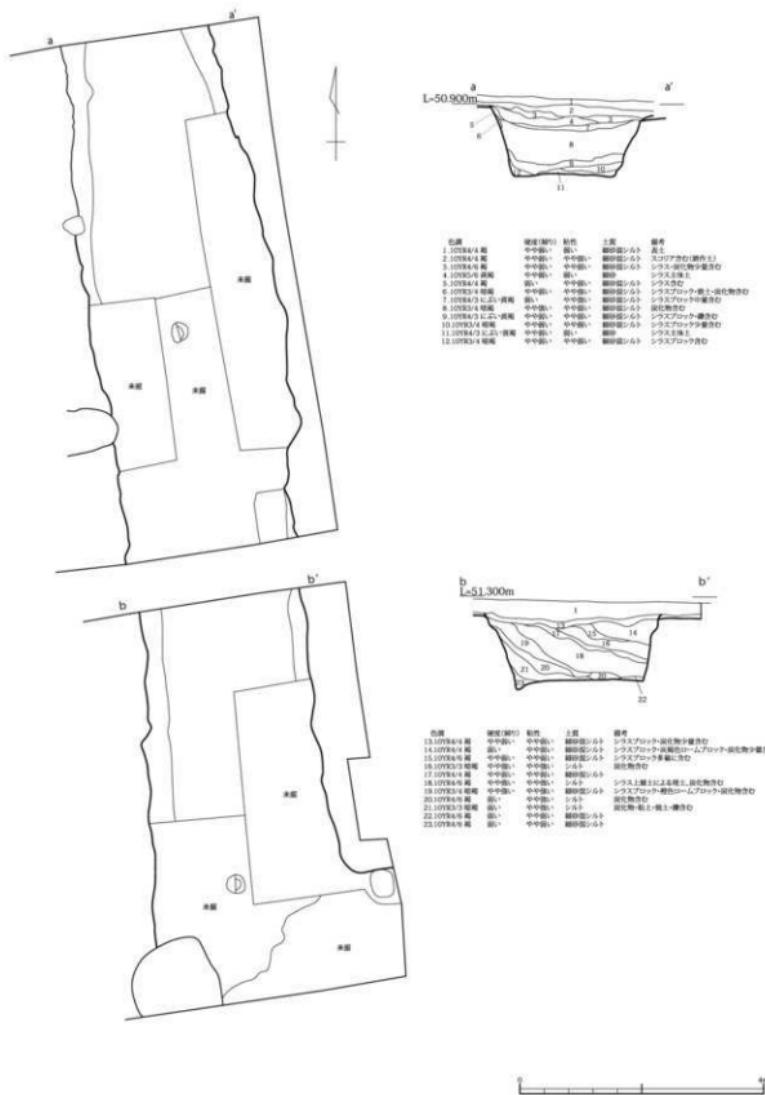
る。長軸1.45m、短軸0.25m、深さ1.4mを測る。床面からは逆茂木痕が確認され、埋土も縄文時代早期遺物包含層に相当する黒色ローム以下の中土で構成されていることから、縄文時代早期の陥し穴状遺構と考えられる。

土坑1 TR-1 1トレンチの西側、曲輪中央南寄りに位置する。長軸1.5m以上、短軸約1.5m、深さ約0.4mを測る。土坑南西部は被熱により硬化した焼土が集中するが、北東部は焼土が粒子状に含まれる程度である。埋土も同様に南西部の最下層は炭化物層、その上位に焼土層が堆積するが、北東部は微量の炭化物を含む褐色のシルト層で構成される。南西部の堆積状況からみると、炭化物層が焼土層にパックされたような状況で検出されたことから、焼土層部分は天井部もしくは庵を構成していたと考えられる。庵のような施設と想定されるが被熱の度合いが非常に強い。遺物は出土していない。

土坑2 TR-1 2トレンチの中央西寄り、曲輪の南東部に位置する。トレンチ壁にかかるており検出は土坑の半分程度と想定される。おそらく短軸となる東西方向は0.9mを測り、深さについては1m付近で多量の礫や粘土による構造物と思われる状況が確認されたため、下層の調査を行っておらず不明である。壁面は垂直に近い角度で立ち上がる。遺物は土師器片が出土している。

溝1 2号溝状遺構の西、2号土坑との間に位置し、南北方向に検出された。北（曲輪8側）から南に進むにしたがってスロープ状に浅くなり、調査区のはば中央で途切れる形となる。床面がATのため明確な硬化面は検出されなかったが、通常の遺構面として検出されるATと比較すると若干硬度が高い。性格としては曲輪7と曲輪8を結ぶ通路と考えられるが、曲輪7の全体配置から見ると、掘立柱建物群の「奥」に位置することから、通用口のような用途であったと考えられる。

溝2 調査区の西寄りで南北方向に検出された。幅は1~2mで、深さは最も深いところでも0.3mに満たない程度である。北端は緩やかに浅くなりそのまま溝が途切れる。その位置と底面が傾斜している状況から区画兼排水溝と想定される。遺物は小片ではあるが黒釉陶器が出土している。



第27図 曲輪7中央堀実測図 (S=1/80)

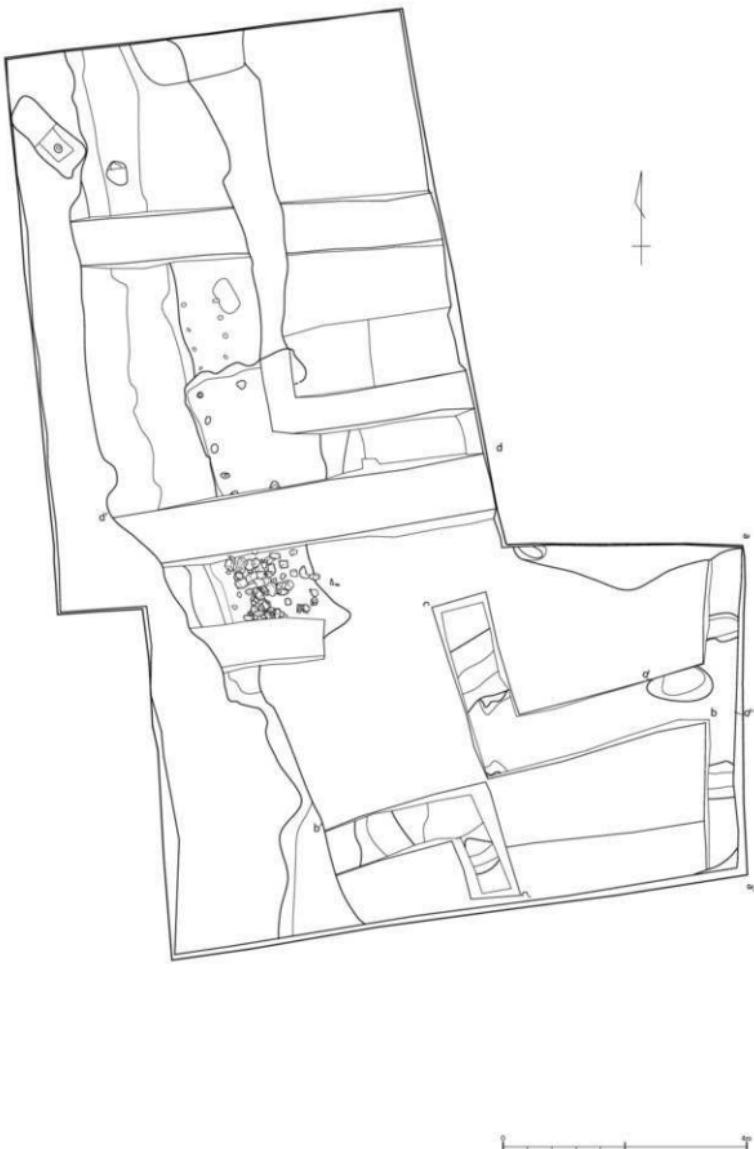
中央堀 曲輪のはば中央に位置する。幅は2.9~3.2m、深さ1m前後、壁面の角度は70~80°を測り、断面形状は逆台形を呈し箱堀となる。曲輪を東西に分断する形で南北方向に掘削されている。底面からは硬化面が検出され通路としても使用されたことがわかる。この通路も曲輪7と曲輪8を結ぶものであり、西側で検出された溝1とは使い分けが成されていた可能性が高い。中央堀は掘立柱建物群の東側に位置し、曲輪西半の中で見ると「表」側に所在するため、通用口の様な役目の溝1とは異なり、公的な通路と想定される。また土層の堆積状況と出土した遺物から穆佐城が城として機能している時期に埋め戻されていることが明らかになった。b b'の断面図では、埋め戻しが西から東へと行われた様子がわかる。遺物は白磁、青磁、青花、褐釉陶器、備前、瓦質土器、土師器、土錘など多種に渡り、出土量も穆佐城の中では多量である。これは埋め戻し前の生活面の土を利用して堀が埋め戻されたためと考えられる。埋め戻し後もピットや土坑が掘削されて、その上面が利用されている。曲輪7、8間の斜面では階段状造構が検出されたが、詳細は曲輪8の調査成果に譲りたい。

出入口 曲輪の南東端に位置する。上下2時期確認されており、下層の出入口が埋め戻された後、上層の出入口が構築されている。両出入口共に東から曲輪に入り、上層は6.5m、下層は4m程度西に進んだ位置で北方向に屈曲する。下層に関しては前述のとおり南にも通路が伸びT字型になる可能性がある。上層の出入口は曲輪東端をL字形にカットし、浅い溝を設け通路面としている。屈曲部での曲輪面との比高差は0.65m程度と大きな数字ではない。北方向への屈曲後は曲輪の北端まで進み、そこから今度は西方向へ屈曲し、曲輪の1/3程度進んだ位置でスロープ状に浅くなった後収束する。

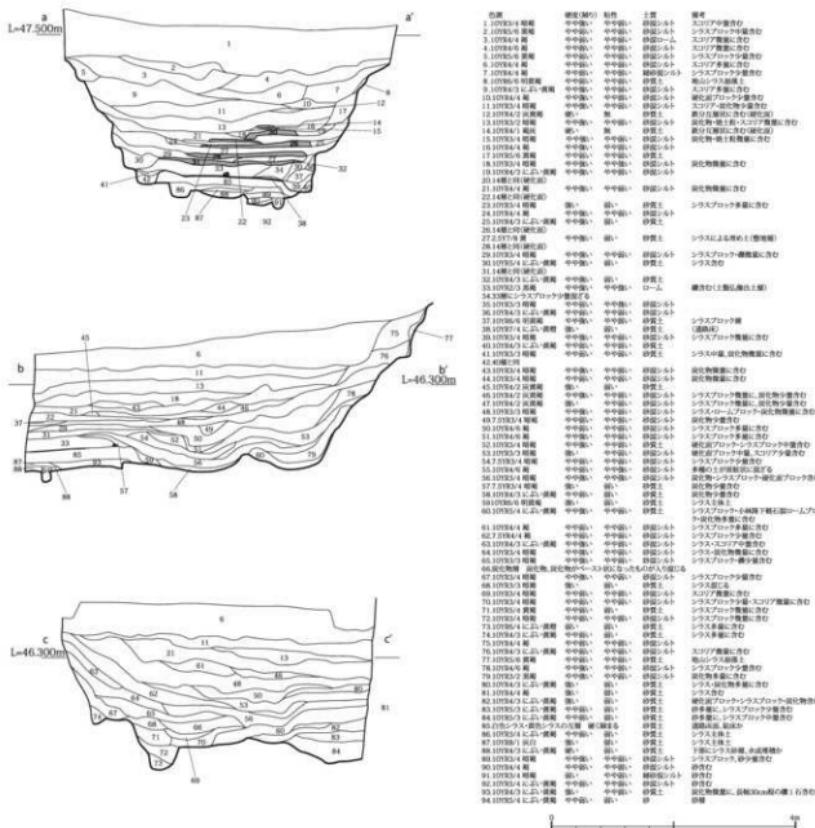
下層の出入口は曲輪7の東端位置で上面幅4.9m、下面幅2m、深さ2m、屈曲後は幅2.7m、深さ2.7mと大きく溝状に掘り込んで構築されている。東端位置の壁面は65°前後の角度で立ち上がるが、後述する複数の硬化面に対応するよう段が存在する。曲輪7の東側には曲輪10が存在するが、ここでも過去の調査で曲輪7の出入口に接続すると考えられる底面が平らな大型の溝が東西方向で確認されている。曲輪7と曲輪10の東西方向の通路を合わせた長さは25m程度と推定されるが、登城者は深い堀底を延々と25mにも渡って進み曲輪7出入口で北へ屈曲、さらにそこから曲輪7東端堀底を24m程度進み曲輪8へと抜けるルートを進んだと想定される。

曲輪7出入口の曲輪東端部分においては、最下層の硬化面の両脇に排水溝と思われる溝が設けられていた。また7面に渡る硬化面が確認されており、埋没しながら、もしくは埋め戻し路面を作り変えながら使用を続けていたことが想定される。最下層の硬化面上からは碟群と土製の仏像が検出された。出土層位はローム質の均質な土であり人為的な理土と考えられ、何らかの祭祀を行った後に路面を作り変えた可能性が高い。同様の仏像は県内では山内石塔群で出土している。最下層の硬化面下は水の影響からか底面が安定していない。第29図13層以上は不純物を含む比較的均質な理土であり人為的な理土と考えられる。下層は東端堀へと続き、曲輪8へと向かう。

東端堀は当初曲輪の端に近い位置であったため、旧曲輪の西側の肩部で、造成によってここから東を拡張したものと考えていたが、サブトレンチ内で東側の立ち上がりが確認されたため、出入口から続く堀（通路）と判明した。横断面は台形でいわゆる箱堀であるが、下半は垂直に



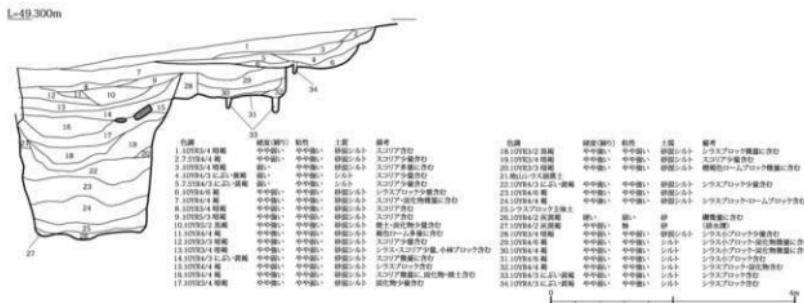
第28図 曲輪7出入口平面図 (S=1/80)



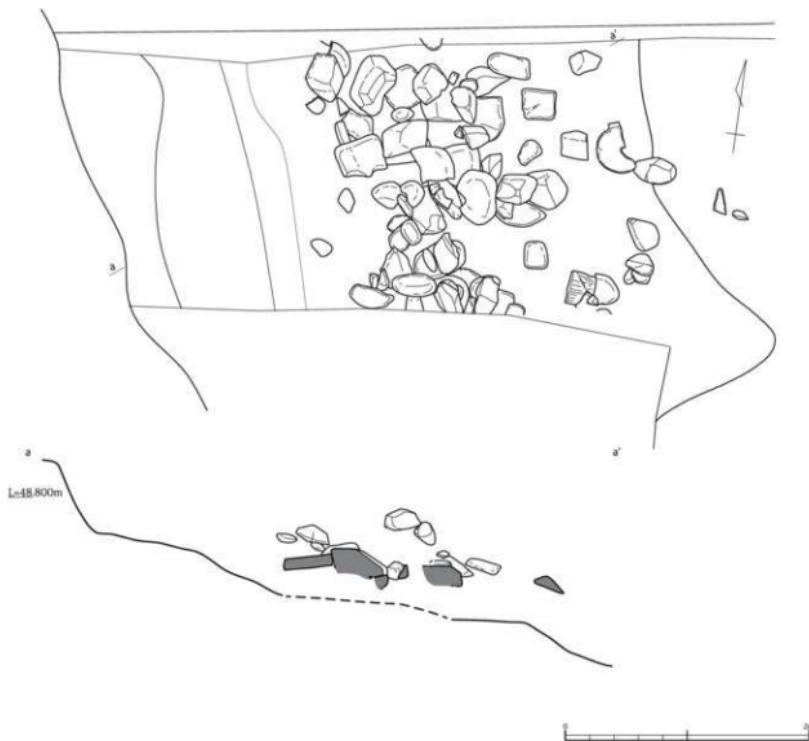
第29図 曲輪7 出入口土層断面図 (S=1/80)



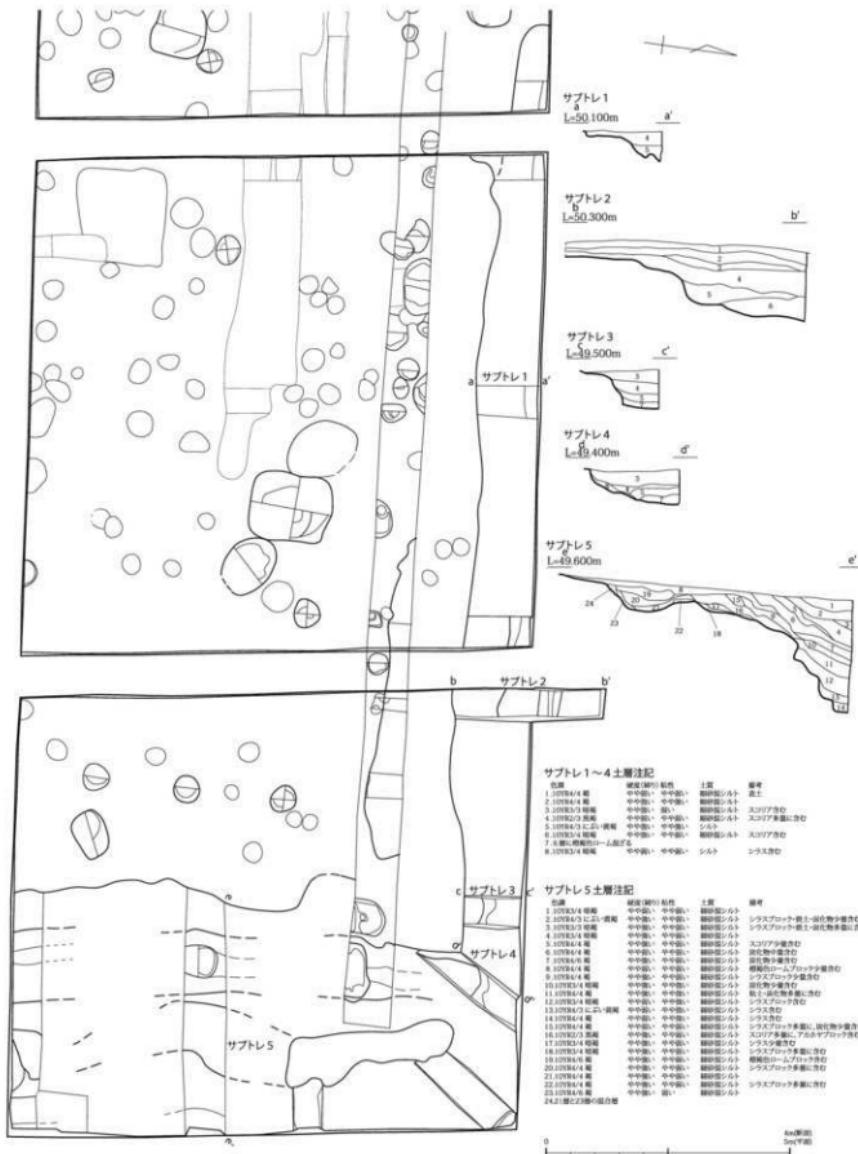
第30図 曲輪7出入口碑・遺物出土状況図 (S=1/20)



第31図 曲輪7出入口(東端縦)土層断面図 (S=1/80)



第32図 曲輪7上層出入口廃棄礫実測図 (S=1/40)



第33図 曲輪7東端堀・通路状造構実測図 (平面S=1/100 断面S=1/80)

近い角度で立ち上がる。底面には硬化面が形成されており、東端には排水溝とみられる小溝が設けられている。埋土は多量の地山ブロックを含む層、炭化物、焼土、壁土などの不純物を多量に含む層などで構成されており、明らかに埋め戻された状況を示している。また上位層で廃棄された地輪と見られる凝灰岩片も検出された。

遺物は白磁、青花などの輸入磁器、華南産と思われる黒釉陶器、備前焼、信楽焼、瓦質土器、土師質の壺、皿、石臼が出土した。遺物の時期は16世紀中頃から後半のものが中心となり、出入口が埋め戻されたのはこの時期と考えられる。埋め戻しの埋土の中には焼土や炭化物、焼けた壁土を多量に含む部分もあり、中央堀と同様に、埋め戻し前の生活面の土を利用したためと考えられるが、焼土や炭化物、焼けた壁土の存在から火事が発生した後の土で造成を行ったものと想定される。

また東端堀の一部では埋め戻した後に形成された硬化面が検出された。この硬化面より下層で炭化物が多量に検出された層が確認されたため、その層から採取された炭化物をAMS法による放射性炭素年代測定を行ったところ、 295 ± 20 年BP（1520～1560年）という結果が得られている。

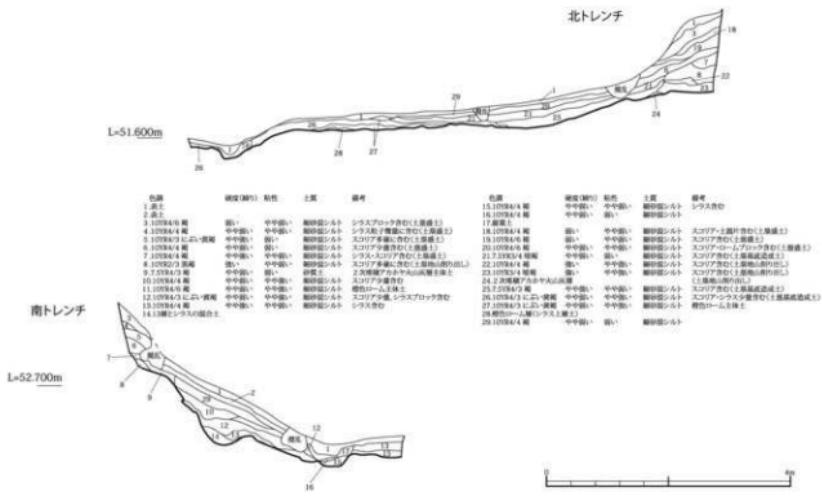
堅穴建物1 虎口上層の通路面下において検出された。一辺約3m、深さ約0.5mの堅穴建物である。明確な主柱穴はもたず、壁際には直径10cm程度の細い柱穴を多く配置し上部を支える構造である。南北方向は5柱穴、東西方向は3柱穴の配置と考えられる。遺物は床面付近で土師器皿の破片、同じく床面付近で炭化材、炭化米が検出された。この1号堅穴建物が埋没した後に東側堀（下層出入口）は掘削されており、その時に建物の東側は削平されている。上屋構造は細い柱穴のため簡易な構造物であったと想定される。

曲輪7出入口構造について ここで曲輪7出入口付近の遺構変遷と構造についてまとめておきたい。

虎口付近で最も時期が遡る遺構は堅穴建物1である。土師器皿の破片が出土しているが宮崎平野では編年が確立していないため時期を確定し得る資料ではない。また1号堅穴建物の時期の出入口構造については遺構が確認されていないが、この建物の性格は、建物の規模と曲輪全体の位置から鑑みると、曲輪の入口を守る詰所のような施設であったと想定される。

次に1号堅穴建物が埋没した後に、その埋土を掘り込み東側堀が掘削される。ただし廃棄された時期は前述したとおり16世紀中頃から後半と想定されるが、開削された時期は明らかではない。この下層出入口は最も戦を想定した出入口構造と言え、約50mに渡って堀底を進む特異な構造となっている。

下層出入口が埋め戻された後に上層出入口が構築される。段状に掘削した土は下層出入口を埋め戻す造成土の一部にも使用されたとみられる。上層出入口が使用された時期は下層出入口が廃棄されたと考えられる16世紀後半から穆佐城が廃城になる17世紀初頭までの短期間であったと想定できる。さらにその防御性は下層出入口と比較すると格段に低いものになっている。可能性としては、調査区外の位置に、他に防御を高める堀等の施設を併設したか、伊東氏が豊後国へ退去した1577年以降に、島津氏による日向国支配が安定化した後の造成が想定できる。つまり下層出入口の埋め戻しは伊東氏から島津氏へと穆佐城の支配者が転換した際に成されたと考えるのが妥当であろう。



第34図 曲輪7土壁トレンチ土層断面図 (S=1/80)

土星 曲輪の西端に位置している。現況高は約3mを測り、曲輪8と一続きで曲輪7を守っている。地形図から曲輪の南側に向かってやや巻いている状況が見て取れるが、現況からは南側に土星が存在したか判断することはできない。南北2本のトレンチを設定し、土星の構築方法を明らかにするため土層の堆積状況の確認を行った。ただし土星の西側は堀切Ⅱであり、崩落の危険性等を鑑みて曲輪側のみ立ち割ることにした。また北トレンチは曲輪の北西で確認された段の構築状況も同時に確認できるようにトレンチの設定を行った。

土層観察の結果、南北トレンチ共に自然堆積土を削り出し、その上に若干の盛土を施し土星を構築している状況が確認された。最上位の自然堆積土は8層で、多量に黒色のスコリアを含む。この層を含め自然堆積土は緩やかに東に向かって下降傾斜している状況が見て取れる。この8層は曲輪20で造成土として確認された霧島御鉢高原スコリアを含む土に類似するが、自然堆積層のため炭化物など不純物を含まない。8層より上位の層は締まりが弱く複数種の土が混ざった様相であったため盛土を行った状況と判断した。盛土は当然構築時には叩き締められていたと考えられるが、土星上に多数存在する樹の根の影響により締まりが弱くなっている可能性が高い。

北トレンチで確認した段は、当初は畠の区画等、後世（現代）の盛土による構築と想定していたが、地山を削り出して構築しており、さらに上位堆積土に関しても搅乱を受けている状況は確認されなかつたため、この段も穆佐城期に構築されたものと判断した。またこの段の収束位置には小溝が設けられているが、堆積状況から後世に掘削されたものとみられる。この段の性格はトレンチによる調査のため情報が十分ではないが、曲輪の最も奥に所在し、背面に土星を背負う位置から「庭」の一部の可能性がある。今後段上を面的に調査し、その性格を明らかにしていく予定である。

5. 出土遺物

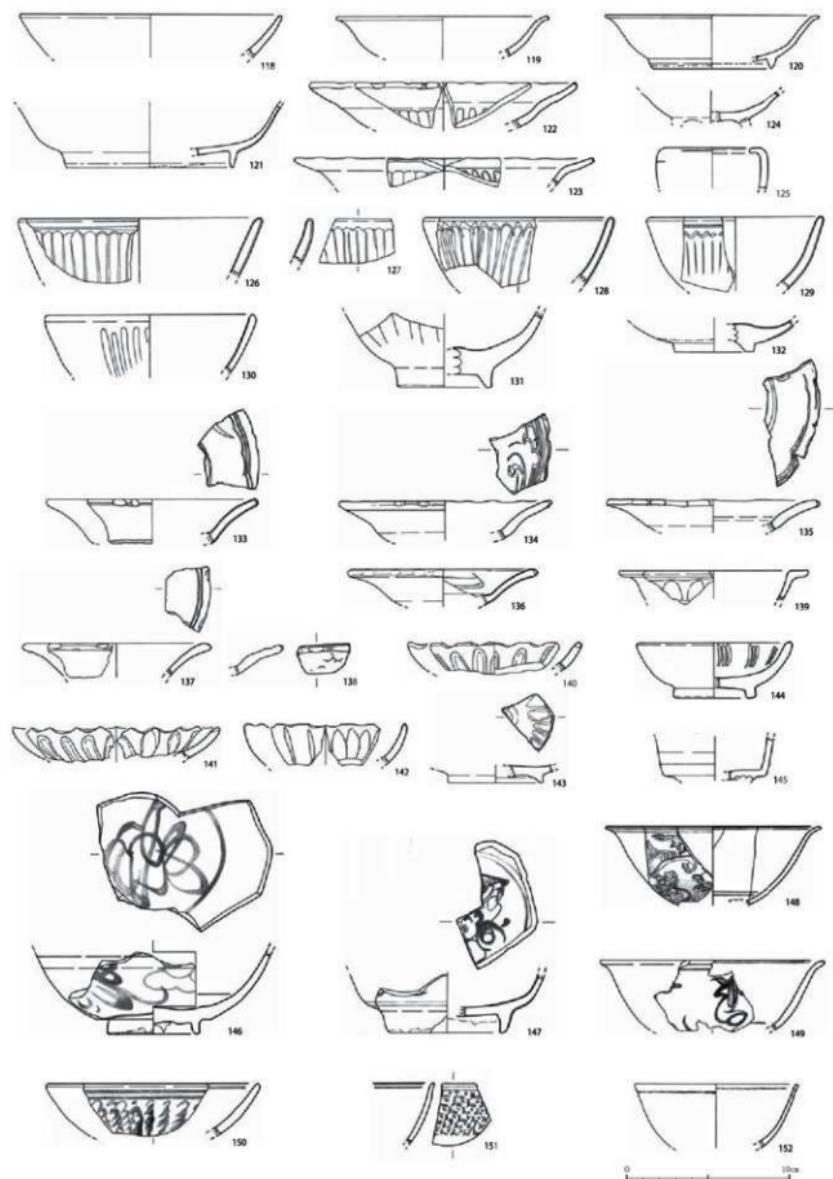
白磁 118は碗である。口縁部が緩やかに内湾する。119～123は皿である。119～121は体部中位から口縁部に向かって外反するいわゆる端反の皿である。122、123は折れ縁口縁皿である。青花にも見られる器形で染付を省略したものと思われる。124は八角壺で4ヶ所折り高台である。125は香炉である。口縁端部を内側に折り曲げ、外面には横向方向の切彫文が施されている。

青磁 126～132は碗である。126～131は体部外面に連弁文を施す。133～143は皿である。133～138は輪花皿で内面に波状圈線、刻花文を施すものが多い。139は口折皿である。体部外面には連弁文を施す。140～143は菊皿である。体部内外面に型押しの菊弁が施されている。144は小壺である。体部内面に連弁文を施す。145は香炉である。

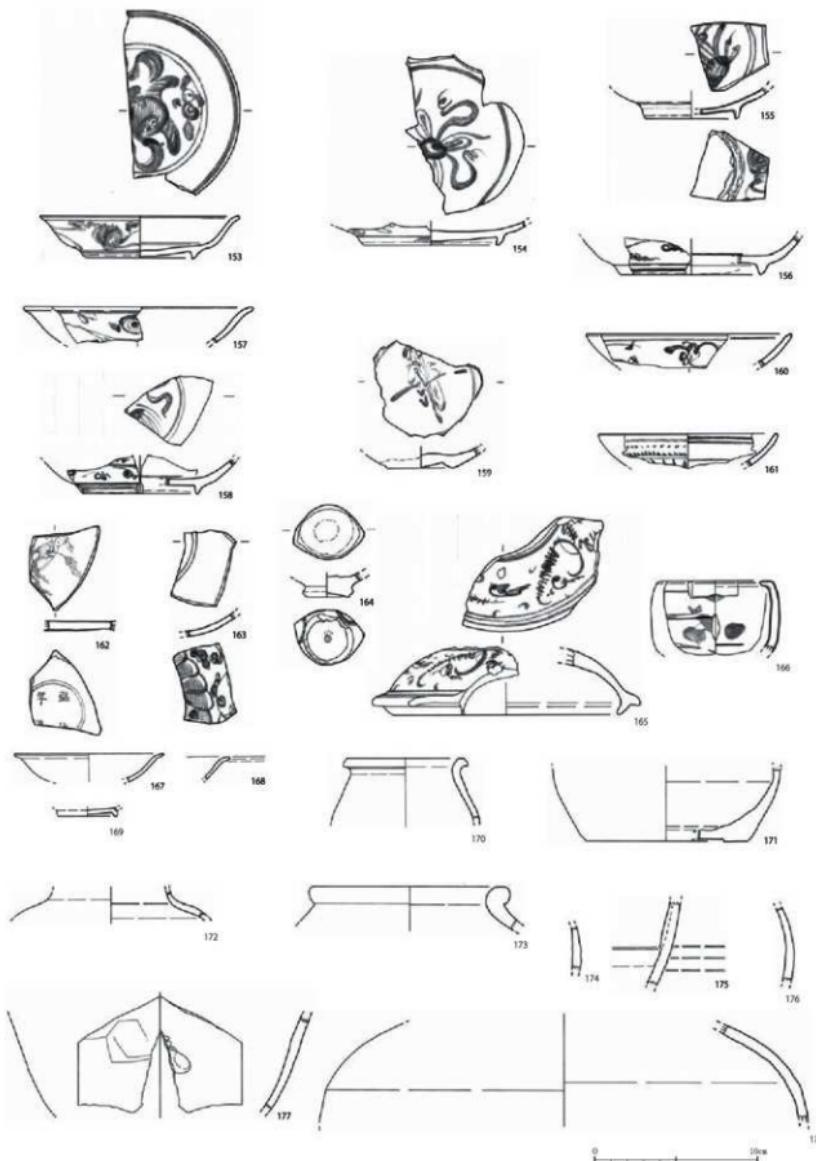
青花 146～152は碗である。146は体部外面に唐草文を描く。二次被熱により釉が白濁している。147は体部の立ち上がりが強い。見込に草花文を施す。148、149は口縁部が外反する器形である。148は草花文、149は唐草文を体部外面に施す。150は体部外面に簡略化された小花文を施す。151は体部外面に簡略化された円を3つ組み合わせた文様を描く。152は圓線のみのシンプルな文様である。153～163は皿である。153は体部外面に牡丹唐草文、見込に玉取獅子を描く端反の皿である。154は体部外面に唐草文、見込に十字花文を描く。二次被熱により釉が白濁している。155は文様が判然とせず高台の釉剥ぎも荒い。156は体部外面に唐草文を施す。157は体部外面に唐草文を施す。158は体部外面に唐草文、見込に十字花文を施す。154と同様に二次被熱により釉が変色している。159は葵筋底の皿である。胎土や呉須の発色が悪い。見込に文字文を施す。160、161も底部を欠損しているが葵筋底の皿である。体部外面に160は唐草文、161は波濤文、芭蕉文を施す。162は見込に唐人文、高台内に「弘治年造」の銘を施す。164は器形不明であるが見込が蛇の目釉剥ぎされている。165は壺蓋である。天井部が欠損しているため摘み形状は不明である。花鳥文が施されている。166は香炉である。口縁部を内側に屈曲させる。

輸入陶器 167～169は華南産の青釉小皿である。167、168はコバルトブルーの釉を施し、169はその発色不良、もしくは二次被熱による変色と思われる。167、168は青釉小皿でよくみられる菊皿ではなく通常の端反皿の形状である。170はオリーブ黒の釉を施した壺である。体部から頸部にかけて緩く窄まり口縁部が外反する。171は褐釉陶器の壺もしくは瓶の底部である。底部は僅かに高台状の段を有する。172は瓶の肩～頸部である。極暗褐色の釉を施す。173は黒釉陶器壺の口縁部である。口縁端部を折返し玉縁状にしている。177は華南産の壺である。体部外面に六角形の型押しが見られる。178は黒褐色釉を施す大型の壺である。肩が非常に張る形状を呈す。

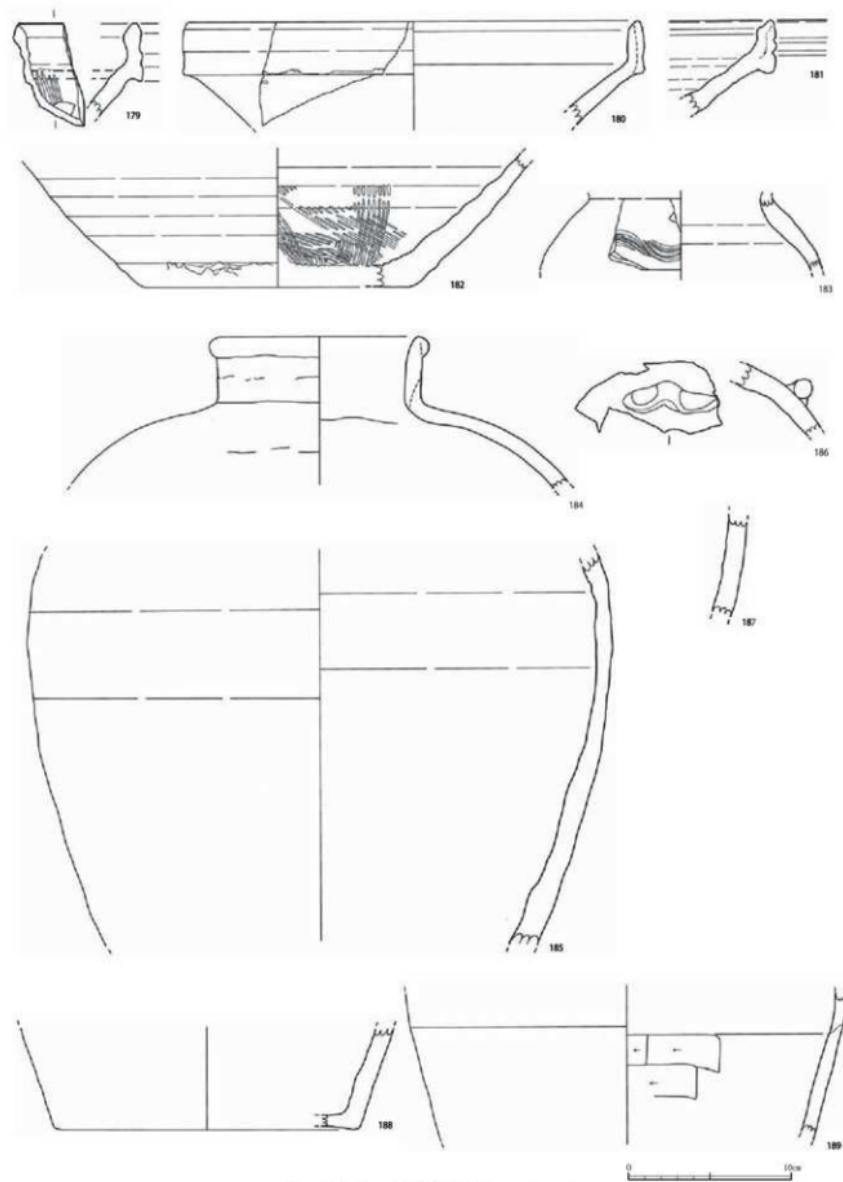
備前焼（備前系） 179～182は擂鉢である。179～181は口縁端部を大きく上方に摘まみ出す形状である。182は交差した9条の擂目が確認できる。183は壺で肩部に波状の櫛描文が施されている。184は壺である。頸部から口縁部は直立し、口縁端部は折り曲げられ、三角形に近い玉縁口縁を呈す。185は壺もしくは壺の体部である。186は壺の肩部である。貼付の耳が付く。187は壺もしくは壺の体部である。緑色の自然釉が掛かり、胎土も石英が目立つ。これらの特徴から信楽焼の可能性がある。188は壺底部である。189は壺もしくは壺の体部である。内面に明瞭な工具痕が見られる。190も壺もしくは壺の体部から底部である。191は瓶の口縁部である。



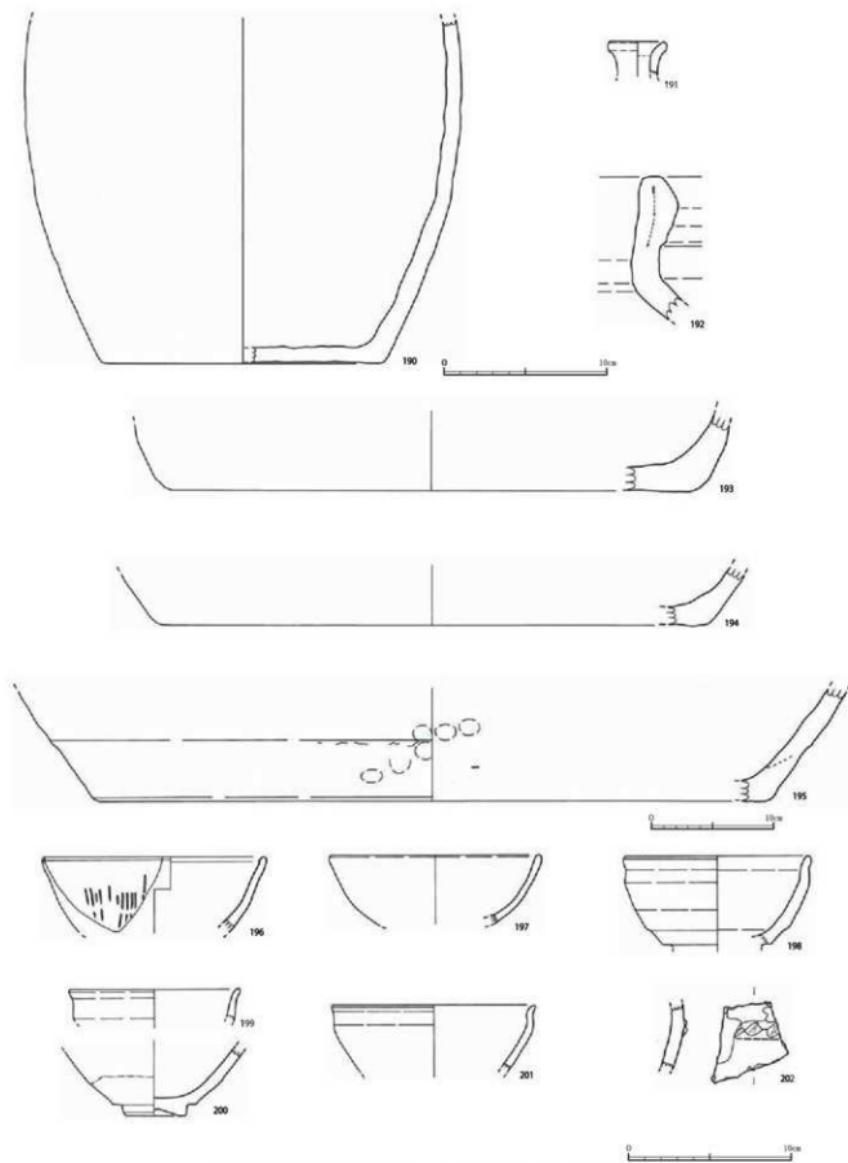
第35図 曲輪7出土遺物実測図1 (S=1/3)



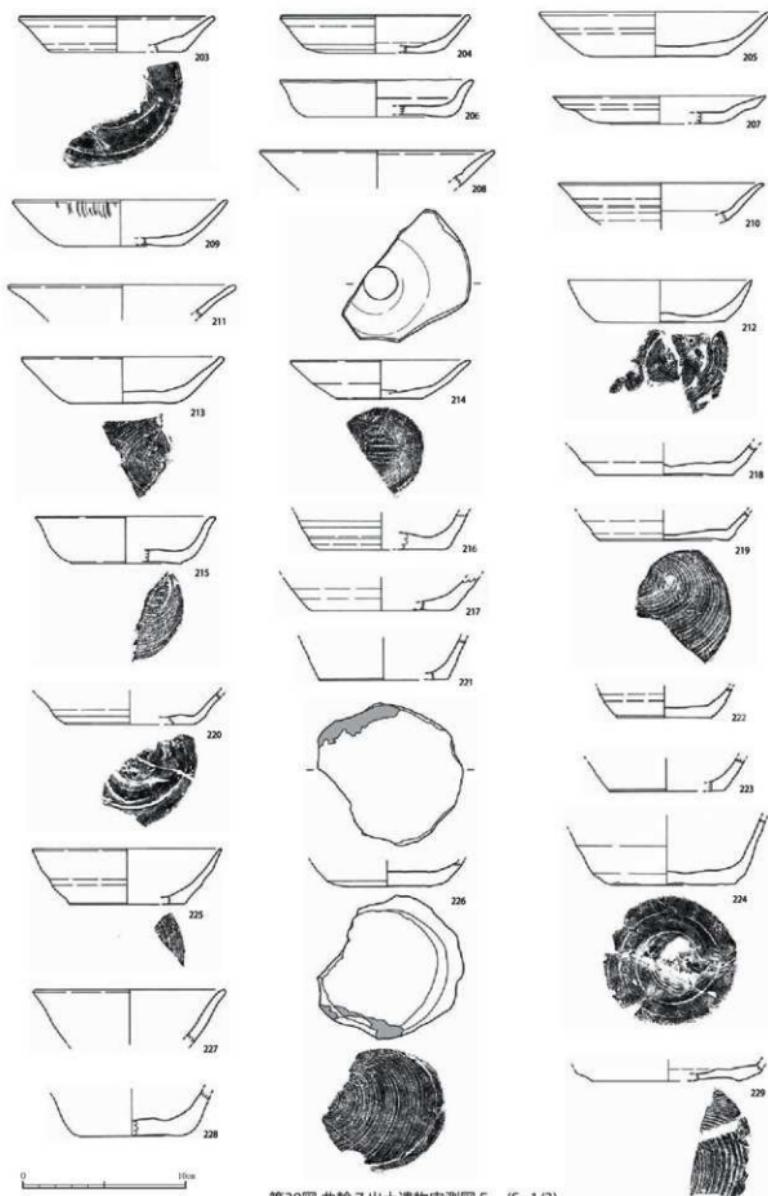
第36図 曲輪7出土遺物実測図2 (S=1/3)



第37図 曲輪7 出土遺物実測図3 (S=1/3)



第38図 曲輪7出土遺物実測図4 (S=1/3・190、193~195 S=1/4)



第39図 曲輪7出土遺物実測図 5 (S=1/3)

口径が3.3cmと非常に小型である。192は甕口縁部である。口縁端部を折返すことにより肥厚している。193～195は甕底部である。195は底径が54.6cmと大型の製品である。内外面共にユビオサエが目立つ。

陶器 196は瀬戸美濃産の青磁模倣の碗である。体部外面に連弁文を意識した文様が施される。釉は透明である。197は肥前系の碗である。透明の釉を施す。198～201は瀬戸美濃産の天目茶碗である。198は器壁がやや厚めで黒色基調だが赤みがかった釉を施す。201は器壁が薄手で黒色基調だが黄色かかった釉を施す。202は外面に刻目突帯をもつ。産地は不明である。

土師器 器形を完全に復元できないものも多く、皿と坏の判別が行えないもあった。ここでは口径÷器高の数値が4.4以上のものを皿とした。口縁部の形状は直線的、外反、内湾と様々である。203～207、209は皿である。208、210、211も器形から皿と思われる。ヘラ切と糸切が混在する様相は官崎平野部で共有される事象である。205は底部において乾燥台を使用した痕跡である板目状圧痕が確認された。主体的ではないが穆佐城において散見される。214は見込に粘土円盤を貼り付けている。212～229は坏である。破片資料も底部から体部への立ち上がりなどから判断したが229など皿に含まれる可能性がある資料もある。器高の違いから皿に近い浅い群、塊状に器高が高い群、また体部から口縁部形状が直線的、外反、内湾とバリエーションに富む。皿と同様に底部の切り離し方法は糸切とヘラ切が混在する。226は割れ口にも炭化物が付着することから燈明具として再利用されている。230～241は小皿である。241は他とは器形が異なり小坏とすべきかもしれない。基本的には口径と底径の値が近く、体部～口縁部は軽く摘み出された簡易な器形である。ただし239、240は底部から体部への屈曲が弱い。240は底部付近にユビオサエが顯著に認められる。

瓦質土器 242は香炉底部であろうか。243は釜である。口縁端部外面を摘み出し受けを作り出している。244、245は香炉である。体部外面に竹管文を施す。246は風炉である。型押しにより斜格子文を施す。248～254は火鉢である。248～250は同一個体とみられ体部外面にスタンプ花文を施す。252～254は同一個体と思われる火鉢である。体部外面は半竹管文、葉文を施し底部は回転糸切である。251は擂鉢である。口縁端部内面を貼付によって三角形に肥厚する。防長系と思われる。

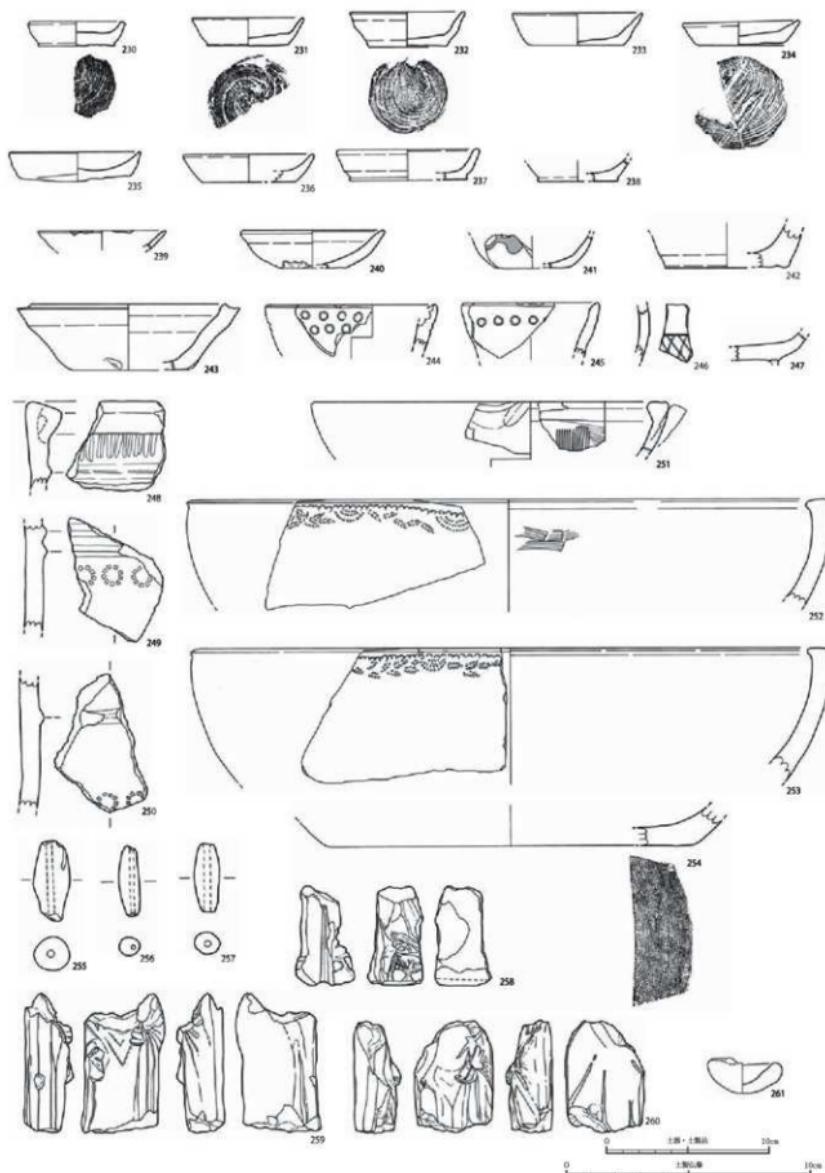
土製品 255～257は土錘である。258～260は土人形である。衣装から仏像と思われる。261は小型の壇場である。内面にガラス質が付着する。

鉄製品 262は刀子である。263は鎌である。刃は片刃で着装部は捩じりながら環状に折り曲げる。264、265は釘である。266は鉄製の煙管吸口である。木質が残存している。

銅製品 267、268は煙管吸口である。268は木質が残存している。269は笄である。270は鉢である。頭に打撃痕が残る。

錢貨 271～276は洪武通宝である。277は慶長通宝である。

石製品 278は石鍋である。鋤断面は台形状であり体部外面に加工痕が見られる。279、280は火打石である。両資料共に使用により後が潰れている。281は硯、282は砥石である。砥石は欠損後に再加工をし、破断面部に細かな剥離が見られる。283、284は軽石製の浮きである。284は2孔確認される。285は黒碁石である。286は仏具であろうか。両面穿孔で中央付近において穿孔のずれが確認できる。287は茶臼である。288は粉挽臼である。



第40図 曲輪7出土遺物実測図6 (S=1/2・S=1/3)



第41図 曲輪7出土遺物実測図7 (S=1/2・S=1/3・S=1/4・S=1/5)

第3表 曲輪7出土遺物観察表 I

番号	出土位置	種別	器種	法量			色調	調整・文様	時期	備考
				口径	底径	器高				
118	出入口上層	白磁	碗	(16.2)			灰白		15C前後	
119	溝1	白磁	皿	(12.8)			灰白		15C後半～16C代	
120	東端廻廊	白磁	皿	(13.0)	(7.3)	33	灰白		15C後半～16C代	
121	新立社建物1ピット3	白磁	皿		(10.2)		灰白		15C後半～16C代	
122	出入口表土	白磁	折枝綠葉	(16.2)			灰白	透彎文	15C後半～16C代	青花にも見られる器形
123	包含層	白磁	折枝綠葉	(18.2)			灰白	透彎文	15C後半～16C代	青花にも見られる器形
124	土坑13	白磁	八角环				灰白		14C後半～16C代	那須西宮室窯・森田D群
125	土坑2	白磁	香炉	(6.4)			灰白	横方向の切彫文	16C後半	
126	土坑2	青磁	碗	(14.8)			オリーブ灰	透彎文	15C後半～16C前半	上田B群類
127	中央廻	青磁	碗				明オリーブ灰	透彎文	15C後半～16C前半	上田B群類
128	中央廻	青磁	碗	(11.2)			オリーブ灰	透彎文	15C後半～16C前半	上田B群類
129	包含層	青磁	碗	(10.8)			明緑灰	透彎文	15C後半～16C前半	上田B群類
130	東端廻廊化面	青磁	碗	(12.8)			オリーブ灰	横方向の切彫文	15C後半～16C前半	上田B群類
131	東端廻下層	青磁	碗		(5.6)		オリーブ灰	透彎文	15C後半～16C前半	上田B群類
132	中央廻	青磁	碗?		(4.8)		緑灰			
133	中央廻	青磁	輪花瓶	(13.0)			明オリーブ灰	波状圖繩	15C中頃～16C代	柴田B1類
134	表土	青磁	輪花瓶	(12.8)			オリーブ灰	波状圖繩・刻花文	15C中頃～16C代	柴田B1類
135	土坑7	青磁	輪花瓶	(13.0)			オリーブ灰	波状圖繩・刻花文	15C中頃～16C代	柴田B1類
136	東端廻廊化面	青磁	輪花瓶	(11.6)			オリーブ灰	波状圖繩	15C中頃～16C代	柴田B1類 二次被施
137	東端廻廊化面	青磁	輪花瓶	(11.8)			にぶい黄	波状圖繩	15C中頃～16C代	柴田B1類 二次被施
138	中央廻	青磁	輪花瓶				黄褐		15C中頃～16C代	柴田B1類 滅成不良
139	表土	青磁	口折瓶	(11.5)			オリーブ灰	透彎文	14C後半～15C中頃	柴田D3類
140	土坑2	青磁	菊皿	(10.5)			灰白	菊弁	16C後半?	柴田D3類
141	土坑2	青磁	菊皿	(12.6)			灰白	菊弁	16C後半?	柴田D3類
142	中央廻	青磁	菊皿	(9.6)			灰白	菊弁	16C後半?	柴田D3類
143	包含層	青磁	菊皿		(5.8)		灰白	菊弁	16C後半?	柴田D3類
144	中央廻	青磁	小杯	(9.6)	(4.8)	34	オリーブ灰	透彎文	16C後半	
145	包含層	青磁	香炉				灰白		16C後半	
146	中央廻	青花	碗		5.3		灰白	唐草文	16C代?	二次被施
147	中央廻	青花	碗		(6.8)		明緑灰	唐草文	15C後半～16C中頃	小野D群
148	ピット17	青花	碗	(13.2)			明青灰	草花文・團繩	16C後半	小野B群 景徳鎮產
149	包含層	青花	碗	(13.6)			浅黃	唐草文・團繩	16C代	小野B群
150	包含層	青花	碗	(12.9)			灰白	小花文・團繩	15C後半～16C	小野B群D3類
151	出入口A化面	青花	碗				明緑灰	小花文・團繩	15C後半～16C	小野C群D3類
152	土坑10	青花	碗	(10.0)			團繩			
153	東端廻	青花	皿	(12.2)	(6.6)	26	明緑灰	牡丹唐草・玉取脚子	16C前半～16C中頃	小野B群D3類 並び銀鏡
154	土坑29	青花	皿		(6.3)		明緑灰	十字花文・團繩	16C前半～16C中頃	小野B群D3類 並び銀鏡
155	出入口上層	青花	皿		(5.6)		明緑灰	十字花文?・團繩	15C後半～16C後半	小野B群
156	中央廻	青花	皿		(8.6)		灰白	唐草・團繩	15C後半～16C後半	小野B群
157	包含層	青花	皿	(13.9)			明緑灰	牡丹唐草・團繩	15C後半～16C後半	小野B群
158	東端廻	青花	皿		(7.0)		灰白	十字花文・唐草文	15C後半～16C後半	小野B群
159	東端廻	青花	皿		(4.1)		灰白	十字花文	15C後半～16C後半	小野C群
160	中央廻	青花	皿	(12.6)			明青灰	唐草文・團繩	15C後半～16C後半	小野C群
161	中央廻	青花	皿	(10.8)			淡青	唐草文・芭蕉文・團繩	15C後半～16C後半	小野C群
162	包含層	青花	皿				灰白	唐人樂器・弘治年造	16C代	景徳鎮產
163	東端廻粘土層	青花	皿				唐草文・團繩			
164	包含層	青花			(2.5)		明緑灰	蛇の目輪調溝		蓋の可能性有
165	出入口A化面	青花	盞蓋	(13.7)			灰白	花鳥文	16C代?	
166	包含層	青花	香炉	(6.6)			明オリーブ灰	花文・團繩		二次被施
167	表土	陶器	小皿	(9.0)			コバルトブルー	施釉	16C代	青釉・華南產
168	土坑2	陶器	小皿				コバルトブルー	施釉	16C代	青釉・華南產
169	表土	陶器	小皿		3.6		明青緑	施釉	16C代	二次被施・華南產
170	包含層	陶器	盒	(7.2)			オリーブ灰	施釉		中国產
171	中央廻	陶器	壺or瓶		(3.9)		鵝	施釉		中国產
172	表土	陶器	瓶				施焰青	施釉		中国產
173	包含層	陶器	壺	(11.9)			黑	施釉		中国產
174	土坑24	陶器					明青緑	施釉		華南三彩か
175	出入口表土	陶器					黑斑	施釉		中国產
176	東端廻	陶器					オリーブ	施釉		中国產

第4表 曲輪7出土遺物観察表2

番号	出土位置	種別	器種	法量			色調	調整・文様	時期	備考
				口径	底径	器高				
177	東端廻転床直	陶器	壺				暗オリーブ	六角形の壓押し・苗穂		華南產
178	真土	陶器	壺				黒褐	施繪		閏輪茶壺・華南產
179	通路状道築(東)	陶器	壺鉢				灰	塗り目	16C中頃	
180	土坑23	陶器	壺鉢	(27.2)			灰		16C中頃	
181	出入口上層	陶器	壺鉢				明赤褐		16C後半	
182	出入口中層	陶器	壺鉢		(16.0)		明赤褐	9条の描り目	16C後半	
183	出入口土坑2	陶器	壺				灰	波状文		
184	土坑18	陶器	壺	12.1			黒褐		15C中頃～16C初頃	
185	中央壠	陶器	壺				暗褐			
186	中央壠下層	陶器	壺				灰			三耳壺もしくは四耳壺
187	東端廻転床土層	陶器	壺・壺				灰オリーブ			信楽の可能性有
188	土坑26	陶器	壺		(18.0)		黄灰			
189	土坑2	陶器	壺・壺				灰褐	工具ナデ		
190	東端廻転床・出入口	陶器	壺・壺	(23.0)			暗赤褐	工具ナデ		
191	出入口上層	陶器	瓶	(3.3)			施繪赤褐			
192	中央壠下層	陶器	壺				暗褐		16C代	
193	中央壠	陶器	壺	(42.4)			暗赤褐			
194	中央壠	陶器	壺	(44.8)			褐灰			
195	東端廻転床下層	陶器	壺	(54.6)			赤棕			
196	土坑2	陶器	碗	(13.4)			淡黄	梅描文・施繪	16C代	青磁模倣・瀬戸美濃産
197	出入口下層	陶器	碗	(12.9)			淡黄	施繪	16C末	肥前系
198	出入口褐色土層	陶器	天日茶碗	(11.2)			にぶい赤褐	施繪	16C代	瀬戸美濃産
199	中央壠	陶器	天日茶碗	(10.4)			褐	施繪	16C代	瀬戸美濃産
200	出入口	陶器	天日茶碗		3.7		褐	施繪	16C代	瀬戸美濃産
201	包含層	陶器	天日茶碗	(12.4)			にぶい黄	施繪	16C代	瀬戸美濃産
202	表土	陶器					灰	朝み日安倍/桔子目		
203	ピット23	土師器	壺	(11.8)	(7.9)	22	明黄褐	回転ナデ		底部もナデ調整
204	ピット23	土師器	壺	(11.4)	(6.0)	24	にぶい橙	回転ナデ		底部ハラ切
205	土坑10	土師器	壺	(13.7)	(7.6)	27	黄棕	回転ナデ		底部板目焼紅痕
206	堅穴建物1	土師器	壺	(11.4)	(8.6)	23	橙	回転ナデ		底部回転糸切
207	中央壠	土師器	壺	(13.0)	(6.0)	17	浅黄棕	回転ナデ		底部回転糸切
208	中央壠	土師器	壺?	(14.2)			にぶい黄橙	回転ナデ		
209	ピット21-3	土師器	壺	(13.1)	(11.6)	28	橙	回転ナデ・一部墨ナデ		回転ヘラ切後ナデ
210	土坑21	土師器	壺?	(12.4)			明黄褐	回転ナデ		
211	土坑1	土師器	壺?	(13.6)			浅黄棕	回転ナデ		
212	通路状道築(東)	土師器	环	(11.2)	(7.9)	26	橙	回転ナデ		底部回転糸切
213	土坑11	土師器	环	(12.2)	(6.4)	29	浅黄棕	回転ナデ		底部回転糸切
214	東端廻転床下層	土師器	环	(11.0)	(5.4)	24	にぶい黄橙	回転ナデ		尾部ハラ・内側墨尾付
215	土坑12	土師器	环	(10.9)	(6.7)	29	橙	回転ナデ		底部回転糸切
216	通路状道築(北)	土師器	环		(8.1)		橙	回転ナデ		底部ハラ切
217	東端廻転床直	土師器	环		(8.7)		橙	回転ナデ		底部ハラ切後ナデ
218	出入口下層	土師器	环		(7.8)		にぶい黄橙	回転ナデ		底部ナデ
219	2T-r土坑1	土師器	环		(7.9)		浅黄棕	回転ナデ		底部回転糸切
220	包含層	土師器	环		(8.4)		橙	回転ナデ		底部ハラ切
221	土器南トレンチ	土師器	环		(7.9)		にぶい黄橙	回転ナデ		底部回転糸切
222	土坑11	土師器	环		5.9		浅黄	回転ナデ		底部回転糸切
223	通路状道築(北)	土師器	环		(7.0)		橙	回転ナデ		底部回転糸切
224	包含層	土師器	环		(8.2)		橙	回転ナデ		底部ハラ切
225	土坑17	土師器	环	(11.6)	(7.1)	3.4	浅黄棕	回転ナデ		底部回転糸切
226	東端廻転	土師器	环		(7.4)		にぶい黄橙	回転ナデ		底部回転糸切・霧明具
227	通路状道築(北)	土師器	环	(11.6)				回転ナデ		
228	出入口焼化面	土師器	环		(7.1)		浅黄棕	回転ナデ		底部回転糸切
229	土坑21	土師器	环		(9.1)		灰黄褐	回転ナデ		静止系切
230	土坑12	土師器	小皿	(5.9)	(4.7)	1.5	橙	回転ナデ		底部回転糸切
231	包含層	土師器	小皿	(6.6)	5.0	1.7	褐灰	ナデ		底部ハラ切り
232	東端廻転	土師器	小皿	6.8	4.7	2.1	灰白	回転ナデ		底部回転糸切
233	土坑24	土師器	小皿	7.8	5.7	2.0	橙	回転ナデ		底部回転糸切・霧明具
234	土坑12	土師器	小皿	7.1	5.6	1.4	にぶい黄橙	回転ナデ		瓦器同系後一方向ナデ

第5表 曲輪7出土遺物観察表3

番号	出土位置	種別	器種	法量			色調	調整・文様	時期	備考
				口径	底径	器高				
235	通路状遺構(北)	土師器	小皿	(7.6)	6.6	1.8	にふい黄橙	回転ナデ		底部ヘラ切り
236	中央塀	土師器	小皿	(8.0)	(5.7)	1.7	浅黄	回転ナデ		底部回転糸切
237	3T土坑3	土師器	小皿	(8.4)	(7.1)	1.9	燈	回転ナデ		底部ヘラ切り後ナデ
238	東端塀裏直	土師器	小皿		(4.9)		燈	回転ナデ		底盤ヘラ切り
239	中央塀	土師器	小皿	(7.8)			にふい燈	回転ナデ		燈明具
240	中央塀	土師器	小皿	(8.6)	(4.1)	2.3	にふい黄橙	回転ナデ		底盤回転糸切
241	掘立柱建物ピット2	土師器	小皿		(4.7)		にふい黄橙	回転ナデ		瓦屋回転糸切・燈明具
242	土坑12	瓦質土器	香炉?		(7.2)		にふい燈	回転ナデ		底部回転糸切
243	中央塀	瓦質土器	釜	(11.6)	(6.9)	4.0	燈	回転ナデ		
244	表土(斜面)	瓦質土器	香炉	(10.2)			黄澄	竹管文		
245	中央塀	瓦質土器	香炉	(8.2)			浅黄橙	竹管文		
246	表土	瓦質土器	風炉				浅黄	スタンプ文		
247	匂合場	瓦質土器					灰			
248	東端塀上層	瓦質土器	火鉢				黄灰	鶴描文		
249	東端塀上層	瓦質土器	火鉢				灰	スタンプ文		
250	東端塀裏層	瓦質土器	火鉢				灰	スタンプ文		
251	中央塀	瓦質土器	鐵鋤	(19.7)			灰白	板ナデ・彫り目		防長產
252	中央塀	瓦質土器	火鉢	(39.4)			浅黄橙	スタンプ文/ハケメ		
253	中央塀上層	瓦質土器	火鉢	(36.3)			灰白	スタンプ文/ハケメ		
254	中央塀上層	瓦質土器	火鉢	(22.6)			明黄點			底部回転糸切
255	匂合場	土師質	土鉢	(4.9)	2.2	2.05	重量15.9g			
256	中央塀	土師質	土鉢	(4.3)	1.3	1.25	重量5.1g			
257	中央塀	土師質	土鉢	(4.2)	1.6	1.55	重量7.0g			
258	出入口下層	土師質	土人形	(4.05)	(2.3)	(2.4)				型作り
259	出入口匂化苗畠下層	土師質	土人形	(5.7)	(3.35)	(1.95)				型作り
260	出入口内落ち込み	土師質	土人形	(4.6)	(3.25)	(1.85)				型作り
261	出入口下層	土師質	埋壙	4.0		2.2	赤褐			ガラス質付着
262	土坑2	鉄製品	刀子	(8.9)	1.25	0.25				
263	土坑18	鉄製品	鍔	(28.8)	10(9)	6(5)				99(9) 13(9) 05(5)
264	土坑2	鉄製品	釘	(14.6)	0.5	0.5				
265	出入口匂化苗畠	鉄製品	釘	(8.9)	0.7	0.7				
266	出入口表土	鉄製品	櫛管吸口I	7.0	1.2					本質付着
267	表土	鋼製品	櫛管吸口I	5.7	1.0					
268	表土	鋼製品	櫛管吸口I	6.1	1.0					
269	ピット	鋼製品	笄	6.05	0.6	0.1				
270	土坑2	鋼製品	鋼網	1.3	1.0					
271	ピット1	銅貨	洪武通宝	外径2.30 内径1.90 空径0.60 銀厚0.15			外径2.30 内径2.00 空径0.60 銀厚0.15			重量6.5g (2枚分)
272	表土	銅貨	洪武通宝	外径2.08 内径1.70 空径0.65 銀厚0.15						重量2.65g
273	表土	銅貨	洪武通宝	外径2.20 内径1.85 空径0.55 銀厚0.08						重量1.61g
274	廐土内	銅貨	洪武通宝	外径2.30 内径1.85 空径0.65 銀厚0.16						重量3.57g
275	中央塀中層	銅貨	洪武通宝	外径2.35 内径1.95 空径0.53 銀厚0.16						表面文字有・重量2.15g
276	中央塀上層	銅貨	洪武通宝	外径2.25 内径1.88 空径0.53 銀厚0.15						重量2.61g
277	匂合場	銅貨	慶長通宝	外径2.3 内径2.00 空径0.6 銀厚0.10						重量1.94g
278	表土(斜面)	石製品	石鍋	(137)			灰陶			外觀光面有・印記-堆
279	表土	石製品	火打石	1.3	1.6	0.9	重量1.5g			チャート製
280	表土	石製品	火打石	2.0	2.0	1.0	重量4.5g			鉄石英製
281	中央塀	石製品	鏡	(6.4)	(2.8)	(1.2)				
282	出入口表土	石製品	砾石	(5.85)	(2.95)	(0.9)				欠損後再加工
283	出入口2度堀内	石製品	浮き	7.4	5.95	2.35	重量34.86g			軽石製
284	表土	石製品	浮き	(4.75)	4.75	2.0	重量12.3g			軽石製
285	表土	石製品	幕石	1.9	1.85	0.65	重量3.31g			
286	土堤南側面内	石製品	仮舟?	(3.2)	3.3	(1.25)	重量25.98g			両面穿孔
287	出入口2度堀内	石製品	茶臼							下臼・破損者しい
288	出入口2度堀内	石製品	粉挽臼	(29.2)						破損者しい

6. 小結

今回の調査で、これまで地表面の観察から推定することしかできなかった曲輪7の構造について新たな知見が得られた。ここでは前節までの繰り返しになる部分もあるがそれらの記述を行い小結としたい。

まず調査の結果、曲輪の形状は現在観察できる地表面とは大きく異なっていたことが明らかとなった。曲輪の中央には、曲輪を分断する堀（中央堀）が設けられ、また曲輪の東端部にも堀（東端堀）が設けられていた。これらの堀の底は平坦で硬化面が形成されており、堀としての機能と同時に通路としての機能も有していたことが想定される。この2つの堀は箱堀であること、壁際に排水溝状の小溝を設けることが共通しており同時期に使用された遺構であると考えられる。そして両堀は造成によって移佐城が存続している間に埋め戻される点も共通している。その造成の時期は両堀共に出土した遺物が16世紀後半を下限とする時期に位置付けられることから同時期である可能性が高い。この大規模な普請は、曲輪7が主郭であることも加わって、城としての防御力を大幅に下げるものであり、戦国期という時代背景を考えると、この普請は考え難いものであるが、島津氏による日向平定後（1577年）の造成であれば理解できる。伊東氏との抗争が終息し、安定した支配が得られた後に島津氏が城の構造を大きく造り変えたと考えられ、その理由としては、長年伊東氏の支配下にあった当時の移佐城は「伊東氏の城構造」であったと考えられるが、それを新たに支配下に置いた島津氏が「島津氏の城構造」へと改変するためであったと想定される。このような事例は近接する中世城郭である天ヶ城においても確認されている。天ヶ城も移佐城と同様に島津氏の日向平定後はその支配下に置かれるが、それぞれの時期で曲輪8の構造が異なるものとなっている。伊東氏が支配していた時期は中心的な建物を堀で囲うのに対し、島津氏が支配した時期には中心的な建物の周囲に堀は存在せず、また周辺に別の建物が配される。この様に移佐城や天ヶ城の事例は、緊張状態と安定した支配を得た後という時代背景が異なるが、個々の氏族が異なる築城方法を探っていた可能性があり、それが表現されていると考えられる。

同様に出入り構造も東端堀の埋戻しと共に埋め戻され構造が変化している。出入りも造成前は深さが2m程度と大きく地面を掘り込んだ構造であった。最も比高差が大きい入口正面（西壁）では3.6mの比高差がある。それが造成後には比高差が僅か0.65mになり出入り単体で見ると防御性が大きく損なわれたと言える。安定的な支配を手にしたとは言え戦国期ということを考えると、伊東氏が曲輪内に細かな堀を配し防御性を高めていたのに対し、島津氏は別の方法で防御性を得ていた可能性が高い。今後は他の曲輪の状況も加味し、城全体でどのように構造が変化しているか検討していく必要がある。

最後に曲輪の空間利用について述べたい。前述のとおり曲輪7は中央の堀で分割して利用していた時期が存在するが、東西でその空間利用に大きな差が見られる。堀より西側、つまり奥は掘立柱建物の柱穴が多数検出されるのに対し、東側では柱穴は検出されるものの格段に少なく、空闊地が目立つ。これから西側は建物が配される空間、東側は前庭のような役目をもった空間が想定される。西側の遺構の中には堀が埋め戻された後の遺構も存在していることには留意しなければならないが、堀を隔てて東西で空間の使い分けをしていたことは明らかである。

第VI章 曲輪8の調査成果

1. 調査位置と目的

曲輪8は曲輪7と併せて穆佐城の主郭と捉えられることは前述したが、曲輪7に加え曲輪8も調査することによって、両者を比較し空間分化のあり方を明らかにすることを最も大きな目的とした。

平成22年度（13次）は曲輪の東半部の調査を行った。調査区は曲輪北側沿辺部を調査すると、法面崩落の危険性があるため、極力法面から距離を保った位置に調査区を設定した。また掘立柱建物が捉えられるよう面調査を行った。

平成23年度（14次）は前年度調査区の西側の調査を行った。また曲輪7、8間の斜面に曲輪7の中央堀の延長部が確認される可能性が高いことからトレーンチを設定し調査を行った。

2. 曲輪8の基本層序

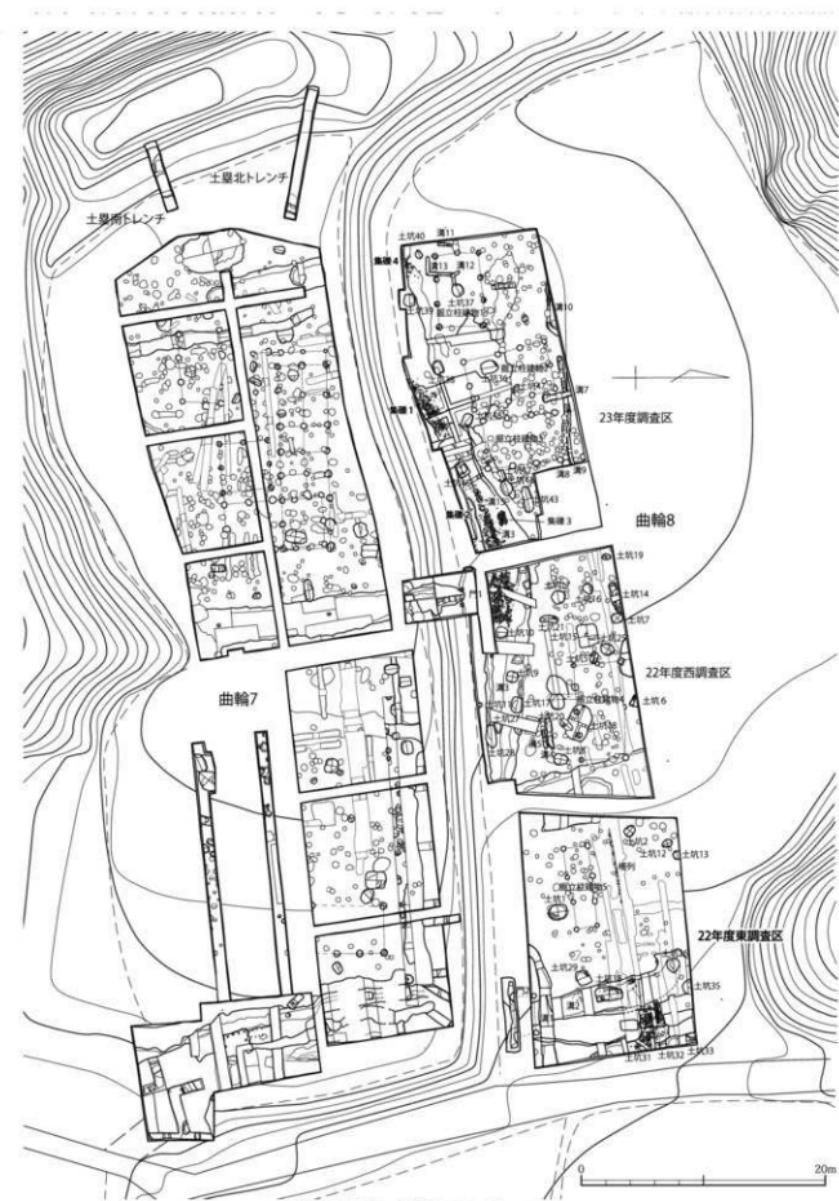
曲輪8の基本層序も曲輪7と大きく変わることはない。曲輪8が所在する場所も、穆佐城が開城する以前は西から東に向かって下降傾斜する地形であったが、曲輪8を造成する時に削平し、平坦面を形成、生活面として活用したとみられる。しかし曲輪7と同様西側を中心に削平したもの東西での高低差は約1.6m残されており、東側の遺構残存状況から鑑みると、東側は整地のための削平は行ったが、大規模な盛土は行っておらず、当時の遺構面の高低差を反映している可能性が高い。

3. 調査の概要

平成22年度の調査は、曲輪東半部に面調査区を設定し調査を開始した。遺構は土坑、通路状遺構、溝、集疊、ピット、柵列が確認された。特筆すべきは、昨年度調査を行った曲輪7の東端堀の延長が曲輪8において検出されたことである。ただし、両曲輪間の高低差を反映して、曲輪7では深さが約2.7mであったのに対し、曲輪8では0.3m程度しかないため堀としての機能はなく、床面に硬化面が形成されていることから通路としてのみの役割だったと考えられる。ピットは複数検出されたものの、曲輪7以上に畠時の多数の搅乱溝により検出が大きく制約され、掘立柱建物は2棟の検出に止まった。

平成23年度は昨年度調査区の西側と既往の調査の追加調査として曲輪7、8間の斜面の調査を行った。曲輪8では掘立柱建物3棟、土坑、溝、破城痕跡とみられる集疊、多数のピット等の遺構が確認された。曲輪7、8間の斜面では両者を結ぶ通路が階段状の形で検出された。階段は地山シラス削り出しを基本として一部盛り土をして構築している。通路は曲輪7から階段で下り、曲輪8の犬走り状の段に接続する構造であった。また階段の最下段横では、門と想定される柱穴が確認された。

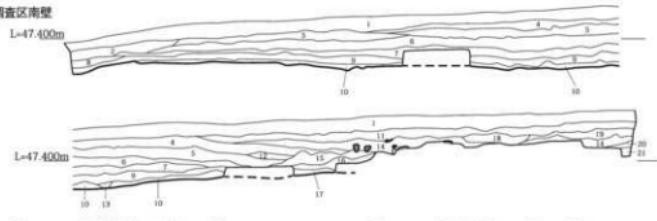
遺物は兩年度共に16世紀代の遺物が中心である。白磁、青磁、青花に加え、五彩、華南三彩、華南産陶器など多くの貿易陶磁が出土した。また茶臼や天目茶碗、葉茶壺という「茶」に関する遺物も多く出土している。



第42図 曲輪8遺構配置図 (S=1/400)

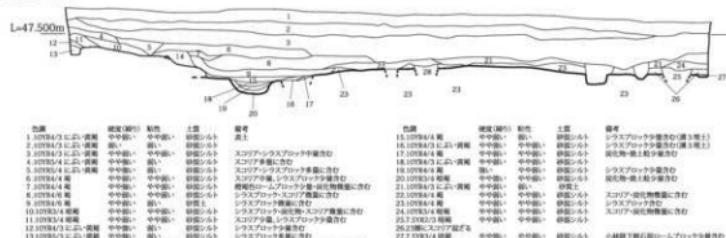
3. 調査の概要

22年度調査区南壁



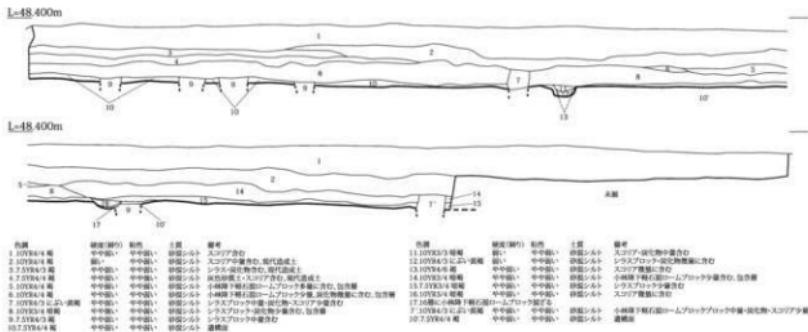
色調	被覆(樹木)	動向	土質	被覆	被覆(樹木)	動向	土質	被覆
1. 10794/3 にじ~西側	中やけい・	やや中	砂質	12. 10794/4 東北側	中やけい・	やや中	砂質	シラバ/コット多量に当たる
2. 10794/3 砂質	中やけい・	やや中	砂質	13. 10794/5 にじ~西側	中やけい・	やや中	砂質	スラブ/リヤ/シラバ/コット多量に当たる
3. 10794/4 砂質	中やけい・	やや中	砂質	14. 10794/5 にじ~西側	中やけい・	やや中	砂質	スラブ/リヤ/シラバ/コット多量に当たる
4. 10794/4 植物	中やけい・	やや中	砂質	15. 10794/2 にじ~西側	中やけい・	やや中	砂質	スラブ/リヤ/シラバ/コット多量に当たる
5. 10794/4 植物	中やけい・	やや中	砂質	16. 10794/2 にじ~西側	中やけい・	やや中	砂質	スラブ/リヤ/シラバ/コット多量に当たる
6. 10794/4 砂質	中やけい・	やや中	砂質	17. 10794/3 にじ~西側	中やけい・	やや中	砂質	スラブ/リヤ/シラバ/コット多量に当たる
7. 10794/4 植物	中やけい・	やや中	砂質	18. 10794/4 砂質	中やけい・	やや中	砂質	スラブ/リヤ/シラバ/コット多量に当たる
8. 10794/2 植物	中やけい・	やや中	砂質	19. 10794/5 にじ~西側	中やけい・	やや中	砂質	スラブ/リヤ/シラバ/コット多量に当たる
9. 10794/2 植物	中やけい・	やや中	砂質	20. 10794/3 にじ~西側	中やけい・	やや中	砂質	スラブ/リヤ/シラバ/コット多量に当たる
10. 10794/2 植物	中やけい・	やや中	砂質	21. 10794/3 にじ~西側	中やけい・	やや中	砂質	スラブ/リヤ/シラバ/コット多量に当たる
11. 10794/2 植物	中やけい・	やや中	砂質					

22年度調査区西壁

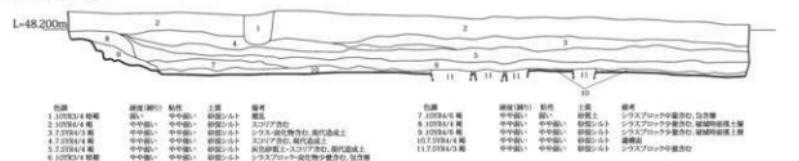


色調	被覆(樹木)	動向	土質	被覆	被覆(樹木)	動向	土質	被覆
1. 10794/3 にじ~西側	中やけい・	やや中	砂質	15. 10794/4 砂質	固い	砂質	シラバ/リヤ/シラバ/コット多量に當たる	
2. 10794/3 砂質	中やけい・	やや中	砂質	16. 10794/4 にじ~西側	中やけい・	やや中	砂質	スラブ/リヤ/シラバ/コット多量に當たる
3. 10794/3 にじ~西側	中やけい・	やや中	砂質	17. 10794/4 砂質	中やけい・	やや中	砂質	スラブ/リヤ/シラバ/コット多量に當たる
4. 10794/4 にじ~西側	中やけい・	やや中	砂質	18. 10794/5 にじ~西側	中やけい・	やや中	砂質	スラブ/リヤ/シラバ/コット多量に當たる
5. 10794/4 植物	中やけい・	やや中	砂質	19. 10794/4 砂質	中やけい・	やや中	砂質	スラブ/リヤ/シラバ/コット多量に當たる
6. 10794/4 植物	中やけい・	やや中	砂質	20. 10794/4 砂質	中やけい・	やや中	砂質	スラブ/リヤ/シラバ/コット多量に當たる
7. 10794/4 植物	中やけい・	やや中	砂質	21. 10794/4 砂質	中やけい・	やや中	砂質	スラブ/リヤ/シラバ/コット多量に當たる
8. 10794/4 植物	中やけい・	やや中	砂質	22. 10794/4 砂質	中やけい・	やや中	砂質	スラブ/リヤ/シラバ/コット多量に當たる
9. 10794/4 植物	中やけい・	やや中	砂質	23. 10794/4 砂質	中やけい・	やや中	砂質	スラブ/リヤ/シラバ/コット多量に當たる
10. 10794/4 植物	中やけい・	やや中	砂質	24. 10794/4 砂質	中やけい・	やや中	砂質	スラブ/リヤ/シラバ/コット多量に當たる
11. 10794/4 植物	中やけい・	やや中	砂質	25. 10794/3 砂質	中やけい・	やや中	砂質	スラブ/リヤ/シラバ/コット多量に當たる
12. 10794/4 植物	中やけい・	やや中	砂質	26. 10794/4 砂質	中やけい・	やや中	砂質	スラブ/リヤ/シラバ/コット多量に當たる
13. 10794/4 にじ~西側	中やけい・	やや中	砂質	27. 10794/4 砂質	中やけい・	やや中	砂質	スラブ/リヤ/シラバ/コット多量に當たる
14. 10794/4 植物	中やけい・	やや中	砂質					

23年度調査区北壁



23年度調査区西壁



第43図 曲輪8 土層断面図 (S=1/80)

4. 遺構の調査成果

曲輪8では掘立柱建物5棟、土坑48基、溝状遺構12条、通路状遺構1本、柵列1条、集碟4基が確認された。曲輪の西端には現況高約3mの土壘が存在し、さらに西側には移佐城で最も巨大な堀切である堀切IIが存在し曲輪を守っている。曲輪面が畠や果樹園として利用されていた時期があり、曲輪7にも増して溝状の搅乱が多数見られたことから遺構の検出が制限されてしまった部分も多い。

掘立柱建物1 23年度調査区の最も西寄りで検出された3間×2間の掘立柱建物である。桁行5.9m、梁行3.5mを測る。建物の主軸方向はN94°とほぼ東西を向く。柱穴の深さは0.3m前後と浅く、大半の柱穴で柱を抜き取った痕跡と見られる土層が確認された。

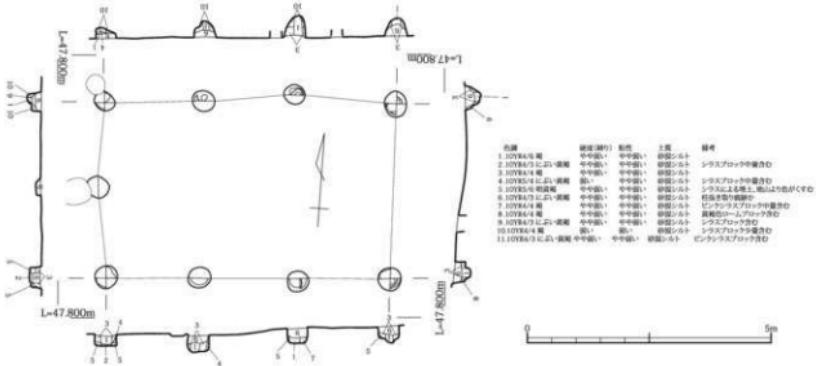
掘立柱建物2 23年度調査区の中央付近で検出された3間×2間の掘立柱建物である。桁行6.8m、梁行4mを測る。建物の主軸方向はN14°と南北に近い載ち割り調査は行っていない。

掘立柱建物3 掘立柱建物2の東で検出された4間以上×2間の掘立柱建物である。調査区外へ遺構が延びているため桁行は不明であるが、梁行は4.2mを測る。建物の主軸方向はN7°と南北指向ではあるが掘立柱建物2とややずれている。近接する位置にあり主軸がずれていることから両者には時期差が存在すると想定される。柱穴の載ち割り調査は行っていない。

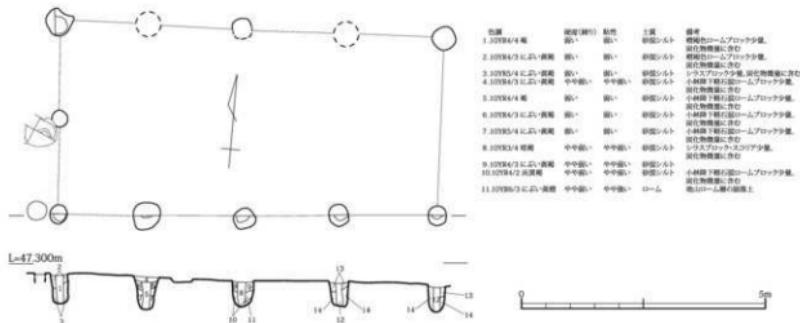
掘立柱建物4 22年度西調査区の東寄りで検出された4間×2間の掘立柱建物である。搅乱の影響がなく明瞭に確認できた南辺のみ載ち割り調査を行った。桁行7.8m、梁行3.7mを測る。柱穴の深さは0.5m前後で柱痕が確認されている。建物の主軸はN94°と掘立柱建物1と同方向である。距離は離れているがこのことから時期を同じくする建物と想定される。

掘立柱建物5 平成22年度東調査区で検出された3間×1間の掘立柱建物である。近接する位置で柵列が検出されているが、柵列を伴う建物としては小規模である。桁行6.8m、梁行2mを測り、建物主軸はN94°と掘立柱建物1、4と同方向である。

曲輪全面調査ではないためか、調査範囲内からは大型の掘立柱建物は検出されなかった。曲輪7と比較するとピットが散在している状況ではあるが、やはり曲輪「奥」に位置する西側の密集度が高く、主要建物も西側に存在した可能性が高い。



第44図 曲輪8 掘立柱建物1実測図 (S=1/100)



第45図 挖立柱建物4実測図 (S=1/100)

土坑1 曲輪の南東寄りで検出された。平面形は楕円形で長軸1.64m、短軸1.26m、深さ0.52mを測る。シラスによる埋土である4層によって土層の堆積が上下に分けられるが、上下層ともに大きな特徴はなくレンズ状の堆積を呈する。遺物は土師器、壁土と思われる苟入りの焼けた粘土塊が出土している。

土坑2 曲輪の東寄りで検出された、平面やや歪な楕円形の土坑である。長軸0.98m、短軸0.7m、深さ0.2mを測る。一部を樹根に搅乱されている。遺物は華南産と思われる黒釉陶器壺片が出土している。

土坑3 曲輪のほぼ中央で検出された。平面はやや歪な円形で直径1.04m、深さ0.82mを測る。壁面がほぼ垂直に立ち上がる穆佐城でよく見られるタイプの土坑である。遺物は出土していない。

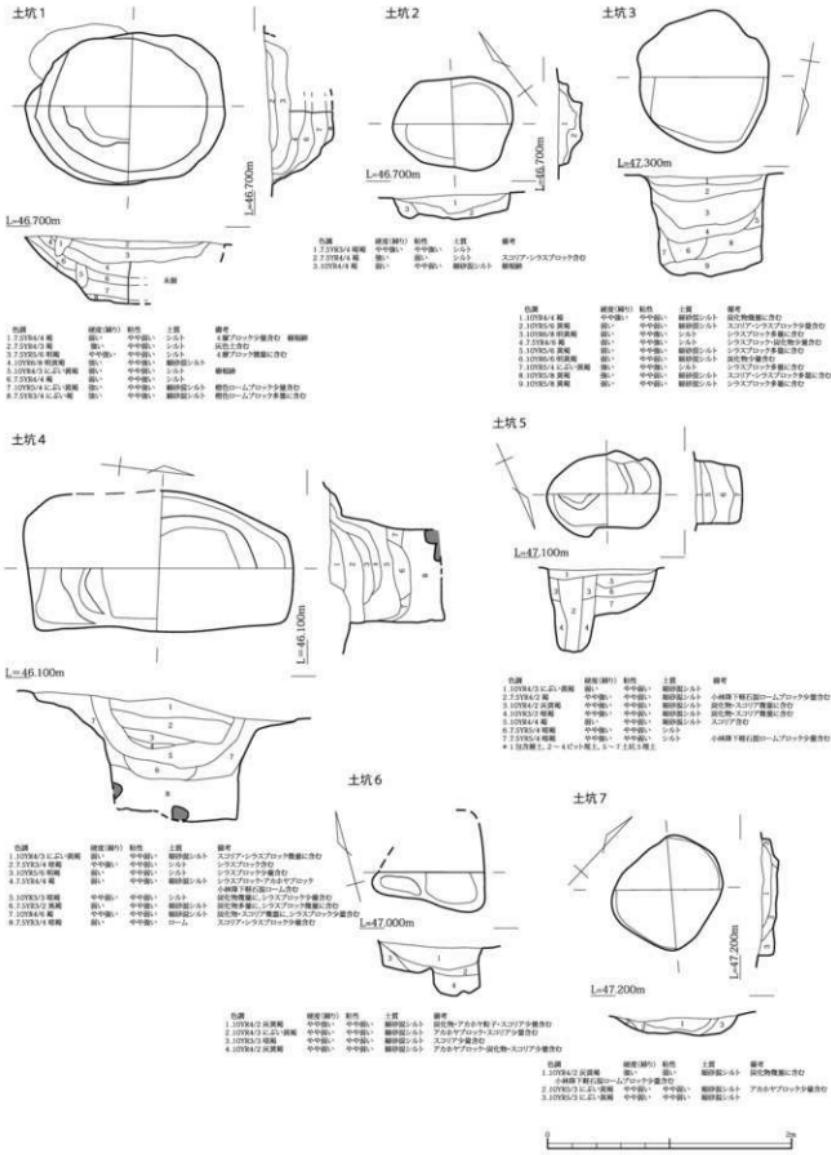
土坑4 曲輪の南東部で溝2を切る形で検出された。長軸2.2m、短軸1.16m、深さ1mを測る。壁面は垂直に立ち上がるが、途中から段をもって広がる形になり2段掘りの形態を呈す。土層堆積は5層が板状閉塞の痕跡を示す層になる可能性もある。遺物は青花片、青磁碗片、土師器片が出土している。形態や前述の土層堆積から土坑墓の可能性が想定されるが、それを裏付けるような遺物は出土していない。

土坑5 曲輪のほぼ中央部で検出された。長軸0.9m、短軸0.6m、深さ0.36mを測る。一部をピットに切られている。遺物は出土していない。

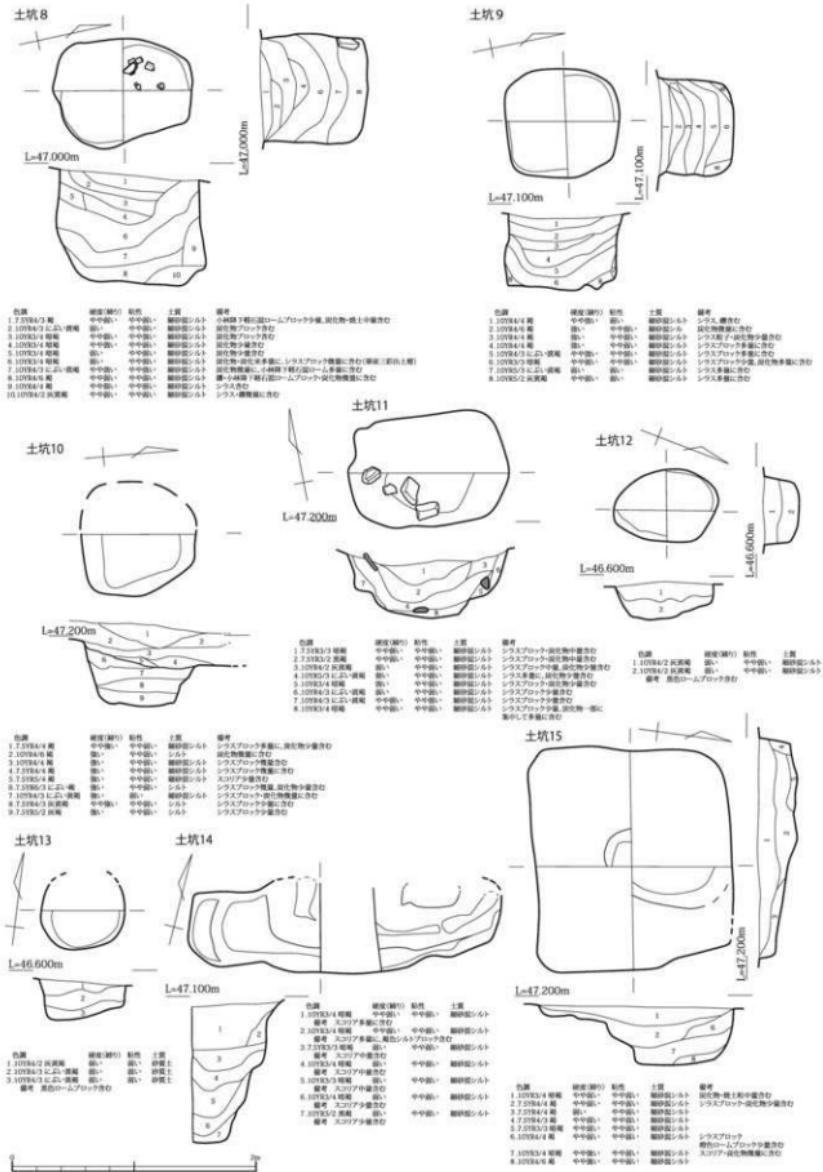
土坑6 22年度西調査区の中央北端で検出された。一部が調査区外に広がっているが、隅丸三角形状の平面形を呈する。長軸0.9m、深さ0.4mを測る。床面は段を有し、一部が深くなっている。遺物は白磁細片、土師器片が出土している。

土坑7 22年度西調査区の北西側で検出された。平面形は隅丸方形で、長軸0.9m、0.75m、深さ0.15mを測る。断面形は浅い皿状を呈す。遺物は底部糸切の土師小皿、景德鎮産青花片、一州窯産青花片が出土しているが、小片のため図化は行っていない。

土坑8 22年度西調査区の東寄りで検出された。平面形は歪な楕円形で長軸1.14m、短軸0.86m、深さ0.9mを測る。壁面がほぼ垂直に立ち上がるタイプの土坑で、埋土内に炭化物を多く含み、



第46図 曲輪8土坑実測図 1 (S=1/40)



第47図 曲輪8土坑実測図2 (S=1/40)

6層中からは炭化米の塊が出土した。土坑としては遺物量が多く、青花、白磁、華南産陶器、華南三彩鶴形水注、土師器、鉄釘、分銅が出土している。ただし出土状況は配置と言うよりも投棄と言うべきもので廃棄土坑と考えられる。

土坑9 22年度西調査区の中央南寄りで溝3に切られる形で検出された。平面形は隅丸方形で1辺0.9m、深さは0.6mを測る。壁面が垂直に近い角度で立ち上がる点、炭化物が埋土中に比較的多く含まれる点は土坑8に似るが遺物は出土していない。

土坑10 22年度西調査区の中央南寄り、土坑9に近接する位置で溝3に切られる形で検出された。平面形は歪な円形で径0.95m、断面形は逆台形を呈し深さ0.5mを測る。遺物は青花皿片が出土しているが細片のため図化していない。

土坑11 22年度調査区の中央南寄り、土坑9の東に近接する位置で検出された。土坑9、10と同様に溝3に切られている。平面形は歪な楕円形で長軸1.3m、短軸0.9m、深さ0.45mを測る。断面形は長軸方向には段を有し、中央が一段下がる形となっている。土坑8と同様に埋土中には炭化物が多く含まれるが炭化米は出土していない。遺物は白磁皿、青花皿、備前窯、茶臼等が出土している。

土坑12 曲輪の東寄り、土坑2に近接する位置で検出された。平面形は楕円形で長軸0.85m、短軸0.6m、深さ0.3mを測る。遺物は土師器片が出土しているが細片のため図化を行っていない。

土坑13 土坑12の北東に近接する位置で検出された。平面形は円形で、直径0.7m、深さ0.35mを測る。遺物は漳州窯と思われる青花皿片、土師器片が出土しているが、細片のため図化を行っていない。

土坑14 22年度西調査区の北西寄りで検出された。一部が調査区外へと延びているが、平面形は隅丸長方形となる可能性が高い。長軸2.55m、短軸0.7m以上、深さ1.1mを測る。長軸方向の西側は階段状を呈している。遺物は出土していない。

土坑15 曲輪のはば中央で検出された平面形が方形の土坑である。東西1.8m、南北1.6m、深さ0.5mを測る。断面形は南側と比較すると北側が深くなっている、その中でも中央がさらに一段深い。遺物は土師器細片が出土した。

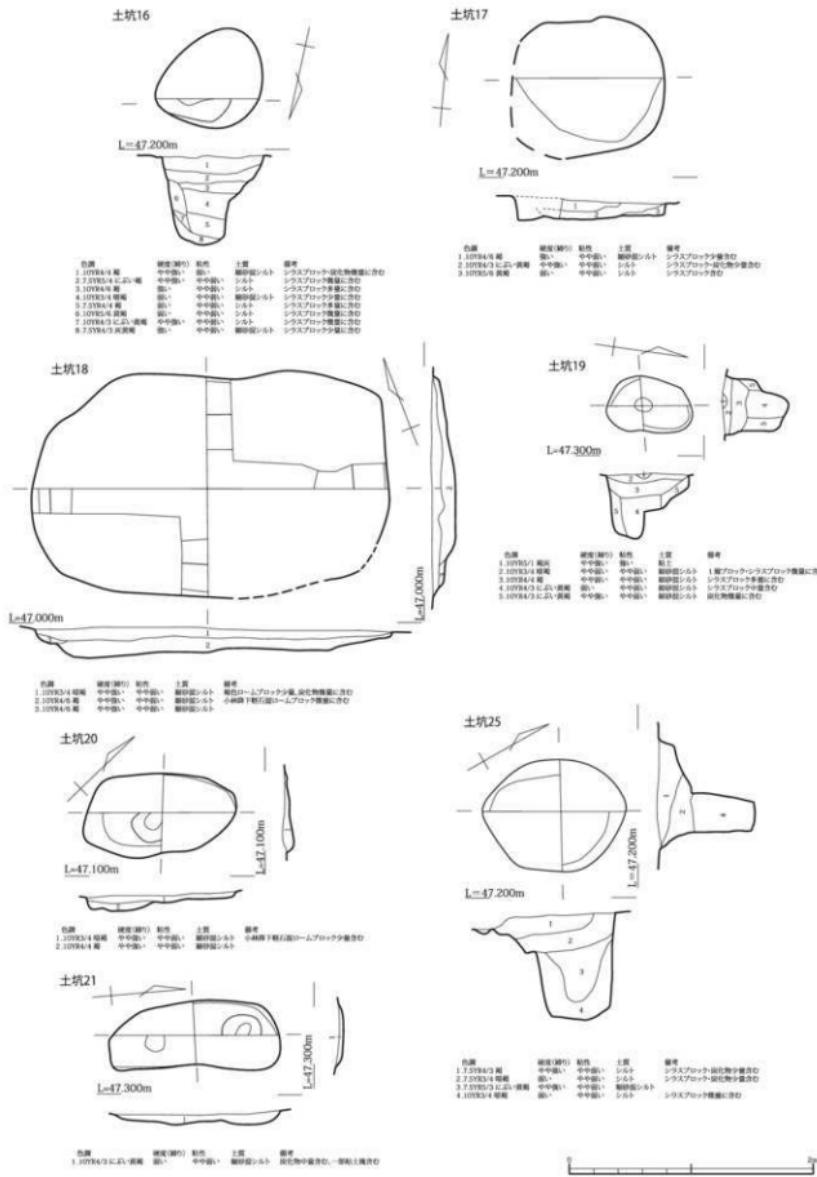
土坑16 土坑14の南に近接する位置で検出された。平面形は歪な円形で、直径0.85m、深さ0.7mを測る。遺物は出土していない。

土坑17 22年度調査区のはば中央、土坑11の北に近接する位置で検出された。西側の一部を搅乱溝によって切られている。平面形は楕円形で、長軸1.1m以上、短軸1.08m、深さ0.16mを測る。遺物は出土していない。

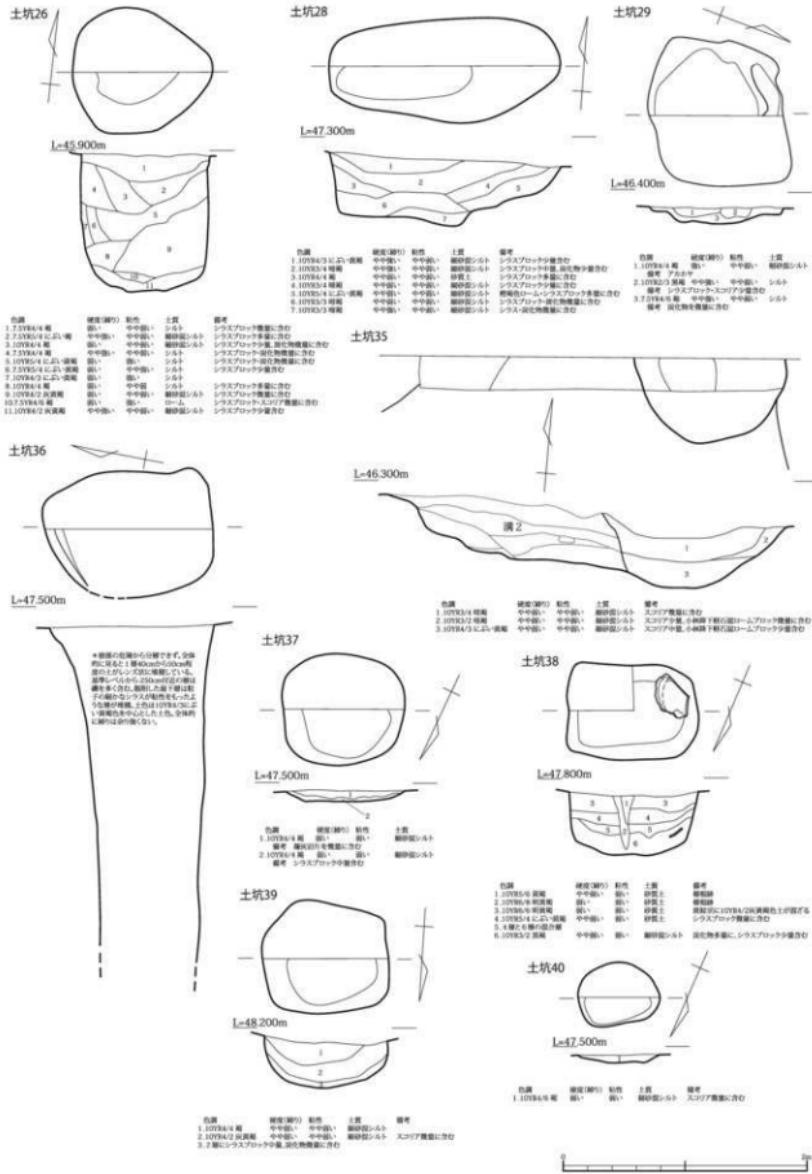
土坑18 土坑17の北東に近接する位置で検出された。平面形は楕円形で、長軸2.92m、短軸1.8m、深さ0.24mを測る。平面形を見ると大型の土坑であるが深さは非常に浅い。掘立柱建物4、土坑20に切られている。遺物は土師器小皿、壺などが出でているが細片のため図化していない。

土坑19 22年度西調査区の北西隅で検出された。平面形は歪な楕円形で長軸0.7m、短軸0.44m、深さ0.57mを測る。検出面において土坑中央で粘土塊が検出された。遺物は出土していない。

土坑20 土坑18を切る形で検出された。平面形は歪な楕円形で、長軸1.2m、短軸0.64m、深さは0.12mと非常に浅い。遺物は出土していない。



第48図 曲輪8土坑実測図3 (S=1/40)



第49図 曲輪8 土坑実測図 4 (S=1/40)

土坑21 22年度西調査区の西寄りで検出された。平面形は歪な楕円形で、長軸1.4m、短軸0.52m、深さ0.1mと非常に浅い。土坑19と同様に粘土塊が検出面で確認されている。遺物は16世紀代の備前播鉢口縁部の細片が出土している。

土坑25 土坑15の北東に近接する位置で検出された。平面形はやや歪な楕円形で、長軸1.16m、短軸0.92m、深さ0.86mを測る。遺物は土師器皿、土師器坏片、中国産とみられる陶器片が出土しているが、陶器片に関しては細片のため図化していない。

土坑26 曲輪の東端付近で溝2を切る形で検出された。平面形は歪な円形であり、直径1.16m、深さ1.12mを測る。断面形は壁面が垂直に近い角度で立ち上がり、床面はボウル状を呈している。埋土は複数種の土が入り乱れるような状況であり、人為的に埋め戻された可能性がある。遺物は土師器細片が出土したが、図化に耐えうるものではなかった。

土坑28 22年度調査区の南東隅付近で溝3に切られる形で検出された。平面形は歪な楕円形で、長軸1.9m、短軸0.85m、深さ0.5mを測る。断面形は土坑西側においては垂直に近い角度で壁面が立ち上がるが、東側は低い段をもちらがら緩やかに立ち上がる。遺物は出土していない。

土坑29 曲輪の東寄り、土坑4の南西に近接する位置で検出された。平面形は歪な隅丸方形で、一辺が1.1m、深さ0.12mを測る。遺物は青花皿が出土している。

土坑35 曲輪東端付近で溝2を切る形で検出された。土坑の北半分は調査区外に広がっているが、平面形は円形と考えられ、直径1.24m、深さ0.5mを測る。土層は単調な堆積状況であり人為的に埋め戻されている可能性がある。遺物は出土していない。

土坑36 23年度調査区のほぼ中央で検出された。平面形は隅丸方形で、長軸1.4m、短軸1.05m、深さ2.8m以上を測る。曲輪7の土坑11、12、17と同様に平面プランと比較して深さが非常に深い土坑である。崩落の危険性があるため、細かな分層は行えなかったが、1層40~50cm程度土がレンズ状に堆積している様子が確認できた。この堆積状況は曲輪7の土坑12と類似する。また図化し得なかったが掘削の際に作業スペースを確保するためのものと思われる、壁面を一部横方向に掘削した箇所が確認された。狭い空間で掘削作業を行うための工夫であろうが、平面形を拡張し、十分な作業空間を確保した上で掘削しなかった理由は不明である。遺物は青磁碗、須恵器甕、土師器片が出土している。

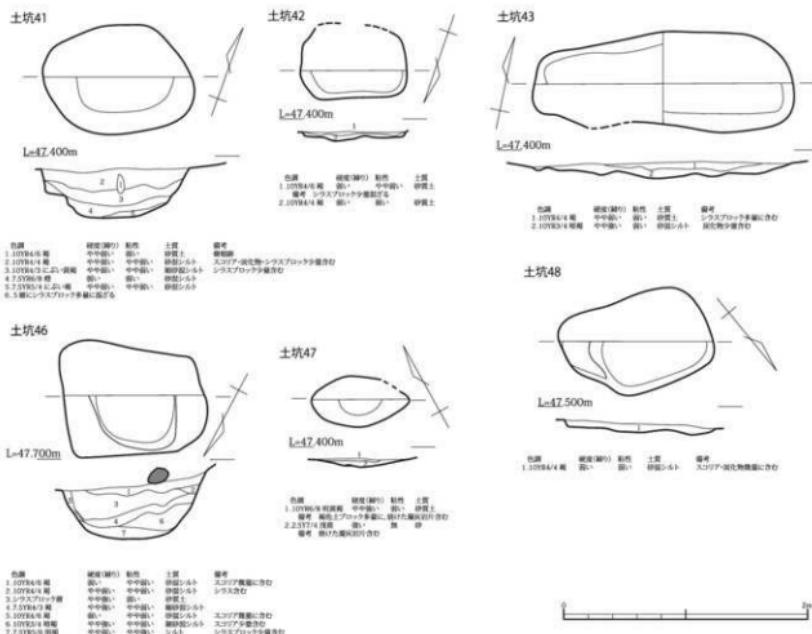
土坑37 23年度調査区の西寄りで検出された。溝12を切っている。平面形はやや歪な円形で直径1m、深さ0.1mと非常に浅い。遺物は出土していない。

土坑38 23年度調査区中央南寄りで検出された。平面形は隅丸方形で長軸1.06m、短軸0.8m、深さ1.2mを測る。断面形は壁面が垂直に近い角度で立ち上がるタイプである。最下層で多量に炭化物を含む層が確認され、そこから備前大甕の底部片が出土した。遺物は他に土師器片が出土している。

土坑39 23年度調査区の南西寄り、犬走り状段の上で検出された。平面形は歪な円形で直径1.04m、深さ0.4mを測る。断面形はボウル状を呈する。遺物は出土していない。

土坑40 23年度調査区の南西隅で検出された。平面形はやや歪な楕円形であり、長軸0.68m、短軸0.52m、深さ0.06mを測る、非常に浅い土坑である。遺物は出土していない。

土坑41 23年度調査区の西寄りで検出された。溝14を切っている。平面形は楕円形を呈し、長軸1.25m、短軸0.9m、深さ0.4mを測る。遺物は出土していない。



第50図 曲輪8土坑実測図5 (S=1/40)

土坑42 土坑41の西に隣接する位置で検出された。同様に溝14を切っている。平面形は隅丸方形を呈し、長軸0.88m、短軸0.62m、深さ0.08mを測る非常に浅い土坑である。遺物は出土していない。

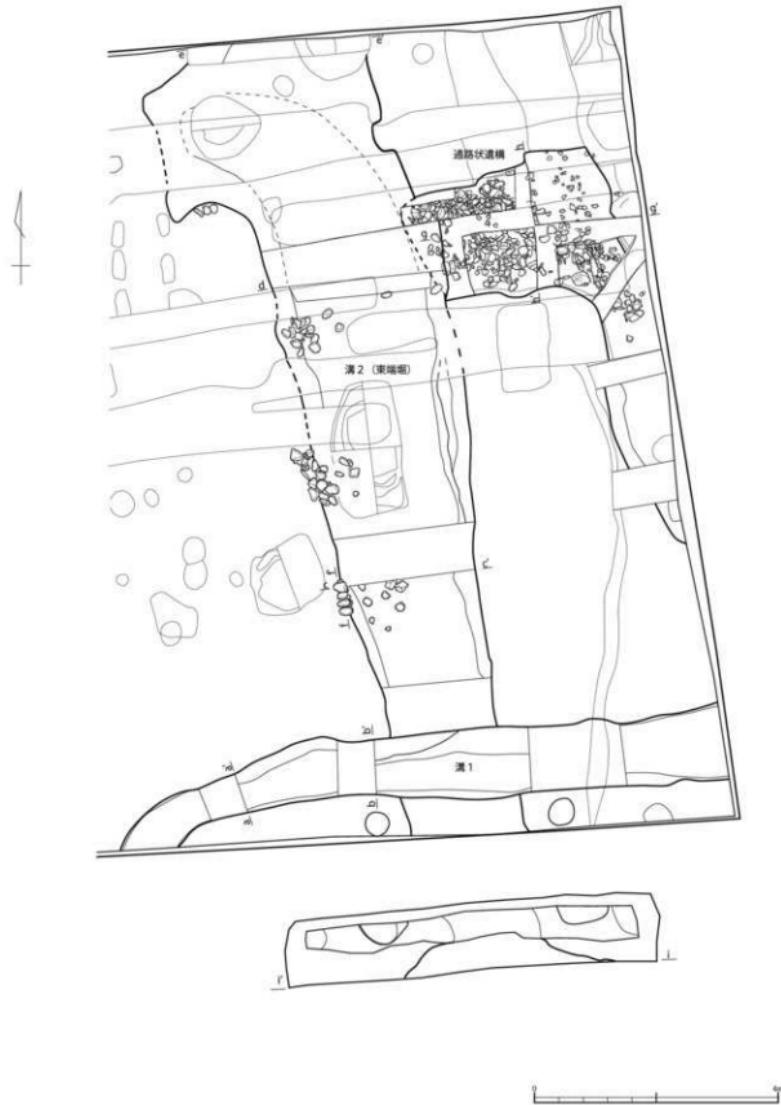
土坑43 土坑41の北東に近接する位置にある土坑である。平面形は隅丸長方形で、長軸2.15m、短軸0.75m、深さ0.14mを測る。遺物は青花皿片が出土しているが細片のため図化していない。

土坑46 23年度調査区の南西寄りで、破城時の曲輪7からの崩落土下で検出された。平面形は歪な隅丸長方形で、長軸1.16m、短軸0.9m、深さ0.55mを測る。断面形はボウル状を呈している。遺物は中国産とみられる暗オリーブ色釉の陶器片が出土しているが、細片のため図化していない。

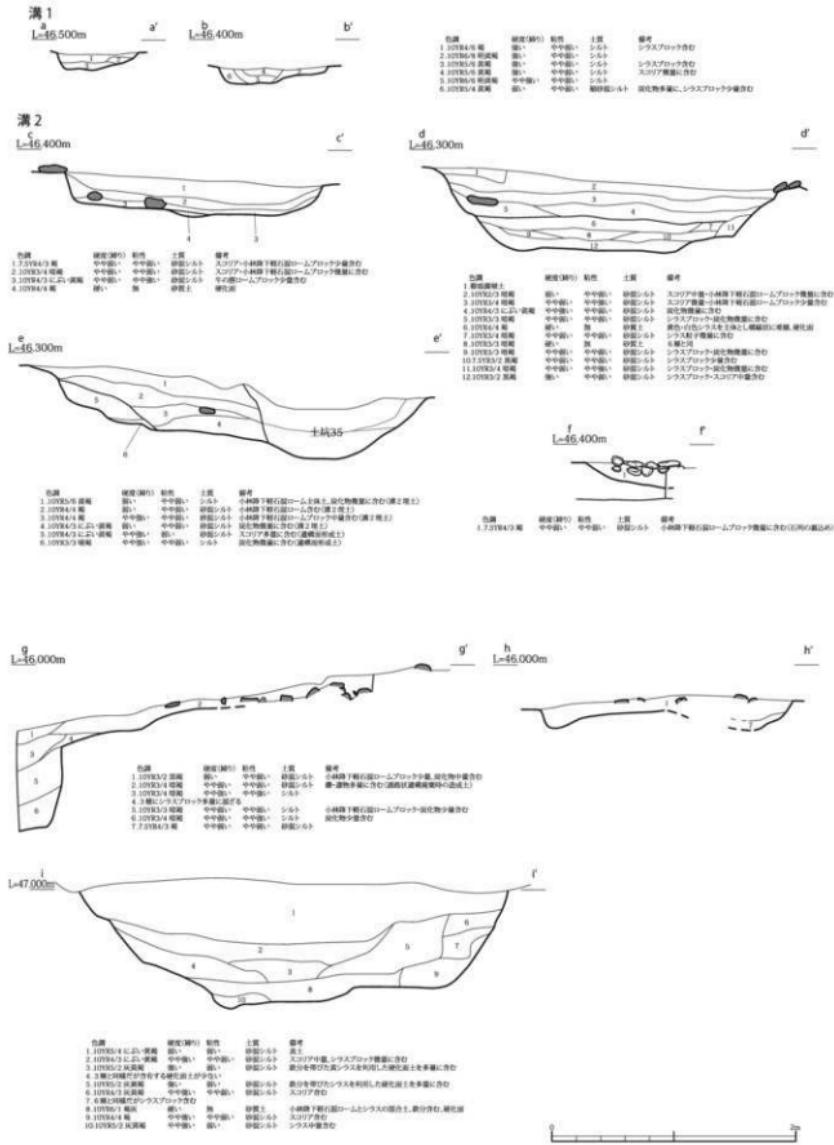
土坑47 23年度調査区のほぼ中央で検出された。平面形はラグビーボールの様な形状で、長軸0.8m、短軸0.4m、深さ0.8mと非常に浅い。埋土中には焼けた凝灰岩片が含まれていた。遺物は出土していない。

土坑48 23年度調査区中央南寄りで検出された。平面形は歪な隅丸長方形で、長軸1.2m、短軸0.8m、深さは0.06mと非常に浅い。遺物は出土していない。

溝1 曲輪の南東端で検出された。幅約1.2m、深さは0.15m程度で、溝2を切っている。調査区内で南から東へと屈曲し、東へ向かうほどレベルも下がっていく。東へ下降傾斜する地形に沿った流れのため排水溝と想定される。遺物は土師器片、青磁片、備前窯片、茶臼片が出土し



第51図 曲輪8溝1・2・通路状遺構平面図 (S=1/80)



第52図 曲輪8溝1・2・通路状遺構土層断面図 (S=1/40)

ている。

溝2 曲輪の東端付近においてほぼ南北方向で検出された。この溝は曲輪7で東端堀とした遺構の延長部にあたる。ただし曲輪7では深さが約2.7mであったが、曲輪8では曲輪7との高低差を反映して深さが0.4m程度となっている。ただし表土直下での検出であったため、本来はもう少し深い可能性がある。東端堀の延長であることを明らかにするため曲輪7、8間の斜面にもトレーナーを設定し状況を確認したところ、逆台形の断面が確認された。溝の底面は硬化面となっており、通路として使用していたことが明らかであるが、北寄りに位置するd、d'部分のみ、硬化面が2面確認されている。

溝の西側には1.5m程度の間隔を空けて石積みが設けられていた。最も残存状況が良好な最南の石積みを見ると、川原石もしくは移佐城の基盤層の一部である宮崎層群内の円礫を中心に2段積みしている様子が確認される。石積みの構築前には一度土坑状の穴を掘って、土を詰めながら積み上げたと見られる。2段積み程度ではこのような構築方法は必要でないため、本来はもう少し段数があった可能性が高い。これは溝内から崩落したものとみられる礫が確認されていることからも追認できる。ただしこの礫の個数からみると3段ないし4段程度のものと想定される。

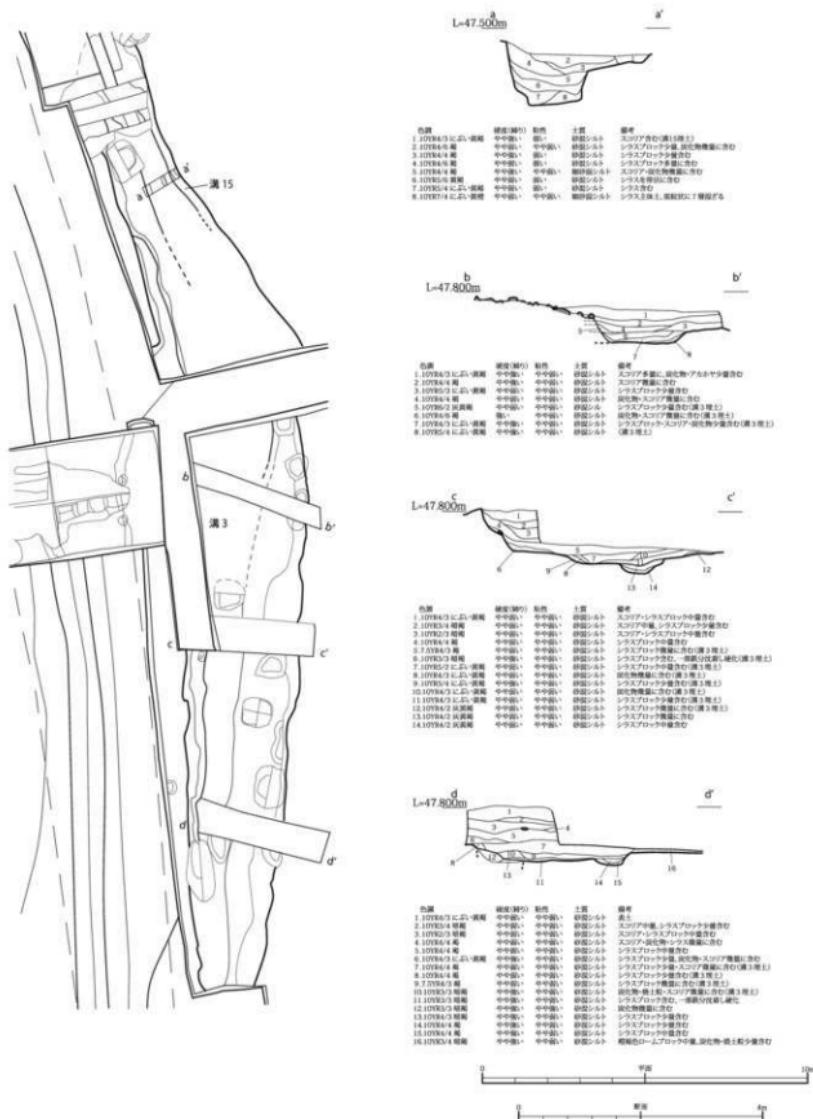
遺物は青磁碗、青花片、中国産とみられる陶器片、備前壺、擂鉢、土師器片、瓦質土器香炉が出土している。

通路状遺構 曲輪の東端で検出され、溝2を切っている。南東方向から曲輪8へと進み調査区内で西へと屈曲し、スロープ状に浅くなり3mほど進んで消失する。屈曲部付近から西側には多量の礫が投棄されていた。類似する状況が曲輪7の通路状遺構でも確認されており、東端堀(溝2)に後出すという点も同様である。通路廃棄時のものとみられるが、両者は同時期に成された可能性が高い。遺物は礫に混じり青花碗、備前、中国産陶器、須恵器、土師器、茶臼等が出土している。

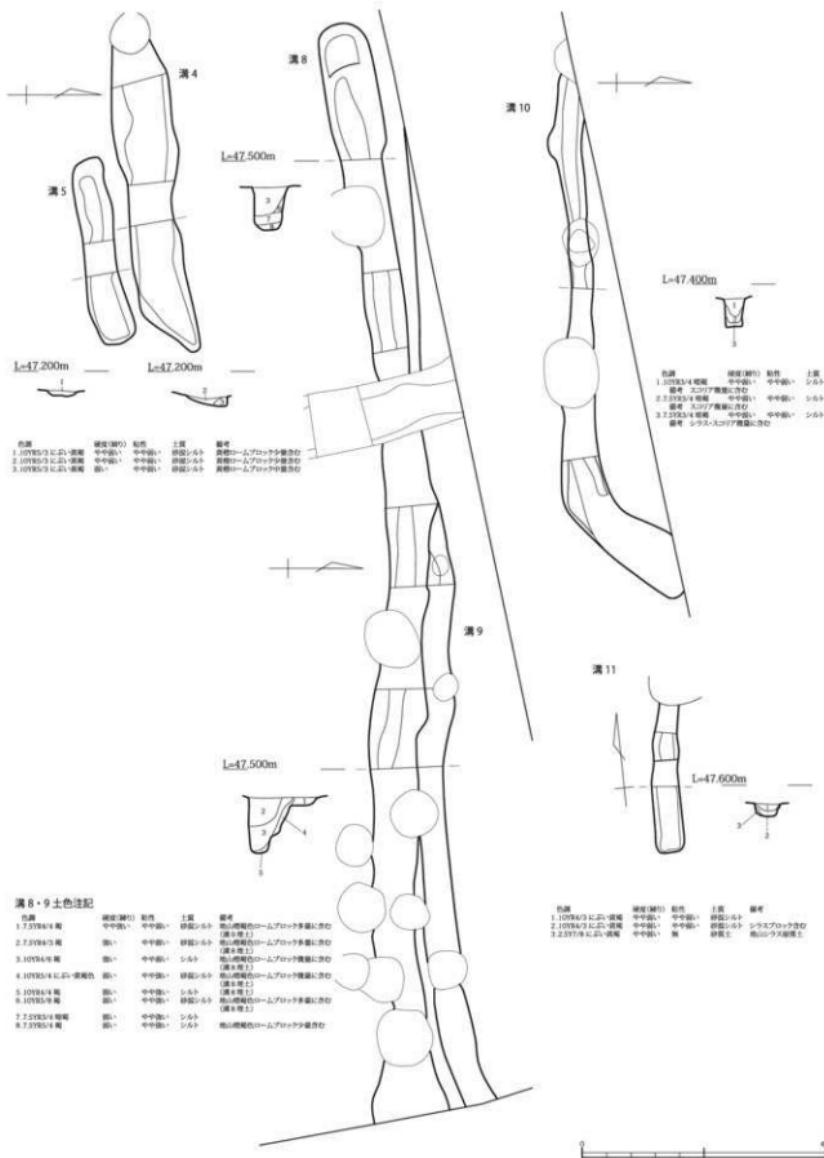
溝3 曲輪の中央南側において「逆くの字」状で検出された。幅は最大約3m、深さは深い部分で約0.8mである。溝が最も北側に張り出す位置に曲輪7中央堀の延伸である曲輪7・8間通路が所在する。溝の大部分は破城時の崩落土、崩落礫により覆われていた。多くの遺構を切っているため、曲輪8の中でも新しい段階の遺構と考えられる。またその埋没時期も、底面直上から1610~1630年に位置付けられる肥前陶器碗が出土していることから、移佐城最末期に位置付けられる。また破城痕跡とみられる崩落土が溝3埋土を覆っていたことから、必然的に破城もその後となる。これらの点から考えると、移佐城の廃城は1615年の元和の一国一条令に従い廃城となった可能性が最も高い。遺物は曲輪8の遺構の中で最も多くの遺物が出土している。青磁、白磁、青花、華南産黒釉陶器、中国産暗オリーブ釉陶器、備前、天目茶碗、前述の肥前陶器、信楽、土師器、瓦質土器、櫂が出土している。その性格は曲輪7からの斜面下に位置することから、斜面を流れてきた水を受ける排水溝、前述の中央堀への入口を開く様相から区画溝の両者の性格をもっていたと考えられる。

溝15 溝3の北側縁に位置する幅0.6m、深さ0.12mを測る溝である。溝3を切るために近世期のものと考えられるが遺物が出土していないため詳細は明らかではない。

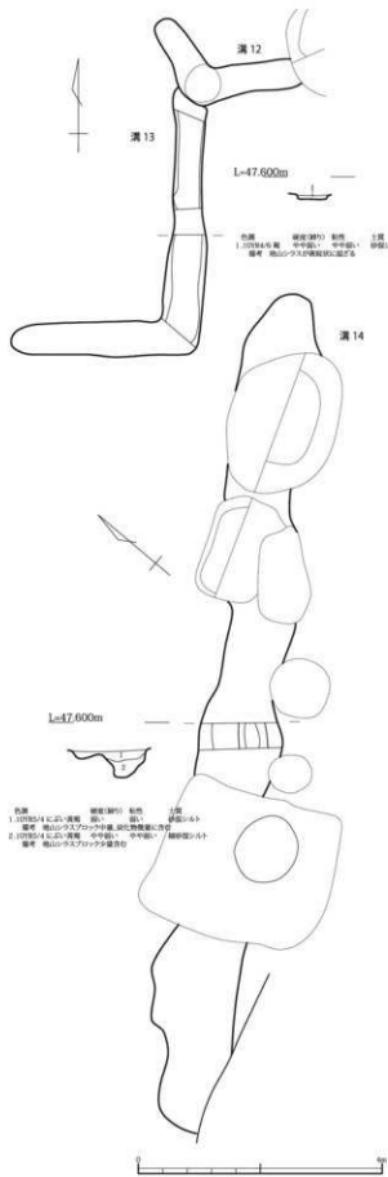
溝4 22年度西調査区の東寄りで検出された。長さ2.6m、幅0.36m、深さ0.08mの非常に浅い



第53図 曲輪8溝3・15実測図 (平面S=1/150・断面S=1/80)



第54図 曲輪 8 溝 4・5・8・9・10・11 実測図 (S=1/80)



第55図 曲輪8溝12・13・14実測図 (S=1/80)

溝である。遺物は出土していない。

溝5 溝4に南に隣接する位置で検出された。長さ1.56m、幅0.26m、深さ0.06mを測る。溝4とはほぼ平行する。

溝8 23年度調査区の北壁付近に位置する。断面形状は「レの字」状で幅0.4m、深さ0.45mを測る。規模は小さいが区画溝と思われる。遺物は土師器片が出土している。

溝9 溝8の北に隣接する位置にある。溝8に切られている。幅0.25m、深さは0.08mと小規模なものである。遺物は出土していない。

溝10 溝8の西に位置する。断面計測位置では幅0.18m、深さ0.24mを測る。幅に対して深さが深く、断面形は長方形状を呈する。溝8と同様に区画溝としての性格が想定される。遺物は出土していない。

溝11 23年度調査区南西端付近に位置する。ピットに切られており、幅は0.22m、深さ0.1mを測る。遺物は出土していない。

溝12 溝11に近接する位置にある。L字形に折れ曲がる形状で裁ち割り調査は行っていない。

溝13 溝12に隣接する位置にあり、溝12に切られている。幅は断面計測位置で0.26m、深さは0.04mを測る。逆L字形に屈曲する。遺物は出土していない。溝11、12、13は非常に浅く、意識して掘削された溝というよりは、雨水の流れや建物の軒先の雨落ちなどにより自然発生したものと考えられる。

溝14 23年度調査区の南東側で検出された。幅は断面計測位置で幅0.64m、深さ0.2mを測る。断面形は北側が浅く段状を成す。遺物は出土していない。

集蹠 曲輪の中央南端部、溝3の上に被さるような状況で検出された。蹠の構成は円蹠を中心に角蹠、被熱により赤化した蹠、また五輪塔などの破片と思われる凝灰岩片、



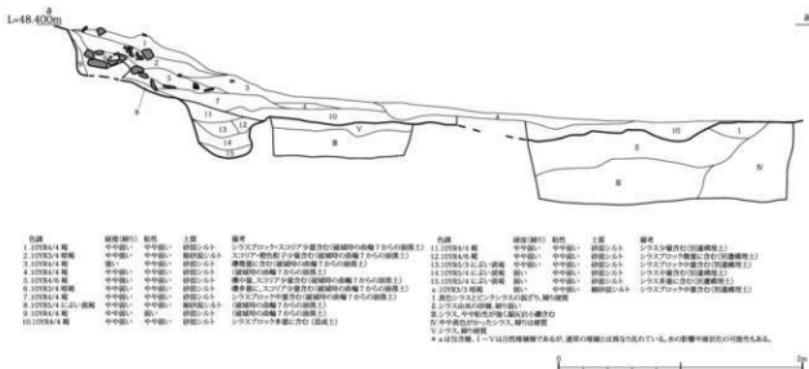
第56図 曲輪8集蹕平面図 (S=1/100)

茶白、粉挽き白、その他陶器類などの遺物も含まれている。検出状況は、曲輪7が所在する南側のレベルが高く、北側へ向かうほどレベルが低くなってしまっており、曲輪7から転落してきた状況と捉えられる。

集蹕は23年度調査区の中央南端に位置する1群、23年度調査区南東端から22年度西調査区南西端に広がる1群、その1群から0.4mほど北に距離を置き長軸1.2m、短軸0.7mの楕円形状の塊を成す1群の計3群に大きく分けられる。前述のようにこの集蹕は曲輪7からの転落蹕と考えられるため、1つの纏まりとして捉えるべきであるがここでは便宜的に前者から「集蹕1」、「集蹕2」、「集蹕3」とする。この中で「集蹕3」は、斜面からやや離れたその位置や楕円形状に集まる形態から人為的に形成されたものと考えられる。ただし構成する蹕は他と同様であり、転落蹕を寄せ集めたものと考えられる。

この集蹕の時期と性格であるが、蹕に混ざって出土した遺物から16世紀後半以降と考えられる。溝3の埋没時期

は前述のとおり17世紀初頭に下るとみられ、それを覆うような蹕の出土状況や上記の出土遺物の時期を鑑みると、破城の際の転落蹕と捉える事が最も妥当と思われる。転落

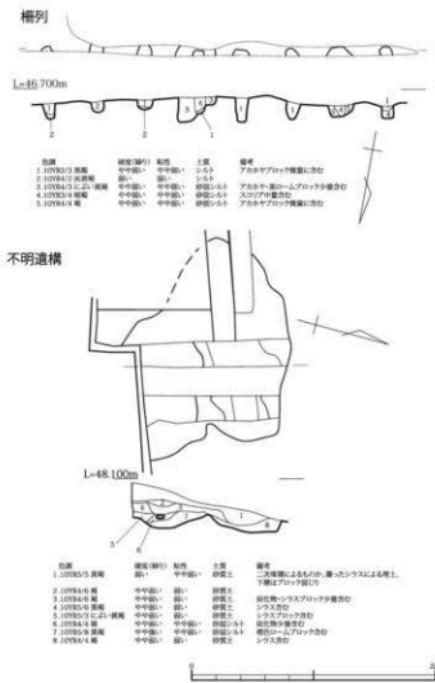


第57図 曲輪8集磧土層断面図 (S=1/40)

前の礫の用途に関しては石垣とするには石材が小振りであり、溝2に伴っていた石積みのような礫を用いた簡易な構築物が存在していた可能性が高い。ただし曲輪7の調査において、それを想定させるような遺構は確認されていない。破城時に完全に削平してしまったか、未調査部分に存在する可能性がある。

23年度調査区の南西端では小規模な集疊が検出されている。これを集疊4とする。集疊を構成する疊や遺物の様相は他と同様であるが、他の3群とは断続し、距離も離れているため一連のものとは捉え難い。この集疊が確認された位置の南側斜面上には通路と想定される曲輪7の溝1があることから、通路を廃棄する際に投棄された疊が転落した可能性が最も高い。集疊の時期に関しては16世紀代と考えられるが、出土した遺物が時期幅をもつため絞り込むことができない。

集礫3の北側付近は地山面まで周辺より低く、そこに造成土が敷かれていた。造成土は南西側でやや盛り上がりを見せ、ピットなどの遺構が造成土上から掘り込まれている。造成土の下部や周囲はシラス、ATが確認された。精査すると白シラス、ピンクシラス、黄シラス、ATが縞状になり堆積している様子が確認されたため、遺構の可能性も視野に入れサブトレンチによる調査を行った。調査の結果、この土層の乱れは、遺物が出土しない、掘り込みの壁も明瞭に検出できない、純粹に始良カルデラ噴出物のみで構成されている、という点から人為的な遺構ではなく自然の要因によって形成されたものと判断された。その形成要因であるが、一番目に水穴の可能性が想定される。シラス層は透水性が高くしばしば層中に水の抜穴、水穴を形成する。この影響により堆積が乱され、検出状況の縞状堆積が形成されたと想定される。二番目の要因としては地震による影響が考えられる。第57図の「層の形成や、掲載はしていないが別トレントでは垂直方向の堆積が確認されるなど、通常の水の浸透だけでは考え難い堆積が確認されている。何れにせよ層が大きく乱れた状況を見せるのはシラス層のみであり、穆佐城期よりも非常に古い時期に起きた土壌の攪拌現象と考えられる。



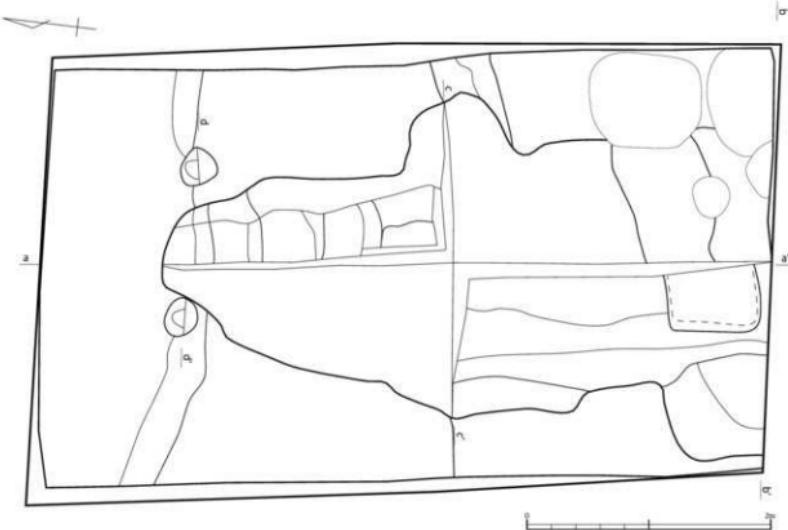
第58図 曲輪8その他遺構測定図 (S=1/80)

遺構は当該期に属するものと思われる。

曲輪7・8間通路 本来は曲輪7、8のどちらにも属さない独立した調査区であるが、便宜上曲輪8の遺構として扱う。検出位置は曲輪7、8間の斜面で、曲輪東西方向のはば中央に位置する。遺構は5段の階段と通路で構成されており曲輪7の中央堀に接続する。曲輪8側は斜面下に設けられた幅約1mの犬走り状段に接続する。平面形は砲弾形で階段を下るごとに先細りの形状となる。階段の構築方法は地山であるシラス層の削り出ししが基本であるが、最上段のみ置き土を行なう構築している。シラス層削り出しの段、置き土の段共に段上には通行によるものと思われる硬化面が形成されている。最上段の置き土に関しては崩れやすいシラスの特性上、最上段が破損したため置き土によって構築し直したと考えられる。階段の段差は0.1mから0.16mで、最下段から最上段までの高低差は約1mである。階段の後はスロープ状に傾斜する状況が確認されている。スロープ部分も床面は硬化面が形成されている。階段幅は半裁に留めているため推定であるが1m程度と思われる。中央堀は幅が3m前後であったため、階段部分が通常の通路部分と比較するとかなり狭まっていたことが確認された。また最下段の両側では柱穴が検出された。両柱穴間の距離は0.9mで柱穴の深さは0.2mである。柱穴の位置から木戸が存在したと考えられるが、柱穴と階段の最下段の位置が近接している。木戸などの扉は進行方向

柵列 22年度東調査区の中央西寄りにおいて東西方向の並びで検出された。南北両側を搅乱で大きく削られ、半島状に残存した部分において確認できた。柱は8本確認され柱間隔は約0.8m、柱穴の深さは0.16mから0.4mとまちまちである。前述のように搅乱によって周囲を含め大きく削平されていることから本来の範囲は明らかではないが、東へ目をやると曲輪7出入口から延びる通路である溝2が存在する。この通路を進んできた者が容易に曲輪8に進入できないようにする役目を担っていたと考えられる。ただし西側への進入を防ぐ南北方向の柵列は確認されていない。

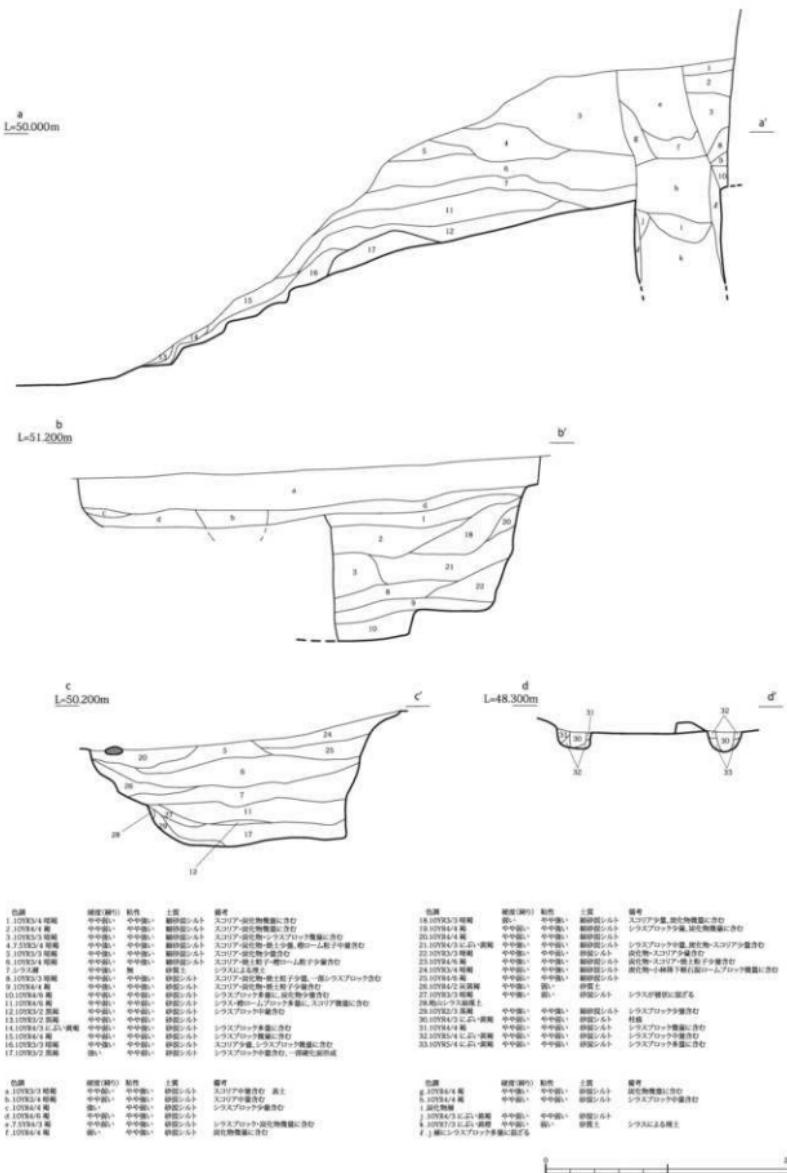
不明遺構 埋土の大部分がシラスによって構成されている。土層横転の可能性も検討したが、横転によって生じた穴に流入するはずの上位層の堆積が確認できなかったため積極的に評価できなかった。集礫を分断しており、その掘削から埋没は穆佐城が廃城になった後のものと考えられる。遺物も出土しておらず性格は不明であるが、穆佐城では廃城後の近世段階においても何らかの活動が行われていたことが遺物の出土から明らかであり、この



第59図 曲輪7・8間通路平面図 (S=1/40)

に対して押し開ける形が通常であるが、穆佐城の場合、曲輪7出入口を経て曲輪8に入り、そこから曲輪7へと向かう行程が想定される。この場合、曲輪7・8間通路は、曲輪8から曲輪7へという進行方向が基本となる。つまり曲輪7側へ向け押し開ける形が基本形となるが、前述のように柱穴と階段の最下段が近接している関係から構造上曲輪7側へ押し開けることができなくなっている。そのため、曲輪8側へ引いて開く、もしくは通路を覆うような櫓が存在し、扉を跳ね上げて開閉する形の木戸が想定される。ただし後者の場合、調査区内においては櫓を想定させるような柱穴は確認されていない。

土層の堆積からは曲輪7中央堀と同一の遺構であるため、同様に埋め戻している状況が見て取れる。縦方向（傾斜方向）では11層、12層を盛り上げるように積上げ、そこから上層を埋め戻す土が極力平行を保つことで崩落を防止するように施工されている。このような工夫は成されているが、埋土を安定化することは難しかったようである。e～r層はその土層堆積状況から通路が埋め戻された後に掘削された土坑であることがわかるが、上部において不自然に壁面が屈曲することから、土坑が埋没した後に斜面下に向か土がずれたことが想定される。斜面地のため埋め戻し土が序々に滑り、結果として土坑の断面が歪んだ形状になったと考えられる。また曲輪7のエッジ部分には径が60cmを超える様な杉が並んでいるが、この通路上に生えていた木は根曲がりを起こしていた。これは表層が滑り曲輪8側に杉が傾いたが、杉は鉛直に伸びようとするため幹が屈曲し、その結果生じたものと考えられる。これらのことから、埋め戻しの際に埋土を安定させる工夫をしたもの、結果としては小規模な滑りが生じていたことが言える。ただし杉の根曲がりから想定すると、この滑りは杉が植林されてから杉が成長する過程の、比較的近年発生した可能性がある。



第60図 曲輪7・8間通路土層断面図 (S=1/40)

5. 出土遺物

白磁 289～296は皿である。289は体部から口縁が内湾する。290は幅広で低い高台が付く。291～296は端反皿である。294～296は高台内に染付により施文を行う。297は八角壺である。298は瓶である。脚と体部は別作りで山形の脚をソケット状に体部に挿し込み接合している。299は青白磁の香炉である。3足の脚をもつ。

青磁 300～308は碗である。300は体部外面に簡略化した連弁文を施文する。301は小型の碗で体部外面に連弁文を施す。302、303は焼成不良で発色が悪く灰色がかっている。同一個体の可能性がある。304は体部外面に簡略化される以前の連弁文を施す。305～308は見込に草花文、草花文を施す。309～312は輪花皿である。それぞれ内面に309は波状圓線、311は波状圓線、花文を施す。312は見込に草花文を施している。313～315は盤である。313は体部内面に連弁文を施す。314、315は底部で削り出しの高台を有する。外面の削りは甘く高台からほぼ連続して体部へと接続する。316は小皿である。内面に櫛描文を施す。317は瓶の口縁である。外反した後端部は上方へ摘み出される。318は香炉である。脚に鬼面もしくは獸面が表現されている。

青花 319～325は碗である。319と320は文様構成が似るが、319は文様が荒く高台付近に付着物も見られる。319が漳州窯産、320が景德鎮産とみられる。321は体部外面と見込に草花文、322は見込に文字文かと思われる文様が施文される。323は欠損しているが接続部から細い高台を有する。高台内に施文される。324は簡略化した小花文を施す。326～349は皿である。326～337は端反皿で多様なサイズが生産されていたことがわかる。326は体部外面に牡丹唐草文を施す。327は体部外面には唐草文もしくは渦紋、見込は草木文を施す。328は体部外面が唐草文、見込が玉取獅子である。329は体部外面に唐草文、331は体部外面に牡丹唐草文を施すが輪郭が不明瞭でシャープさがない。333の体部外面は無文で、見込の施文は麒麟と思われる。口縁端部に黄色の圓線が巡らされている。二次被熱により釉が変色している。334、335はそれぞれ体部外面に唐草文、牡丹唐草文が施されている。336は331と同様に輪郭が不明瞭な唐草文が施文されている。337は型押しにより輪花皿状を呈す。施文は体部外面、見込共に雲竜文である。338～340は内湾する口縁をもつ皿である。338は見込に捻花を施す、340は体部外面に草花文を施す。341～349は甚筒底の皿である。作りが丁寧な景德鎮産（343、344）と粗雑な漳州窯産（その他）に分類できる。341は体部外面に梵字文、見込に草木文を施す。342の文様は不明、343、344は梵字文を施す。343、344は他と比較すると器壁が薄くシャープな作りである。347は体部外面に芭蕉文、見込に草花文を施す。348は見込に草花文、349は文字文と思われる文様を施す。350、351は折縁口縁皿である。体部外面には連弁文が施文され、口縁部は輪花状を呈する。350は口縁部外面には花文かと思われる文様、内面には波瀾文を施す。351は口縁部外面に渦文、内面に波瀾文を施す。352は小壺である。底部を僅かに上げ底にしている。353は蓋摘みである。上面に草文を施している。

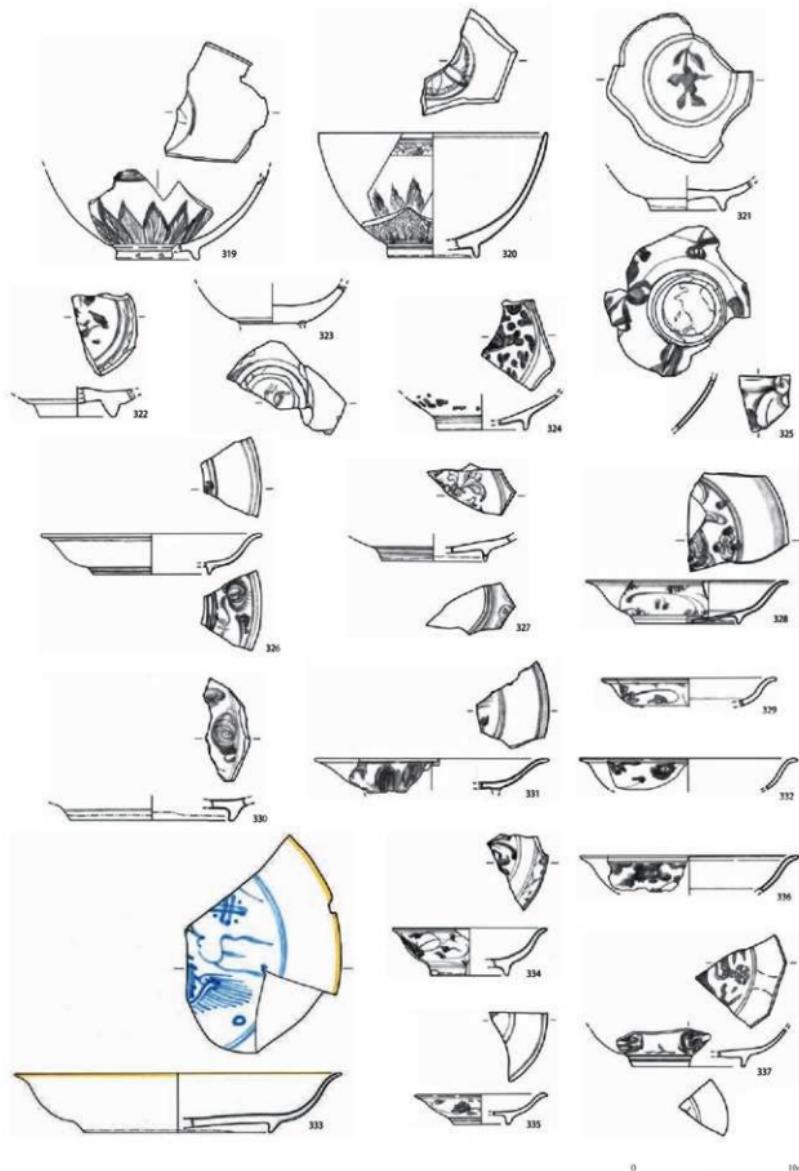
五彩 354は皿で口縁部が僅かに外反する。本来鮮やかな色彩で牡丹唐草文を施したと思われるが二次被熱により変色している。355は蓋である。花文を描く。356も蓋である。

華南三彩 357は器種不明底部である。緑釉を施す。358はトライスカント壺の貼付葉文の剥離片と思われる。黄釉が施されているが被熱により変色している。359は不明器種口縁部である。緑釉が施されている。360は果実形水注である。口縁部に貼付葉文が見られる。二次被熱

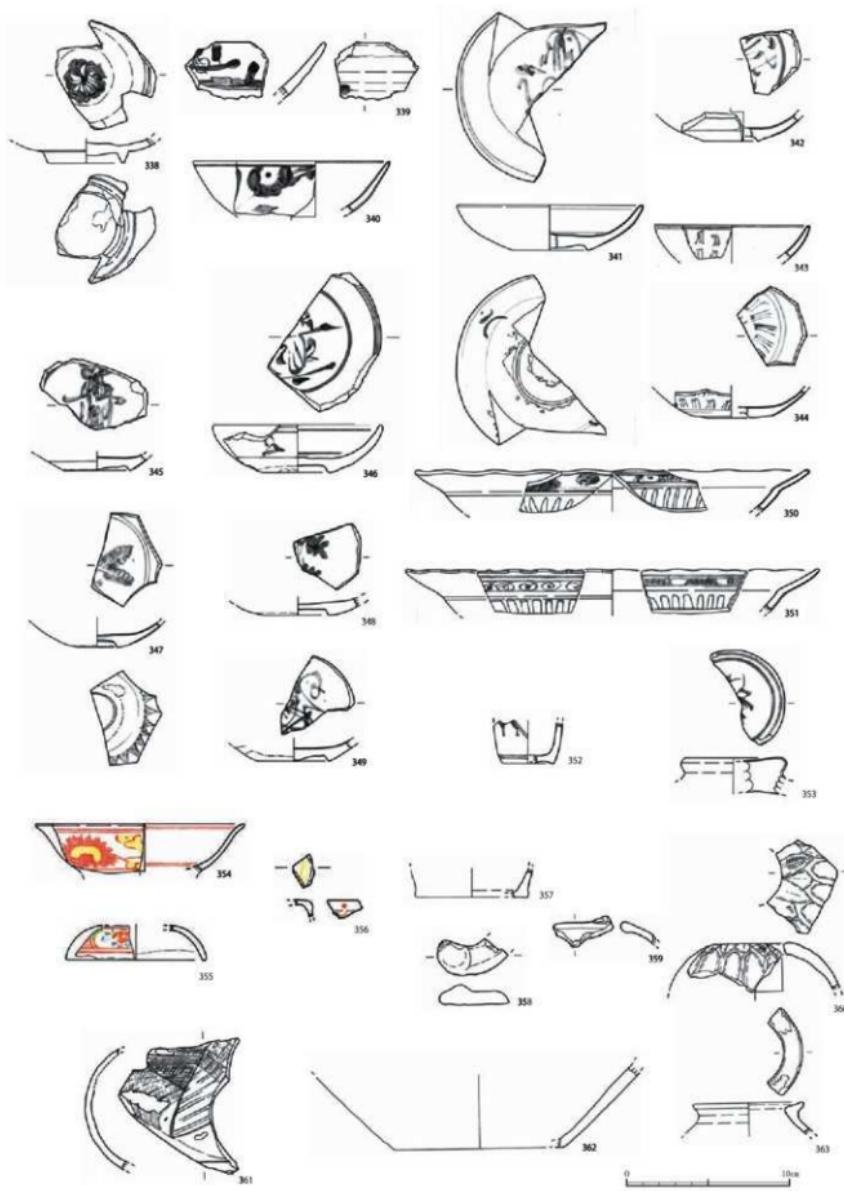


第61図 曲輪8出土遺物実測図1 (S=1/3)

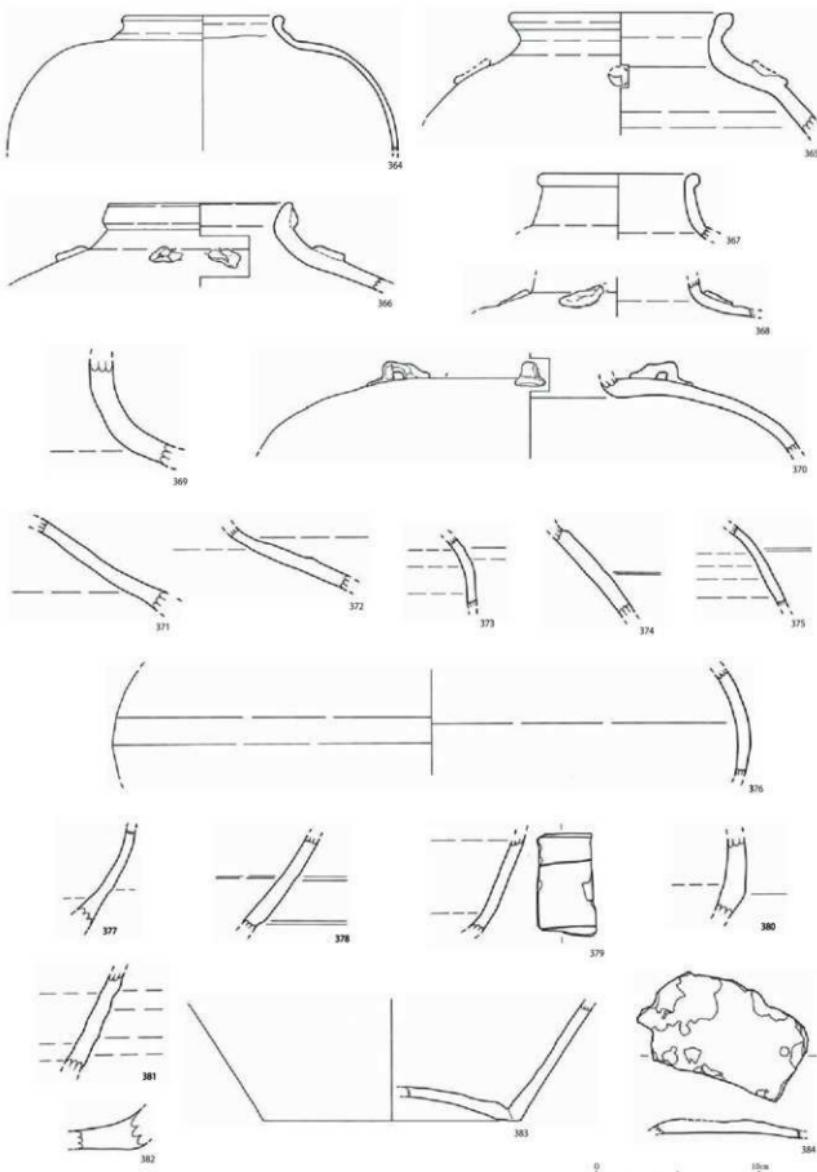
0 10cm



第62図 曲輪8出土遺物実測図2 (5-1/3)



第63図 曲輪8出土遺物実測図3 (S=1/3)

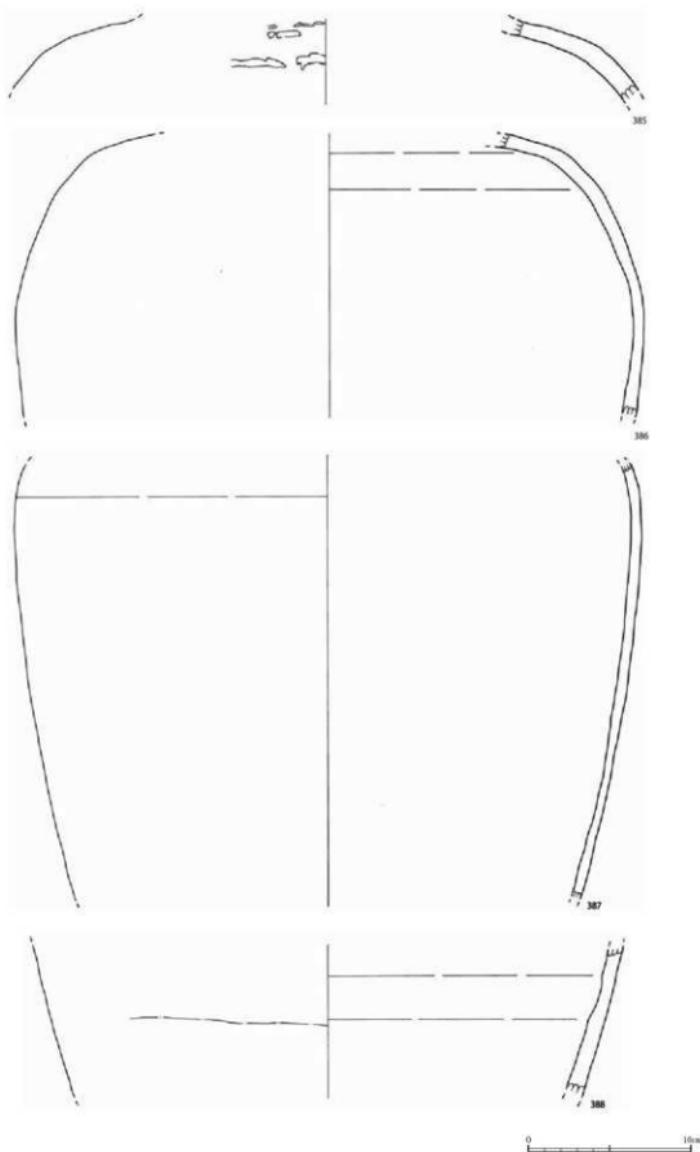


第64図 曲輪8出土遺物実測図4 (S=1/3)

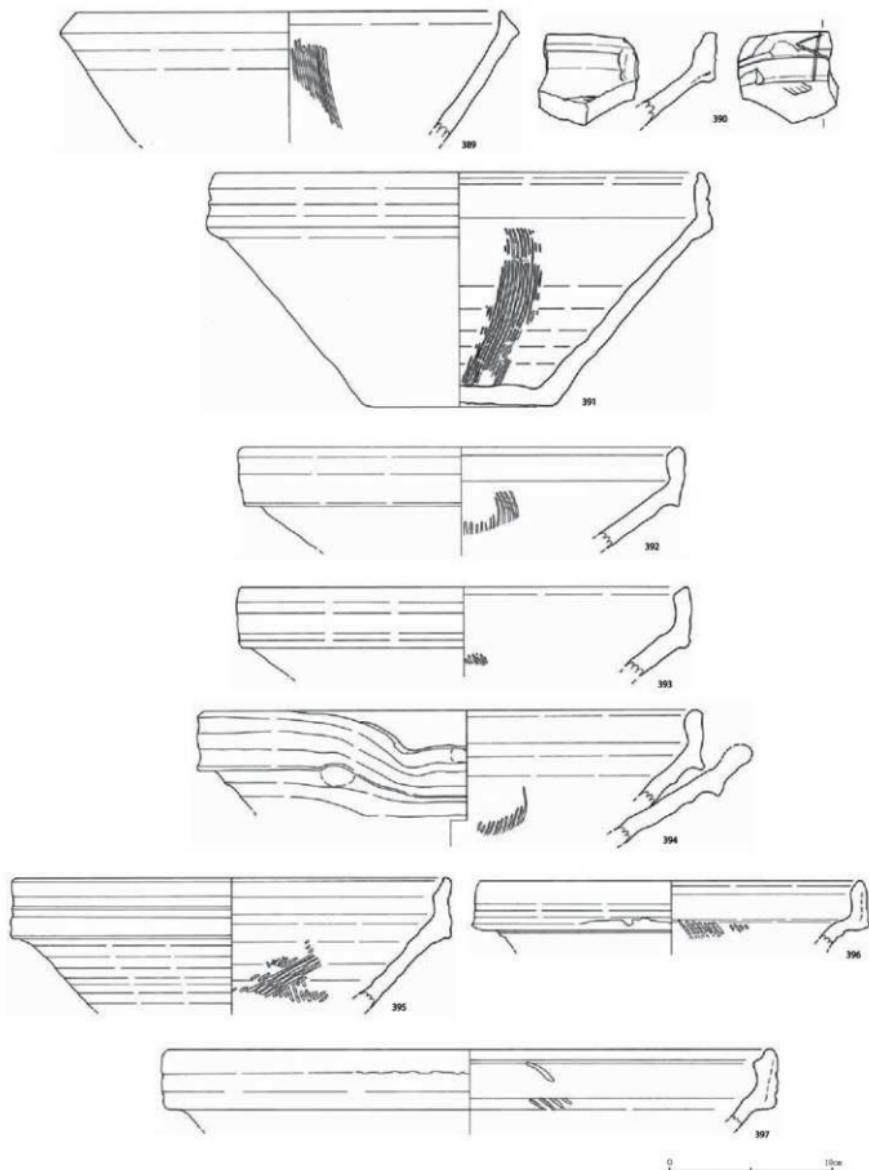
を受けている。361は鶴形水注である。縁釉と黄釉が確認できる。二分割型造りで一部接合面に釉が入り込んでいる。二次被熱を受けている。

国外産陶器 362~388は壺である。362は黒釉を施す。363は壺口縁部から頸部である。暗オリーブ釉が掛かる。口縁部を外へ摘み出し平坦面を形成する。平坦面には砂目が見られる。364は黒釉陶器壺である。器壁が非常に薄い。365、366、368、370は四耳壺である。365は灰褐色の光沢のない釉が施されており、耳は円形浮文状に退化している。366は灰黄褐色の釉を施し、口縁部外面を貼付で肥厚している。肩が大きく張る器形である。367は暗オリーブ釉を施す。頸部から下は残存していないが華南產四耳壺と想定される。368は同一個体ではないが367と同様の壺頸部である。肩が大きく張る器形となる。369は頸部片と思われる。光沢のある暗オリーブ釉を施す。釉は斑文状に濃淡差が見られる。370は頸部から肩部である。暗褐色の釉を施す。肩が非常に張る器形である。371~375は肩部の破片である。黒、褐色、暗オリーブ系の釉が施される。376は肩部で直線的に底部に向かい窄まる器形と想定される。377~381は体下部の破片である。381はやや黄色が強いオリーブ褐色釉が施されており、強いナデにより器面が波打っている。釉は高温で焼成されたためか斑文状に剥離している。382は底部片である。383は体下部から底部である。底部は中央に向かって大きくドーム状を呈する上げ底である。底部と体部の接合痕が明瞭に確認できる。384は底部片である。施釉した際に上部から垂れ落ちてきた釉が内面に付着している。385は肩部である。黒釉を施し肩が大きく張る器形である。386、387、388は接合しなかつたが同一個体と考えられる。肩部から体部中位まで褐色の釉が施される。体下部は露胎である。法量の割に器壁は薄い。

備前焼（備前系） 389~397は擂鉢である。389は口縁端部を僅かに内斜させながら摘み出す。390は口縁が上方へ強く引き出されている。口縁部外面に窯印と思われる線刻がある。391も口縁を上方へ大きく引き出すが下方向への張り出しが見られない。擂目が磨滅し内面が微光沢を放っていることから実際に使用されたことが明瞭にわかる。392~397は何れも口縁部の破片である。392と394は口縁部を下方向へも拡張する。394は注口が残存しており、作り出す際のユビオサエが明瞭に確認できる。398~413は壺である。398~400は口縁部から頸部の破片であるが頸部が直立するもの（398）と外斜するもの（399、400）に分類できる。何れの個体も口縁端部は折返しにより断面三角形状の玉縁口縁となる。401、402は頸部から肩部である。401は円形浮文と線刻が肩部に施され、402は肩部に沈線が施されている。403は肩から体部である。404~410は体部から底部である。406は粘土の接合痕が明瞭に残されている。407~410は小型の壺と思われ408は工具による強い回転ナデによって内面に鋭い稜が見られる。410は外底面に窯印と思われる線刻が施されている。411~413は短い頸部と口縁部が特徴的な一群である。411は口縁部を外へと摘み出す。413は口縁部を斜め外方向に摘み出し、受けを作り出している。器壁の薄さも特徴的である。414~419は壺である。414は大壺の口縁部で折り曲げることにより口縁部を肥厚している。416は外面に縱方向の工具ナデ痕跡が残る。内面はハケメ調整であるが一部に漆を染込ませた布が付着していた。この布の位置には器面上にクラックが入っており、補修の役目があったと考えられる。類似する事例としては千葉県高品城跡34号土坑出土の常滑焼大壺において確認されている。ここではクラックが生じた箇所の内面に帯状の布をにかわの様なもので貼付け、外面は樹脂を加えた粘土で埋めている。中世の補修技術を明



第65図 曲輪8出土遺物実測図5 (S=1/3)



第66図 曲輪8出土遺物実測図6 (S=1/3)

らかにする上で今後類例の修正と検討が必要な事例である。417は大壺の底部である。底部外面に416と同様に漆を染込ませた布が付着していた。ただし417はその位置にクラックは存在せず、補修目的ではない。418は水屋壺と呼ばれる壺体部である。断面三角形の突帯を巡らす。419は大壺の底部である。

陶器 420～424は天目茶碗である。421～423は二次被熱を受けている。425は肥前の碗である。近世初期段階のもので砂目地が見られる。426は肥前皿である。見込に3足ハマ痕が残る。427は肥前皿である。小さめの高台に緩やかに内湾する体部を有する。426、427共に高台は露胎である。428は薩摩焼壺である。褐灰色の釉を施し器壁が非常に薄い。429、430は信楽焼の壺もしくは壺である。暗オリーブの自然釉が掛かる。

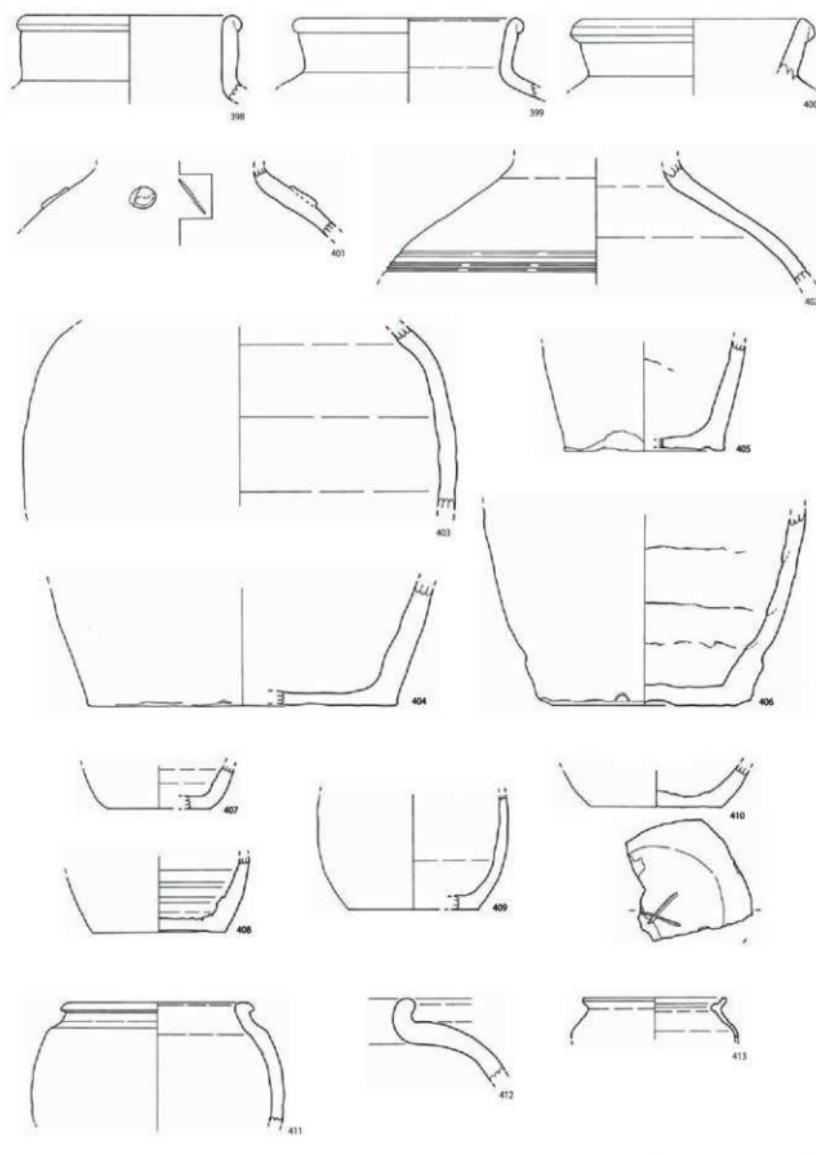
土師器 431、432は皿である。431は体部が直線的であり口縁端部内面に沈線を有する。432は体部の中位を強くナデ調整しているためその部分の器壁が薄くなっている。433は上部を欠損しているため皿か坏かの判断ができない。底部はヘラ切りである。434～443は坏である。434は底部ヘラ切りであるが、体部外面の底部付近にヘラによる傷が存在する。これは当初の切り離し位置の痕跡であり、その位置が上過ぎたためヘラ切り位置を下げる現在の位置で切り離したと考えられる。ナデ調整を行っているが完全に消す意識は無かったようである。435は体部が僅かに外反する。また強い回転ナデ調整により器面に凹凸が見られる。436は底部回転糸切である。437は細かなナデ単位が確認できる。438は体部の立ち上がり角度が大きい。440は底部に板目状圧痕が残る。441、442は底部回転糸切である。444、445は小皿である。445は燈明具として使用されている。446は古代の製塙土器である。内面に布目痕跡、爪痕が残る。

須恵器 447、448共に外面は格子タタキが残る。448は焼成が甘く瓦質に近い。

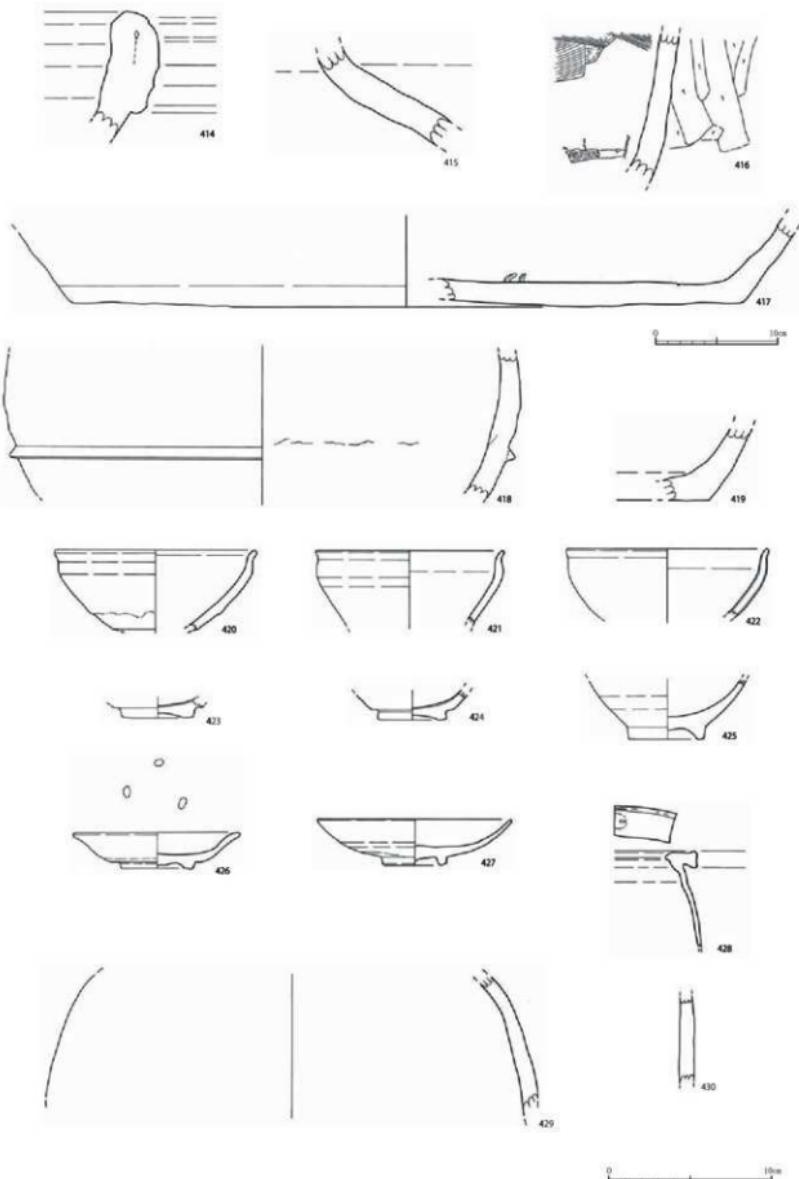
瓦質土器 449は釜である。口縁端部を内面に摘まみ出し受けを作っている。450は香炉である。外面に葉文を施す。451は外面に波文を施す。452は3足香炉である。突帯間に最上段は格子文、3段目は花文を施す。脚上部にも花文が施されている。453は湯釜である。肩部に耳が付く。454、455は盤である。体部は直線的に立ち上がる。456は3足香炉か。貼付により脚を作り出している。457は把手である。458は火鉢底部である。

土製品 459～462は土錘である。462は大型の製品で球形に近い形状である。463は土人形である。曲輪7出入口で出土したものと類似する。464は糸巻きである。凹み部分は使用により擦れた痕跡が見られる。465は紡錘車である。土円盤に穿孔しただけの簡易な作りである。

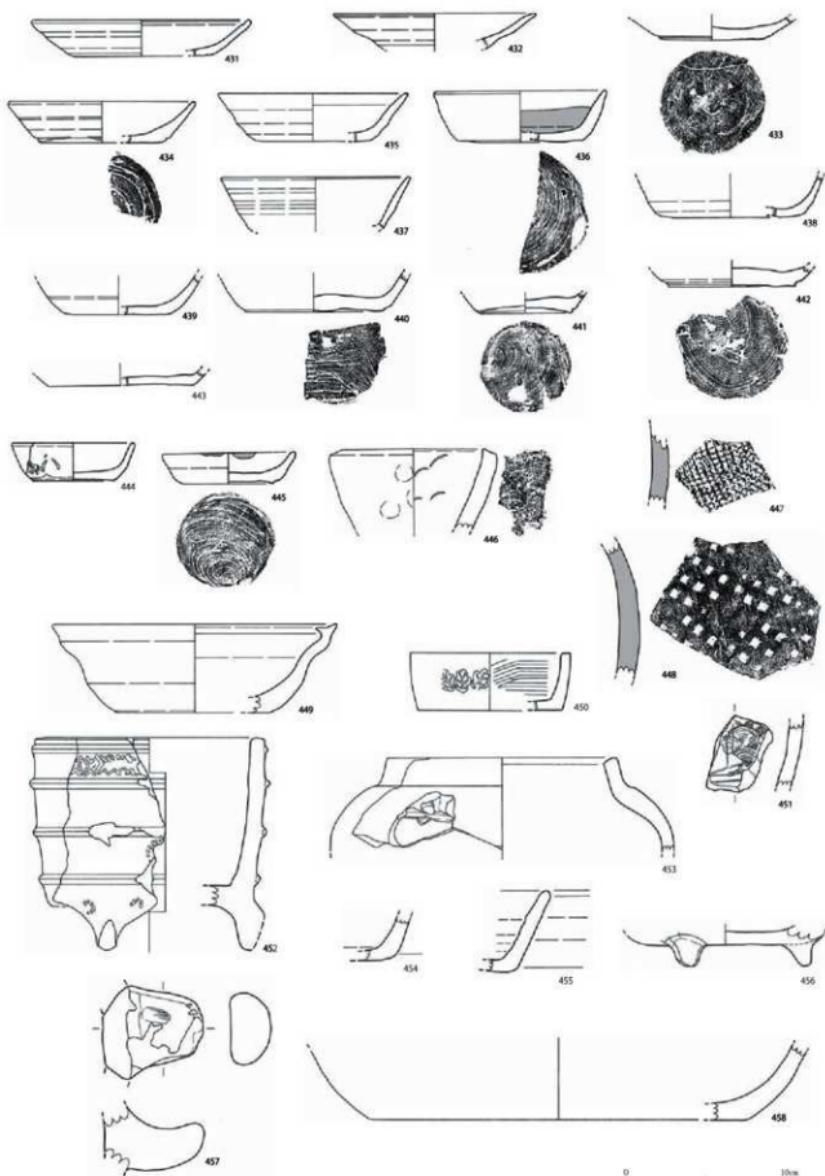
金属製品 466、467は刀の縁である。楕円形の円盤に刀刃の横断面形の穿孔を施す。その後帶金をサイドに巻き製作している。466は帶金部分に鳥と梅を表現した細工が施してある。僅かに金と思われるメッキが残存している。467は斜め方向の沈線が施されており、装飾が簡易である。468、469は平小札である。欠損しているため縱方向の孔数は明らかではない。470は鉄砲弾である。鉛製と思われる。471は屏等の飾り金具と思われる。4本の釘で固定する。1本のみ頭が残存していた。472～475は釘である。475は90°近く屈曲し頭付近に木質が残存している。476は鎌もしくは包丁と思われる。477は鎌である。僅かに刃部の痕跡が確認できる。478、479は煙管吸口である。478は木質が残存している。480は笄である。481は分銅と思われる。重量は14.06gである。482～485は銭貨である。482は11枚が熱により溶着している。483は永楽通宝である。484、485は洪武通宝で484は裏面に福の文字が確認できる。



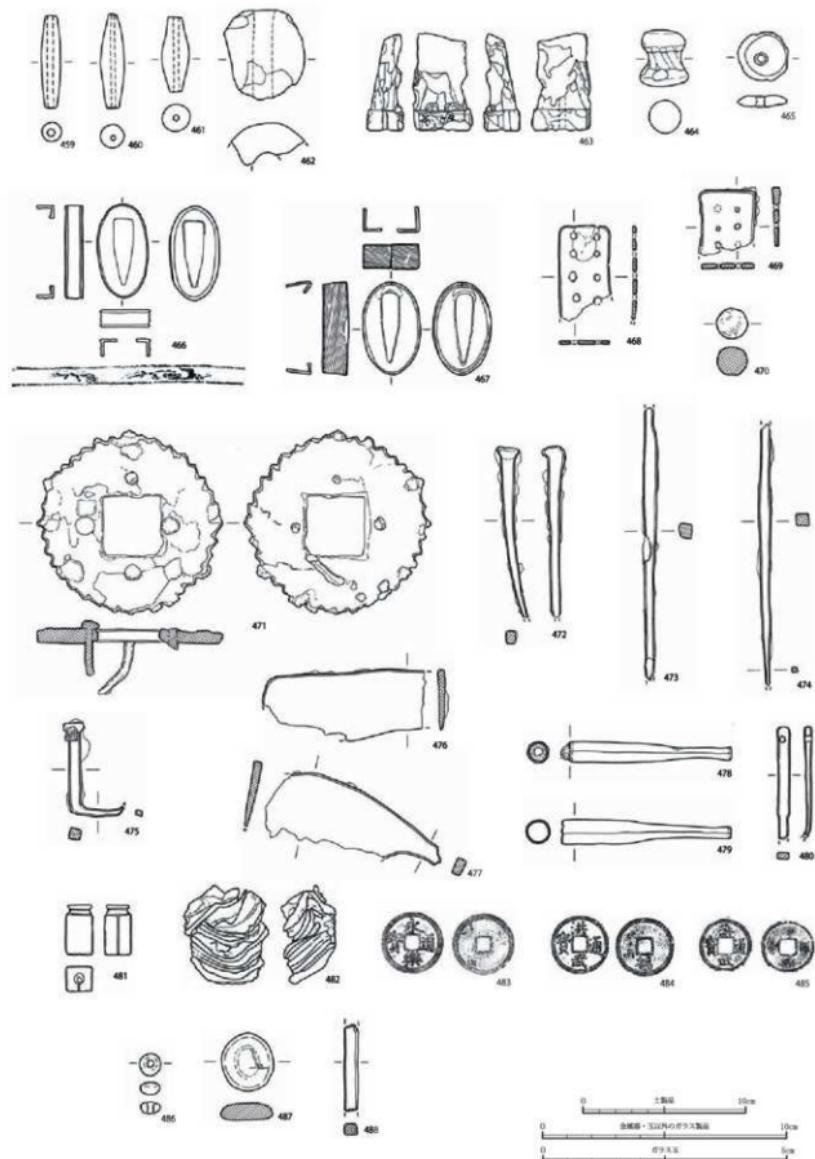
第67図 曲輪8出土遺物実測図7 (S=1/3)



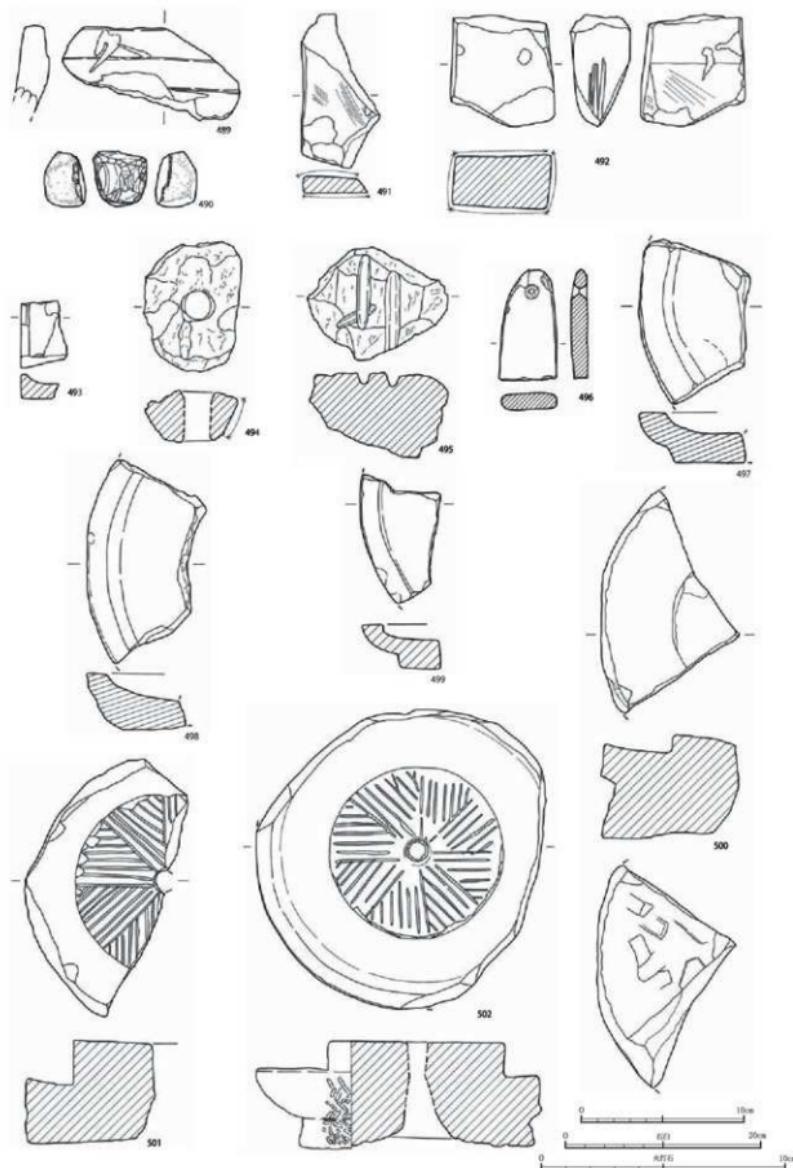
第68図 曲輪8出土遺物実測図8 (S=1/3・417のみS=1/4)



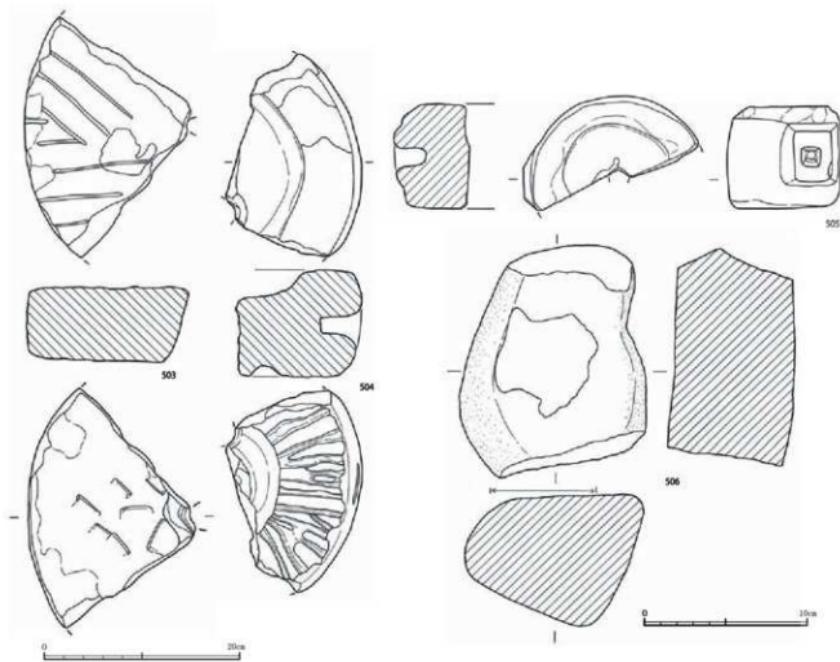
第69図 曲輪8出土遺物実測図9 (S=1/3)



第70図 曲輪8出土遺物実測図10 (S=1/1・S=1/2・S=1/3)



第71図 曲輪8出土遺物実測図11 (S=1/2・S=1/3・S=1/5)



第72図 曲輪8出土遺物実測図12 (S=1/5・506のみS=1/3)

ガラス製品 486は緑色のガラス玉である。487は不明ガラス製品である。色はコバルトブルーで気泡が多数見える。488は簪である。

石製品 489は石鍋である。鍤は低く退化している。490は火打石である。使用により稜が潰れ、火打金の鉄分が付着している。491は砥石である。両面使用している。492も砥石である。砂岩製で荒砥ぎに使用したものと考えられる。493は硯である。494は軽石製浮きである。495は軽石製品で3本の溝が刻まれている。496は秤の権と思われる。孔は両面穿孔である。497~502は茶白の下白である。497~499は受皿部のみ残存している。何れも受皿内面は丁寧なミガキ調整により平滑に仕上げられている。500は受皿から白面への立ち上がり部まで残存しているが白面自体は残存していない。底面に工具痕が残る。501は受皿の大部分を欠損しているが白面が半分程度残存している。8分画とみられ、目の単位は7~9本である。502は一部ではあるが脚台から白面まで残存しているため全容が把握できる。白面は8分画で目は6~8本である。受皿外面から底面まで研による整形が成されている。白面は使用により磨滅が見られる。503~504は粉挽白下白である。503の供給口は白の中心付近にあるが、504は中心からはずれた位置にある。また供給口が斜めに穿孔されており、さらに白面にも供給口から続く溝が彫り込まれている。これは白面に粉にする対象物が効率よく広がるような構造と考えられる。505は茶白上白である。挽き木を挿す穴が確認できる。506は台石である。熱を受け黒変している。

第6表 曲輪8出土遺物観察表 I

番号	出土位置	種別	器種	法量		色調	調整・文様	時期	備考	
				口径	底径					
289	包含層	白磁	皿	(9.8)		灰白		14C後半～16C代	洛陽西都官窯・森田E群	
290	集裡内	白磁	皿		(7.2)	灰白		16C後半	福建産	
291	曲輪8・間通路灰土	白磁	皿	(11.8)	(6.4)	23	灰黃	15C後半～16C代		
292	土坑8・中層	白磁	皿	(15.2)		灰白		15C後半～16C代	森田E群	
293	土坑11・上層	白磁	皿	(14.8)		灰白		15C後半～16C代	森田E群	
294	土坑8	白磁	皿		(9.1)	灰白		15C後半～16C代	高台所望官窯・森田E群	
295	土坑8・中層	白磁	皿		(8.8)	灰白		15C後半～16C代	高台所望官窯・森田E群	
296	土坑8	白磁	皿		(8.7)	灰白		15C後半～16C代	高台所望官窯・森田E群	
297	遺構検出時	白磁	八角杯			灰白		14C後半～16C代	洛陽西都官窯・森田E群	
298	包含層	白磁	瓶		(7.2)	灰白		16C後半	高台所望官窯・森田E群	
299	含層場	青白磁	香炉	(5.8)	(4.6)	61	明暎灰			
300	溝3	青磁	碗	(12.5)		明オーリープ灰		15C後半～16C前半	上田BⅢ類	
301	集裡	青磁	碗		(3.0)	オーリープ灰		15C後半～16C前半	上田BⅢ類	
302	包含層	青磁	碗	(14.6)		明オーリープ灰		14C中葉～15C初頭	上田D類	
303	包含層	青磁	碗			灰白		14C中葉～15C初頭	上田D類	
304	集裡	青磁	碗	(12.6)		オーリープ灰		14C後半～15C初頭	上田BⅢ類	
305	中央造土成	青磁	碗		(5.3)	緑灰	草花文			
306	表土	青磁	碗		(5.0)	明暎灰	草花文			
307	土坑4	青磁	碗		(4.5)	緑灰	草花文			
308	土坑36	青磁	碗		(5.3)	オーリープ灰	草花文			
309	遺構検出時	青磁	輪花瓶	(13.2)		オーリープ灰		15C中頃～16C代	柴田B-I類・二次焼成	
310	埋瓦	青磁	輪花瓶	(10.4)		灰オーリープ	波状團線	15C中頃～16C代	柴田B-I類	
311	溝3	青磁	輪花瓶	(13.8)		オーリープ灰	朝花文・波状團線	15C中頃～16C代	柴田B-I類	
312	溝2	青磁	輪花瓶		5.7	緑灰	草花文	15C中頃～16C代	柴田B-I類	
313	包含層	青磁	盤	(23.9)		灰オーリープ	連丸文	14C後半		
314	包含層	青磁	盤		(9.6)	灰オーリープ				
315	盛土内	青磁	盤		(11.3)	オーリープ灰				
316	包含層	青磁	小皿	(7.3)		緑灰	鶴描文			
317	表土	青磁	瓶	(6.6)		明暎灰				
318	集裡	青磁	香炉	(5.0)		灰オーリープ			鶴鬼面	
319	溝3中・下層	青花	碗		(5.0)	灰白	色蕉文・淡薄文	15C後半～16C後半	小野田I類・淡薄文が 少	
320	ビット9・包含層	青花	碗	(14.0)	(5.4)	(7.6)	灰白	15C後半～16C後半	小野田I類・淡薄文が 少	
321	含層場	青花	碗		4.6	明青灰	草花文・團線			
322	集裡2	青花	碗		(4.6)	灰白	文字文？・團線			
323	表土	青花	碗			灰白	文字文？		高台内に施文	
324	遺構検出時	青花	碗		(5.5)	明暎灰	小花文・團線	15C後半～16C	小野田I類	
325	溝3	青花	碗			明暎灰		16C後半	景徳鎮産	
326	遺構検出時	青花	皿	(13.4)	(7.0)	2.4	明オーリープ灰	牡丹唐草・團線	15C後半～16C後半	小野田群・景德鎮産
327	包含層	青花	皿		(6.3)	灰白	唐草文・草花文	16C中頃～末	小野田群・景德鎮産	
328	包含層	青花	皿	(12.4)	(6.4)	2.6	明暎灰	唐草文・玉取獅子	二次焼成・小皿・景德鎮産	
329	破城跡崩落土	青花	皿	(10.6)		明暎灰	唐草文	15C後半～16C後半	小野田群・景德鎮産	
330	包含層	青花	皿		(10.0)	明暎灰				
331	溝3表面直上	青花	皿	(14.4)		明オーリープ灰	牡丹唐草・團線	15C後半～16C後半	小野田群・景德鎮産	
332	集裡	青花	皿	(13.2)		明青灰	唐草文	15C後半～16C後半	小野田群・景德鎮産	
333	土坑8・土坑11	青花	皿	(20.0)	(11.4)	3.6	明暎灰	鶴鱗	16C中葉～後半	(深褐色色團線) 二次焼成
334	溝3	青花	皿	(9.4)	(4.8)	2.9	明暎灰	唐草文・四方博文	16C前半～中頃	小野田群・景德鎮産
335	含層場	青花	皿	(8.0)	(3.4)	1.9	明青灰	牡丹唐草・團線	15C後半～16C後半	小野田群・景德鎮産
336	土坑129	青花	皿	(13.4)		明暎灰	唐草文	16C代	小野田群・景德鎮産	
337	表土	青花	皿		(6.7)	明暎灰	畫竈文	16C後半		
338	表土	青花	皿		(4.7)	明オーリープ灰	捺花	16C代？	瀋州窯	
339	包含層	青花	皿			灰白				
340	表土	青花	皿	(12.0)		明オーリープ灰	草花文	16C後半	小野田群・瀋州窯	
341	土坑8	青花	皿	(11.4)	(4.6)	2.8	灰オーリープ	梵文？・文文・團線	16C後半	小野田群・瀋州窯
342	包含層	青花	皿		(3.4)	灰白	團線	16C後半	小野田群・瀋州窯	
343	集裡	青花	皿	(9.4)		明暎灰	梵文字・團線	16C後半	小野田群・景德鎮産	
344	ビット240	青花	皿		(4.9)	明暎灰	梵文字・團線	16C後半	小野田群・景德鎮産	
345	包含層	青花	皿		(4.0)	明オーリープ灰	文字文・團線	16C後半	小野田群・景德鎮産	
346	集裡	青花	皿	(10.2)	(4.0)	2.9	灰白	文字文・團線	16C後半	小野田群・景德鎮産
347	包含層	青花	皿		(2.4)	明青灰	梵文文・梵焦文・團線	16C前半～中頃	小野田群・景德鎮産	

第7表 曲輪8出土遺物観察表2

番号	出土位置	種別	器種	法量			色調	調整・文様	時期	備考
				口径	底径	器高				
348	曲輪7・8周通路土	青花	皿		(39)		明緑灰	草花文	16C後半	小野C群・瀧州窯系
349	混合層	青花	皿		(42)		明オリーブ灰	文字文?	16C後半	小野C群・瀧州窯系
350	混合層	青花	皿	(23.8)			明緑灰	達矢文・波文	16C中頃～後半	口縁輪花状
351	表土	青花	皿	(24.9)			明緑灰	達矢文・波文・直邊文	16C中頃～後半	口縁輪花状・二次被熱
352	表土	青花	小杯		(3.2)		明緑灰	團鶴		
353	溝3中層・下層	蓋	柄みげん (64)				明緑灰	草文・團鶴		蓋
354	集謹	五彩	皿	(12.6)			灰白	牡丹草唐・團鶴	16C後半	二次被熱
355	曲輪7・8周通路土	五彩	蓋	(8.5)			灰白	花文・團鶴	16C後半	
356	曲輪7・8周通路表土	五彩	蓋							香炉の可能性有
357	表土	草叢三彩			(6.8)		明青綠			綠釉の可能性有
358	表土	草叢三彩					オリーブ黄			ラティカルな跡有?
359	表土	草叢三彩					明緑			器種不明
360	溝3下層	草叢三彩	水注	(4.0)			明青緑・黃緑	貼付葉文	明代	夏美形水注・一次被熱
361	土坑8中層	草叢三彩	水注				明青緑・黃緑	二分割型製品	明代	鶴形水注・二次被熱
362	混合層	陶器			(10.4)		黒	施釉		中国產
363	表土	陶器	壺	(6.6)			暗オリーブ	施釉		口縁部に移目・中国產
364	混合層	陶器	壺	(9.5)			黒	施釉		中国產
365	表土	陶器	壺	(13.0)			灰褐色	円形浮文・施釉		
366	土坑2	陶器	壺	(11.2)			灰黃褐色	施釉	16C代	草叢產
367	廐土内	陶器	壺	(9.2)			暗オリーブ	施釉	16C代	草叢產
368	廐土内	陶器	壺				暗オリーブ	施釉	16C代	草叢產
369	集謹	陶器	壺				暗オリーブ	施釉		中国產
370	集謹	陶器	壺				暗褐色	施釉	16C代	草叢產
371	溝3床面直上	陶器	壺				黒・團鶴文	施釉		中国產
372	表土	陶器	壺				暗オリーブ	施釉		中国產
373	集謹	陶器	壺				灰オリーブ	施釉		中国產
374	混合層	陶器	壺				暗オリーブ	施釉		中国產
375	混合層	陶器	壺				暗オリーブ	施釉		中国產
376	土坑8中層	陶器	壺				黃灰	施釉		中国產
377	溝3	陶器	壺or瓶				黒褐色	施釉	明代	長脛タイプ・草叢產
378	表土	陶器	壺				暗オリーブ	施釉		中国產
379	通路状造機	陶器					オリーブ褐	沈鶴・施釉		中国產
380	混合層	陶器					黒・團鶴文	施釉		中国產
381	破城時崩落土	陶器					オリーブ褐	施釉		焼成時に釉剥離部有
382	溝3下層	陶器					灰褐色	施釉	明代	草叢產
383	土坑8中層・溝3	陶器	壺or瓶		(15.8)		黒褐色	施釉	16C代	草叢產
384	混合層	陶器					灰白	一部施釉		中国產
385	表土	陶器	壺				黒	施釉		中国產
386	集謹	陶器	壺				暗褐色	施釉		中国產
387	表土	陶器	壺				黃灰	施釉		中国產
388	表土	陶器					オリーブ黒	施釉		中国產?
389	混合層	陶器	盤鉢	(26.0)			明赤褐色	9条垂り目	14C中頃～後半	
390	混合層	陶器	盤鉢				暗赤褐色	宿印	16C代	
391	ピット425	陶器	盤鉢	(29.6)	(11.6)	14.4	赤褐色	14条垂り目	16C後半	使用痕有
392	通路状造機	陶器	盤鉢	(26.6)			暗赤褐色	描り目	16C後半	
393	集謹	陶器	盤鉢	(27.2)			暗赤褐色	描り目	16C後半	
394	通路状造機	陶器	盤鉢	(30.0)			灰褐色	11条垂り目	16C後半	
395	東側落ち込み	陶器	盤鉢	(26.2)			灰褐色	描り目	16C後半	
396	集謹	陶器	盤鉢	(22.9)			にぶい赤褐色	描り目	16C後半	
397	溝3中層	陶器	盤鉢	(37.0)			暗赤褐色	描り目	16C後半	
398	表土	陶器	壺	(12.5)			暗赤褐色		16C代	
399	溝2下層	陶器	壺	(13.2)			暗褐色		16C代	
400	溝3	陶器	壺	(13.2)			にぶい赤褐色			
401	表土	陶器	壺				灰褐色	円形浮文		
402	溝3床面直上	陶器	壺				オリーブ黄	沈鶴		
403	土坑8中層	陶器	壺				灰			
404	溝3下層	陶器	壺or瓶		(19.0)		灰			
405	過路検出跡	陶器	壺		(9.6)		暗褐色			
406	通路状造機	陶器	壺		(13.0)		にぶい赤褐色			粘土接合痕明顯に残る

第8表 曲輪8出土遺物観察表3

番号	出土位置	種別	器種	法量			色調	調整・文様	時期	備考
				口径	底径	器高				
407	包含層	陶瓶	壺		(6.3)		赤褐色			
408	集裡・通路状遺構	陶瓶	壺		8.1		にぶい赤褐色			
409	東端部5m下層	陶瓶	壺		(7.9)		黒褐色			
410	表土	陶瓶	壺		(8.0)		灰褐色	窓印		
411	土坑8中層	陶瓶	壺	(10.4)			暗灰褐色			
412	集裡	陶瓶	木星裏				黒褐色			
413	表土	陶瓶	壺?	(8.6)			暗赤褐色			
414	表土	陶瓶	壺				赤褐色			
415	溝1	陶瓶	壺				灰褐色			
416	包含層	陶瓶	壺or壺				にぶい褐色	ハケメ	ひび割れを伴う布地模様	
417	土坑38炭化物層	陶瓶	壺		(54.8)		暗赤褐色	工具痕	底部に漆布付着	
418	土坑11	陶瓶	木星裏				暗赤褐色	貼付突帯		
419	溝3下層	陶瓶	壺				灰褐色			
420	包含層	陶器	天目茶碗	(12.1)			黒	施釉	16C代	二次被熱・黒口美濃
421	集裡	陶器	天目茶碗	(11.6)			黒褐色	施釉	16C代	二次被熱・黒口美濃
422	溝3上層	陶器	天目茶碗	(12.4)			暗褐色	施釉	16C代	二次被熱・黒口美濃
423	表土	陶器	天目茶碗		4.4		浅黃褐色	施釉	16C代	二次被熱・黒口美濃
424	集裡	陶器	天目茶碗	(4.2)			灰褐色	施釉	16C代	黒口美濃
425	溝3床面直上	陶器	碗		4.7		灰白色	施釉	1610~1630 砂口増・肥前	
426	城域内削落土	陶器	皿	(10.0)	4.2	23	灰オリーブ	施釉	16C末	3足ハマ・肥前
427	集裡	陶器	皿	(11.7)	39	28	灰白色	施釉	16C末	肥前
428	表土	陶器	壺				褐灰色		16C末	薩摩
429	表土	陶器	壺or壺				暗オリーブ		室町	信楽
430	溝3	陶器	壺or壺				暗オリーブ		室町	信楽
431	土坑25	土師器	皿	(13.2)	9.2	22	にぶい黄褐色	回転ナデ		底部ヘラ切り後ナデ
432	包含層	土師器	皿	(12.2)			明黄褐色	回転ナデ		
433	通路状遺構	土師器	环		6.5		浅黃橙	回転ナデ		底部板目状圧痕
434	集裡	土師器	环	(11.4)	(7.5)	26	橙	回転ナデ		底部ヘラ切り後ナデ
435	溝3中・下層	土師器	环	(11.6)	(7.2)	29	にぶい黄褐色	回転ナデ		底部回転系切
436	包含層	土師器	环	(10.4)	(7.8)	31	橙	回転ナデ		底部回転系切・鋭明具
437	掘立柱建物1	土師器	环	(11.3)			浅黃橙	回転ナデ		
438	包含層	土師器	环		(7.0)		浅黃橙	回転ナデ		底部ヘラ切り
439	通路状遺構	土師器	环		(6.6)		浅黃橙	回転ナデ		底部回転系切
440	集裡	土師器	环		(8.0)		にぶい黄褐色	回転ナデ		底部板目状圧痕
441	溝3	土師器	环		5.7		にぶい黄褐色	回転ナデ		底部回転系切
442	集裡	土師器	环		(7.7)		浅黃褐色	回転ナデ		底部回転系切
443	土坑1下層	土師器	环		(8.8)		にぶい黄褐色	回転ナデ		風化著しい
444	溝3	土師器	小皿	(7.2)	(5.5)	23	浅黃褐色	回転ナデ		底部回転系切
445	集裡4	土師器	小皿	8.0	5.5	20	橙	回転ナデ		光部回転系切・鋭明具
446	包含層	土師器	製塙器	(8.7)				ナラ木目直擦・瓦張		
447	通路状遺構	須恵器	壺				灰	格子タキツキ/ナデ		
448	土坑36	須恵器	壺				灰	格子タキツキ/ナデ		
449	集裡4	瓦質土器	釜	(17.4)	(9.2)	54	浅黃褐色	回転ナデ		底部ヘラ切り
450	包含層	瓦質土器	香炉	(9.8)	(8.8)	35	橙	スタンプ文/ハケメ		
451	表土	瓦質土器	香炉				にぶい橙	波文		
452	通路状遺構	瓦質土器	香炉	(12.8)	(12.6)	130	橙	スタンプ文・博文		
453	表土	瓦質土器	湯釜	(14.1)			褐灰色	回転ナデ		耳付
454	包含層	瓦質土器	盤				にぶい橙	回転ナデ		
455	包含層	瓦質土器	盤			5.0	橙	回転ナデ		
456	溝2上層	瓦質土器	香炉?		(11.7)		にぶい黄褐色	脚貼付		底部回転系切
457	集裡	瓦質土器	把手							把手
458	溝3	瓦質土器	火鉢	(23.2)			橙	横ナデ		
459	包含層	土師質	土鍋	5.6	1.15	1.2	重量6.0g			
460	城域内削落土	土師質	土鍋	5.8	1.47	1.43	重量9.27g			
461	包含層	土師質	土鍋	4.6	1.65	1.7	重量9.66g			
462	包含層	土師質	土鍋	(5.45)	(4.6)		重量50.63g			
463	包含層	土師質	土人形	(5.92)	(3.6)	(2.2)				底盤から穿孔
464	包含層	土師質	糸巻き	3.45	3.0	2.55	重量23.32g			擦痕有
465	廐土内	土師質	純鍊車	3.05		0.65	にぶい黄褐色			

第9表 曲輪8出土遺物観察表4

番号	出土位置	種別	器種	法量			色調	調整・文様	時期	備考
				口径	底径	器高				
466	表土	銅製品	錫	3.85	2.05	0.7	重量9.96g	海鳥文		板材と帶金から構成
467	廢土内	銅製品	錫	3.8	2.4	1.1	重量11.07g	斜線		板材と帶金から構成
468	包含層	鉄製品	小札	(3.9)	2.1	0.15				平小札
469	包含層	鉄製品	小札	(2.7)	2.3	0.3				平小札
470	表土	鉄製品	鐵砲弾	徑1.35			重量10.3g			
471	表土(前面)	鉄製品	施金具	7.6		0.6				4本の前により打ち落ち
472	土坑8中層	鉄製品	釘	(6.9)	1.0	0.5				
473	包含層	鉄製品	釘?	(11.1)	0.6	0.6				
474	包含層	鉄製品	釘?	(10.8)	0.5	0.5				
475	土坑8中層	鉄製品	釘	3.8	0.5	0.5				折れ曲がり一部本貫付着
476	包含層	鉄製品	釘?	(6.55)	2.8	0.2				
477	包含層	鉄製品	釘	(7.5)	2.8	0.3(刃)	0.4(茎)			
478	表土	銅製品	椎管吸口	6.6	0.85	0.85				本貫残存
479	包含層	銅製品	椎管吸口	6.9	1.0	1.0				
480	東端落ち込み	銅製品	笄	(4.6)	0.45	0.25				
481	土坑8中層	銅製品	分銅	2.1	1.1	1.1	重量14.06g			
482	包含層	銅貨	錢種不明							1枚残存
483	包含層	銅貨	永樂通宝	外形2.50内径2.10穿孔0.51 銀厚0.12						重量3.11g
484	包含層	銅貨	洪武通宝	外形2.30内径2.10穿孔0.51 銀厚0.11						表面に「匁」・重量2.81g
485	東端落ち込み	銅貨	洪武通宝	外形2.15内径1.90穿孔0.58 銀厚0.05						重量1.27g
486	表土	ガラス製品	ガラス玉	0.45	0.4	0.25	重量0.06g			
487	表土	ガラス製品	不明	2.35	2.1	0.7	重量4.60g			群青色・気泡多數含む
488	表土	ガラス製品	簪	(3.6)	0.55	0.45	重量2.67g			
489	集塵	石製品	石繩			灰				木片分割點? 青銅化
490	表土	石製品	火打石	2.3	2.2	1.6	重量10.19g			褐色に白色斑・チャーピ
491	包含層	石製品	砾石	(9.5)	(4.8)	1.25				擦痕有
492	包含層	石製品	砾石	(6.8)	6.35	3.5				擦痕有
493	包含層	石製品	硯	(4.1)	(2.8)	1.45				擦痕・裏面として青銅化?
494	表土	石製品	浮き	7.95	6.0	3.2	重量34.77g			片面穿孔・輕石
495	東端落ち込み	石製品		(6.95)	(8.6)	(5.1)	重量39.14g			輕石製品
496	溝3中下層	石製品	椎	6.75	3.55	1.0	重量42.19g			研のおり
497	通路状遺構	石製品	茶臼					底部研磨・受皿外面研		下臼・一部被熱により変色
498	土坑11	石製品	茶臼					受皿外面から底面研		下臼
499	溝1	石製品	茶臼							受皿外面研
500	集塵	石製品	茶臼					底面工具痕残る		下臼
501	集塵	石製品	茶臼		10.5			8分画 目7~9本		下臼・一部被熱により変色
502	土坑33	石製品	茶臼	(33.6)	10.9		8分画 目6~8本 受皿外面から底面研			下臼・一部被熱により変色
503	集塵	石製品	粉挽臼					上面工具痕		上臼・削痕・縦めに穿孔
504	集塵	石製品	粉挽臼							上臼・一部被熱により変色
505	集塵	石製品	粉挽臼							上臼・風化著しい
506	土坑8中層	石製品	臼石	(13.2)	11.4	8.0	重量172kg			一部被熱により黒変

表注記

法量は土器は口径、底径、器高を、その他の遺物はそれぞれ長さ、幅、厚さを示す。

()のついた数値は土器は復元値、その他の遺物は現状値を示す。

陶器器の概定は大徳康二氏に依頼した部分もあるが、整理途中であったため僅かである。その他は著者が行い観察表を作成したため、誤認、誤認等の責任はすべて著者にある。

6. 小結

曲輪 8 も発掘調査により現地表観察ではわからなかった構造が明らかになっている。ここでは曲輪構造を中心にまとめ小結したい。

まず曲輪の東端において曲輪 7 の東端で検出された堀（東端堀）の延長部が検出された。ただし、曲輪 7 では深さが約 2.7m であったのに対して、曲輪 8 では両曲輪間の高低差（約 3m）を反映した形で深さが約 0.3m しかなく、堀としての機能は果たしていないことが明らかとなつた。その床面には硬化面が形成されており、通路としての機能のみ担つていたと想定される。通路の西肩には簡易な石積みが見られる。また曲輪 7 からの斜面下において堀をまたぐように 2 対のビットが検出されており、門が設置されていた可能性がある。門構造に関しては今後の追加調査により明らかにしていく予定である。この東端堀の延長部が確認されたことで、曲輪 7 出入口→東端堀→曲輪 8 という一連の順路が明らかになった。東端堀が埋め戻された際に一連の遺構である溝 3 も廃棄されたとみられ、さらに東側に通路状遺構が形成されている。礫を使用する通路廃棄状況をみると、この通路状遺構が破城の際まで曲輪 8 へ入る通路として使用されていたと考えられる。

斜面トレンチでは曲輪 7 中央堀の延長部が確認された。曲輪 7 中央堀は深さ 1.2m ほどであり、曲輪 8 へ向けて下降傾斜しているものの高低差は残ることになる。この中央通路ではその高低差を階段状遺構によって埋めている。階段は 5 段で曲輪 8 側は斜面下に設けられた幅約 1m の犬走り状段に接続する。曲輪 7 へと向かう者は前述の東端堀を抜けて曲輪 8 に入った後、犬走り状段へと進み、そこから中央通路の階段を上り、曲輪 7 中央堀を通過し曲輪 7 へと入る順路を探すことになる。主郭とは言え 1 つの曲輪へと入るために一度目的地である曲輪を迂回し別の曲輪へ入り、そこから再び上るという非常に手の込んだ順路となっている。また当然ではあるが中央堀が埋め戻される際に階段状遺構も埋め戻されている。

階段状遺構が接続する犬走り状の段は曲輪 7 からの斜面下において 1m 前後の幅で検出された。この段は東端堀を確認するためのトレンチでは確認されていないため曲輪 8 の中央東寄りから西端付近まで設けられていると思われる。その役割は階段状遺構が接続することから通路とみてよい。また犬走り状段下部には溝 3 が取り巻くように掘削されており、犬走り状段を区画する役割があったと考えられる。

最後に曲輪内の空間分化であるが、曲輪 8 では曲輪 7 のように曲輪を区画する堀は確認されていない。ただしビットの粗密を見ると明らかに「奥」に当たる西側に密集している。このことから曲輪 7 と同様に西側が建物を配置する空間であったことがわかる。調査範囲の問題から大型の掘立柱建物は検出されていないが、3 棟の掘立柱建物が確認されている。一方、曲輪東側は東端堀を通り曲輪へと入る入口となる。そのためかビットや土坑も少数で、不要な侵入を防ぐための柵列が配置されている。また曲輪中央付近は土坑が集中する区域である。この中には華南三彩鶴形水注や白磁皿、青花皿、国外産陶器、備前焼窯、鉄釘、分銅、被熱により赤化した台石、炭化米などの遺物が出土した土坑 8 も含まれる。その性格は、出土遺物に完形の遺物がないことや、複数層から遺物が出土することから廃棄土坑と考えられる。他の土坑は出土状況や埋土に特徴的な事例もなく用途は不明とせざるを得ない。掘立柱建物 4 が存在するため概には言えないが、建物を配置するよりは空地としての使用時期が長いと想定される。

第Ⅷ章 総括

本章では今回の発掘調査で得られた遺構、遺物の検討を行い、現時点における発掘調査成果の総括としたい。

主郭通路 まず主郭への通路であるが、伊東氏の支配下にあった16世紀後半より以前は、曲輪7の東に位置する曲輪10から堀底を通り、曲輪7の南東端に位置するL字形もしくはT字形の出入口を通過し、そこから東端堀を北へ進み曲輪8へと入り、中央通路階段を上り、曲輪7中央堀底へと進み、曲輪7へと到着するという順路が想定される非常に複雑なものである。これは曲輪7と8の綿密な連携性を表しているとも言える。繩張り図の検討から曲輪7と8は西側を一連の土塁と堀で守られているため、二つの曲輪を合わせて主郭と考えられてきた。今回の調査で明らかとなった両曲輪を跨ぐ順路は、両曲輪を一体のものとして捉えていたためと考えられそれを裏付けるものとなった。一方で島津氏の支配下となる16世紀後半（1577年）以降は曲輪7、曲輪8共に単独の出入口が設けられている。出入口構造も浅い溝状のより簡易なものとなる。単独で見ると防御性の低下は必至であるが、戦国期という時代背景を考えると城の全体構造においてカバーしていた可能性が高い。主郭部分に関して言えばより居住に適した構造へと変化させているように感じられる。

このような曲輪の改変は曲輪20においても確認されている。曲輪20では曲輪内の段差を埋める造成、西端に存在した堀切を埋め戻す造成を行っている。この中で堀の造成に関しては出土遺物から16世紀代中頃と考えられる。ただしこの堀は曲輪20を通り主郭へと向かう通路を塞ぐような位置にあることから主郭での出入口の改変と連動している可能性がある。遺物の時期も上限を示すものであり、島津氏が城構造全体の再編を行ったと考える方がむしろ妥当ではなかろうか。

主郭の空間利用 次に曲輪の空間利用について述べたい。繰り返しになるが曲輪7の中央付近には南北方向に軸をもつ中央堀が存在し曲輪を東西に分断している。この中央堀を境に、東西で多量のピットが確認される西側は建物を配置する空間、少数のピットしか確認されない東側は空地に分けられることは前述のとおりである。また曲輪8も同様に多量のピットが確認される西側が建物を配置した空間で、東側が空地と考えられる。ここまででは個々の曲輪内の空間の使用方法であるが、中央堀が存在した時期は、前述のように曲輪7と曲輪8が綿密に連携していたことが想定される。当時の主郭は他城の事例をみても政治を行う空間と日常の生活を行う居住空間に分割されていた可能性が高い。では両曲輪内の空間利用についてはどのように考えられるだろうか。ここで鍵となるのは最上段に位置する曲輪7への順路である。曲輪7へ向かうには曲輪7南東端にある出入口から直接入ることはできず、必ず曲輪8を経由することになる。このように曲輪7の方がより「奥」に位置することになることから、曲輪7の掘立柱建物1が「主殿」に相当する建物であり「政所」としての機能を有していたと考えられる。それに対し曲輪8は調査区内では大型建物が検出されていないものの、壺、甕など貯蔵具を中心に多くの遺物が出土していることから「常御殿」と「会所」の役割を果たしていたと考えられる。中央堀が埋め戻された後は個々の曲輪に通路が設けられ独立性が増すことから曲輪内での空間分化に置き換わっている可能性が高い。

出土遺物の検討 出土遺物は曲輪7、8では15世紀後半から16世紀を主体とする時期、曲輪20では14世紀から15世紀代を主体とし、少量ではあるが16世紀代の遺物も出土している。特に注目されるのは16世紀代を中心とする貿易陶磁器類である。一般的な白磁、青磁、青花に加え、五彩や華南三彩、華南産など中国産陶器壺が出土している。特に陶器壺は、當時流通の中心であった備前焼と比較しても大きく変わらない量が出土しており移佐城の特徴と言える。これらの貿易陶磁器の入手ルートであるが、伊東氏の支配下では博多や豊後大友氏からと想定され、16世紀後半以降の島津氏支配の時期には琉球経由と想定される。鶴形水注などの希少遺物は微妙な時期ではあるが、島津氏の時期と想定したい。

また今回の調査では曲輪8から天目茶碗や葉茶壺と想定される華南産の陶器壺、風炉としての使用も想定される瓦質土器、多量に出土した茶臼など茶の湯に関する遺物が多量に出土した。茶の湯は当時の武士の社会的地位を示すステータスでもあり、移佐城の城主も盛んに嗜んでいたようである。宮崎市池内町に所在する宮崎城の城主であった上井覺兼は日常の生活を詳細に日記に記しているが、天正11年（1583）の日記の中だけでも75回の茶会の記事が出てくる。当時の武士の中でいかに茶の湯が重要視されていたかがわかる。

おわりに 今回の調査では各曲輪の構造など現地表観察では不明であった部分を明らかにできた部分も多い。しかし曲輪7出入口の全体的な構造や曲輪7肩部の構造、また園地と想定される曲輪7土塁下の構造など今後明らかにしなければならない課題も多い。今後の発掘調査により明らかにし、史跡整備へと繋げて行きたい。

主要参考文献

- 上田秀雄 1982 「14~16世紀の青磁の分類について」『貿易陶磁研究』2、日本貿易陶磁研究会。
- 小野正敏 1982 「15、16世紀の染付碗、皿の分類とその年代」『貿易陶磁研究』2、日本貿易陶磁研究会。
- 北島大輔 2010 「大内氏館跡」 XI、山口市埋蔵文化財調査報告第101集、山口市教育委員会。
- 重根弘和 2004 「中世備前焼に関する考察」『山口大学考古学論集』近藤義一先生退官記念事業会。
- 柴田圭子 1998 「湯築城跡出土土器様相の把握」『湯築城跡』財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センター。
- 鳥田正浩 1995 「中世城館「移佐城」について－東諸県郡高岡町所在－」『宮崎県史研究』第8号、宮崎県。
- 千田嘉博 2000 「織豊系城郭の形成」東京大学出版会。
- 千田嘉博 2003 「戦国期城郭の空間構成」『国立歴史民俗博物館研究報告』第108集、国立歴史民俗博物館。
- 田中敏雄編 2012 「塙見城跡」宮崎県埋蔵文化財センター埋蔵文化財発掘調査報告書第210集、宮崎県埋蔵文化財センター。
- 谷口俊治ほか編 1997 「小倉城跡」北九州市埋蔵文化財発掘調査報告書第196集、財團法人北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室。
- 中世土器研究会編 1995 「概説 中世の土器・陶磁器」真陽社。
- 日本貿易陶磁研究会・大分市教育委員会編 2011 「南蛮貿易と陶磁器」第32回日本貿易陶磁研究集会(大分大会)資料集。
- 博多研究会編 2011 「博多研究会誌」20周年記念特別号。
- 森 級 1992 「16世紀後半から17世紀初頭の陶磁器」「難波宮址の研究」第九、財團法人大阪市文化財協会。
- 森田勉 1982 「14~16世紀の白磁の型式分類と編年」『貿易陶磁研究』2、貿易陶磁研究会。
- 山本信夫 2000 「大宰府条坊跡XV-陶磁器分類編-」太宰府市の文化財第49集、太宰府市教育委員会。



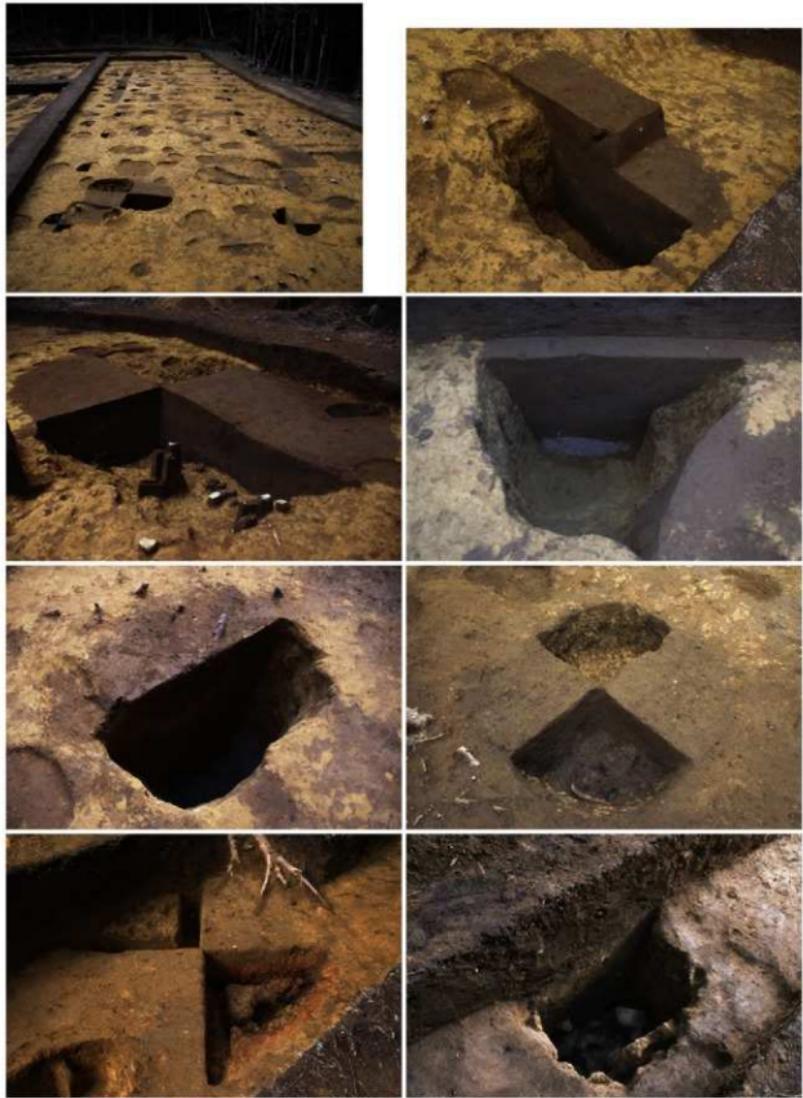
曲輪7・8調査区垂直写真（平成20～23年度調査分合成）



上：曲輪20調査区垂直写真（上が北）
中：1 トレンチ土層堆積状況（南東から）
（中層付近の黄色土がシラスによる造成土）
下：2 トレンチ造成土直下遺物出土状況（北から）



一段目左：土坑1TR-6半截状況（南西から）
一段目右：土坑2TR-3・4調査状況（北から）
二段目左：土坑3TR-7半截状況（南から）
二段目右：土坑3TR-10調査状況（南西から）
三段目左：石込めピット半截状況（東から）
三段目右：炉跡検出状況（南東から）
四段目：埴土層堆積状況（北西から）



一段目左：据立柱建物1調査状況（東から）

二段目左：土坑2調査状況（北東から）

三段目左：土坑11半裁状況（北東から）

四段目左：土坑1TR-1調査状況（南西から）

一段目右：土坑1半裁状況（南東から）

二段目右：土坑7半裁状況（東から）

三段目右：土坑18鉄鏹出土状況（北東から）

四段目右：土坑2TR-1半裁状況（北東から）



上左：溝1 調査状況（南から）
上右：中央塁調査状況（南から）
中：中央塁土崩堆積状況（南から）
下：20年度調査区調査終了時状況（北東から）





上：東陸堀調査状況（南から）
中：曲輪7出入口調査状況（北東から）
下：曲輪7出入口縁・遺物出土状況（西から）



上：通路状遺構土層堆積状況（南東から）
中：21年度調査区調査終了時状況（東から）
下左：土壘北トレーン調査状況（東から）
下右：土壘南トレーン調査状況（東から）



写真図版 8
曲輪 8



上左：掘立柱建物 4 調査状況（東から）
上右：土坑 1 調査状況（南東から）
中左：土坑 17 半蔵状況（北東から）
中右：土坑 33 白茶出土状況（北西から）
下：土坑 8 華南三彩鶴形水注出土状況（西から）



上左：土坑38個前大甕出土状況（北から）
上右：溝2開査状況（北から）
中左：溝2石積状況（東から）
中右：溝2石積崩落状況（北東から）
下：溝3開査状況（北西から）
(奥に犬走り状の段が見える)



一段目左：溝7土層堆積状況（西から）
一段目右：通路状遺構調査状況（東から）

二段目：集稼調査状況（北東から）

三段目左：集穀断面調査状況（北西から）

三段目右：ピット425備前鐵体出土状況（南から）

四段目左：22年度調査区調査終了時状況（東から）

四段目右：23年度調査区調査終了時状況（東から）





上：曲輪7・8間通路調査状況（北から）
下：曲輪7・8間通路調査状況（北東から）

写真図版12
曲輪20出土遺物



白磁・青磁・青花・国外産陶器



偏前・国産陶器・土師器



金属器・石器・土製品



上：白磁・青花 下：国外産陶器・国内陶器

写真図版14
曲輪7出土遺物2



上：備前焼 下：土師器・瓦質土器・土製品・金属製品・石製品



上：白磁・青磁・青花・五彩 下：国外産陶器

写真図版16
曲輪8出土遺物2



上：偏前焼、国産陶器 下：土器、土製品、金属製品、石製品

報告書抄録

ふりがな	しせき むかさじょうあといち									
書名	史跡 穂佐城跡 I									
副書名	穂佐城跡保存整備事業に伴う発掘調査報告書									
シリーズ名	宮崎市文化財調査報告書									
シリーズ番号	第94集									
編集者名	石村 友規									
発行機関	宮崎市教育委員会									
所在地	〒880-0805 宮崎市橘通東1丁目14番20号									
発行年月日	2013年3月29日									
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東經	調査期間	調査面積	調査原因		
		市町村	道路番号							
むかさじょうあいと 穂佐城跡 曲輪20	ムヤザシ じょうあいと 宮崎市高岡町小山田	45201	33-031	31° 56' 00" 付近	131° 19' 32" 付近	20070312～ 20070329 20071009～ 20080318	176m ²	保存整備		
むかさじょうあいと 穂佐城跡 曲輪7	ムヤザシ じょうあいと 宮崎市高岡町小山田	45201	33-011	31° 56' 00" 付近	131° 19' 25" 付近	20081008～ 20090312 20090625～ 20091201	1069m ²	保存整備		
むかさじょうあいと 穂佐城跡 曲輪8	ムヤザシ じょうあいと 宮崎市高岡町小山田	45201	33-011	31° 56' 00" 付近	131° 19' 25" 付近	20101124～ 20110316 20111109～ 20120329	903m ²	保存整備		
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項					
穆佐城跡 曲輪20	城郭	中世	土坑・堀・曲輪内区画	白磁・青磁・青花・備前・中国産陶器・鉄鎌・銭貨						
穆佐城跡 曲輪7	城郭	中世	土坑・堀・出入口・通路状遺構	白磁・青磁・青花・備前・中国産陶器・鉄鎌・銭貨						
穆佐城跡 曲輪8	城郭	中世	土坑・堀・通路状遺構	白磁・青磁・青花・五彩・草南三彩・中国産陶器・茶臼・刀の鍔						
要約	穆佐城跡 曲輪20	造成により曲輪内の改変を行ながら利用していたことが明らかとなった。遺構面は調査対象範囲内で3面確認されている。各遺構面において土坑、ピット、溝等の遺構が検出されている。最終的な造成において、曲輪内の区画のための段が埋め戻されている。また同時期に堀を埋め戻した可能性もある。								
	穆佐城跡 曲輪7	大型の掘立柱建物、曲輪中央に配置された通路を兼ねた堀、多数の土坑、ピットなどを検出した。曲輪の南東端では、2時期の出入口が確認され、古い段階のものは16世紀後半に埋め戻され、その上に新しい出入口が築かれていた事が明らかとなった。また曲輪西端にある土壘の構築方法の調査も行った。								
	穆佐城跡 曲輪8	多数の土坑、ピット、溝等を検出した。曲輪7との間の斜面では、2カ所において通路が確認できた。内1カ所では階段状遺構によつて両曲輪が結ばれていた事が明らかとなった。調査を行つた他の曲輪と比較すると遺物量が多く、特に茶臼や天目茶碗など茶に関する遺物が目立つ状況であった。ただし、破城際に曲輪7から転落してきたものが含まれる可能性があることから注意が必要である。								

宮崎市文化財調査報告書 第94集

史跡 穂佐城跡 I

穂佐城跡保存整備事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

2013年3月29日

発 行 宮崎市教育委員会